

(彼女は立ち上つてしまひました)。

- ① She has not sat down.

(彼はこしかけてしまつてはみません)。

- ⑤ Has she gone to the window?

(彼女は窓の所へ行つてしまひましたか)。

(1) 現在完了と過去との相違

日本語では英語の現在完了を過去と同様に譯すから、日本語を英語に譯す場合には誠に厄介な ^{テンス}Tense (時) で、特に初學者には誤りを生じ易いものである。それでは英語の現在完了とはどんなものかこれは今上に述べた如く、一種の現在であつて過去ではない。常に現在と何等かの關係を持つて居るものである。此の點が過去と違ふのである。過去にありては單に過去に於ける事物の動作又は状態を述ぶるに止り、決して現在の状態には説き及ぼさないのである。今一例を擧げて兩者の相違を述べてみよう。

- ① I studied English two years ago.

- ② I have studied English for two years.

①と②を比較するに、①は過去であり、②は現在完了であるが、①の文意は「二年前に英語を學んだ」と云ふ過去の事實を述べただけで、それで現在も英語を知つて居るか、或は忘れてしまつたかなどの點に就いては言及しないのである。然るに②にありては、「二年間英語を學んだ」それで今でも英語を知つて居ると云ふ現在の状態をも表はしてゐる、即ち云ひかへれば

^{ノウ}I know English. (私は英語を知つて居る)。

と云ふ意が含まれてゐるのである。

(2) 現在完了の用法

現在完了とは(或る動作をしたが現在はもう完了してゐて、

今はもうそのことをしてゐない), 即ち動作の完了を表はすのであると今述べたのであるが、實は他にも用法があるのである。ではその主なるものを次に述べてみよう。

(A) 動作の完了を表はす。

- ① ^{フロスト}Frost and ^{スノウ}snow ^{メルテッド}have ^{アウェイ}melted away.

(霜と雪が溶けてしまつた), (もう霜も雪もない)。

- ② ^{ファア}Father ^{デア}has ^{リターン}just returned.

(父は只今歸つたところです), (今内に居る)。

- ③ ^{ハヴ}Have you ^{ライティン}finished writing your letter?

(もう手紙を書いて了ひましたか)。

- ④ Yes, I ^{ハヴ}have just finished it.

(はい、只今書いて了ひました)。

- ⑤ No, I ^{ハヴ}have not finished it yet.

(いえ、まだ書いて了ひません)。

上例の如く「完了」を表はす場合には、**just, yet** 又は ^{オールレディ}**already** の如き副詞と共に用ひられることが多い。

(B) 動作の完了から其の結果たる現在の状態を表はす。

- ① I ^{ロースト}have ^{ナイフ}lost my knife.

(僕はナイフを失くした), 今持つてゐない。

- ② ^{ウィンタ}Winter ^{ゴン}has gone.

(冬が去つた), 今は冬ではない。

- ③ ^{スプリン}Spring ^{ハヴ}has come.

(春が來た), (今は春である)。

frost (frɒst) 霜。 melt (mɛlt) (溶ける)。 finish (fɪniʃ) 終へる。

上例①について見るに、(私はナイフを失つて、今は持つて居らない)と云ふ現在の状態を述べたもので、即ち I have no knife. の意を表はすものである。②も③もこれと同義で② Winter is not here. ③ Spring is here. = It is spring now. の意を表はすものである。

注意 上述の如く現在完了は現在の状態を述べるものであるから、明かに過去を表はす副詞、例へば yesterday, last week などの如き副詞と共に用ひてはならぬ。

- ① (私は英作文を書き終へました)。

I have finished writing my English composition.
フイニツシユト ライテイン コムポズイ シヤン

これは現在完了を用ひてよい。

- ② (私は昨日英作文を書き終へました)。

I have finished writing my English composition yesterday.

これは yesterday と云ふ明かに過去を表はす副詞があるから、現在完了を用ひては間違ひである、勿論過去でなければならぬ。

I finished writing my English composition yesterday.

- ③ 私の兄は昨年英国へ行きました。

My elder brother went to England last year.
エルダ ブラザア ウエント

My elder brother has gone to England last year. [誤]

又これと關聯して When ~? の場合にも現在完了を用ひてはならぬ。

- ④ (私は時計を落しました)。

I have lost my watch.
ロースト ウオツチ

- ② (いつ落しましたか)。

When have you lost it? [誤]

When did you lose it? [正]

- ③ (昨晚郵便局へ行く途中で落しました)。

I have lost it on my way to the post-office
ウエイ ポウストオフィス ラースト ナイト
 last night. [誤]

I lost it on my way to the post-office last night. [正]

just と just now;— just も just now も同意で(たつた今)位に譯したらよいだらう。所でこれを使ふに(現在完了)には just, 過去には(just now)を使へと云ふ規則があるのである。

- ① I have just come back. = I came back just now.
ヂヤスト バツク
 (僕はたつた今歸つた)。

- ② He has just written it. = He wrote it just now.
リトン ろウト
 (彼はたつた今それを書いた)。

但し現在を含む副詞は現在完了形と共に用ひることが出来る。

- ① We have been very busy to-day.
ブエリ ビズイ
 (今日は大變忙がしかつた)。

- ② We have had much rain this spring.
レイン スプリン
 (今年の春は雨が多かつた)。

- ③ The bell has rung already.
ベル らん オールレデイ
 (ベルはもう鳴つた)。

on one's way to (～へ行く途で)。busy (bizi) 忙しい。

① There have been ^{メニ フアイアエ レイトリ} many fires lately.

(此頃は火事が多かつた)。

(C) 経験を表はす。

① Have you ever ^{エボア スイーン マミ} seen a mummy?

(君はミイラを見たことがありますか)。

② I have never ^{スイーン デーブラ} seen a Zebra.

(僕は斑馬を見たことがない)。

③ I have once ^{ハーフ スイん} heard him sing.

(私は一度彼の歌ふのを聞いたことがある)。

以上は現在完了を用ひて過去の経験を表はすものである。而してかゝる場合には、ever, never, once の如き副詞と共に用ひられることが多い。

注意 go と come と be との現在完了形

go と come の現在完了形 have gone と have come は (行つてしまつた、だから此處にゐない)、(来てしまつた、だから今此處にゐる) と云ふ (完了) の意を表はす場合に使つて、他の動詞のやうに、同じ形で「経験」即ち (〜たことがある) の意を示すには (Be 動詞) の現在完了形、即ち have been を使はなくてはならぬ。

be 動詞が何故 go や come の代用をするかと云ふに、

① He was here yesterday. (彼は昨日此處にゐた)。と云ふ事は

② He came here yesterday. (彼は昨日此處に來た)。と云ふも結局同意で、(來た) から (ゐる) ののである。また

③ I will be there this afternoon.

(私は午後其處にゐる筈です)。

lately (léitli) 近々、此頃。 mummy (mámi) ミイラ。 zebra (zi:brə) 斑馬 (シウマイ)。

は go を使つて

④ I will go there this afternoon.

(私は午後其處に行く筈です)。

と云ふも、結局意味に變りはないわけである。斯んな風に go や come を使ふ代りに、be を使つてもよいわけである。而して、この be と云ふ動詞は、他の助動詞 (can, may, must, shall, will の類) と並ぶ時だけには、そのまま使つて、さうでない場合には、現在には is, am, are, 過去には was, were と變り、過去分詞には been となることは勿論である。であるから be の現在完了形は have (又は has) been で、それが (行つた事がある) と云ふ過去の経験を示す場合、go や come に代用されるのである。

注意すべきことは、go や come を使ふと

I went to Osaka. (私は大阪へ行つた)。

He came to Tokyo. (彼は東京へ來た)。

と云つた風に 'to' と云ふ前置詞を使ふのである。尤も here や there のやうな副詞が次に來る場合には、勿論前置詞は不用で、

I went there. He came here.

となるが、have (has) been の時には、

I have been in Osaka.

(私は大阪へ行つた事がある)、(大阪にゐた事がある)。

He has been in Tokyo.

(彼は東京に來たことがある)、(東京にゐたことがある)。

と云つた風に、to でなく、'in' (狭い地名の所には at) を使ふのである。これも here や there のやうな副詞には、不用

であることは勿論である。

I have been there. He has been here.

have (has) been to; 一所が、こゝにまた have (has) been to ~ として使ふことがある。尤もこれは全く別の意味を述べるのである。

I have been to Osaka.

(私は大阪へ行って(今歸つて)来ました)。

He has been to Tokyo.

(彼は東京へ行って(今田舎へ歸つて)来ました)。
と云つた風に、(行って(今歸つて)来た)と云ふ意を表はすのである。若し行つたまゝで、まだ歸つて来ないのであれば

He has gone to Tokyo.

(彼は東京へ行ってしまひました)(未だ歸つて来ません)。

I have come to Osaka.

(私は大阪へ来てみます)(未だ歸つて行きません)。
と云つた風に have gone, have come を使ふので、これは普通の(完了)である。

以上で go, come, be 動詞の完了形が分つたことゝ思ひます。尙(經驗)を表はす場合に二通りの云ひ方がある。

(君は獅子を見たことがありますか)。

① Have you ever seen a lion?

② Did you ever see a lion?

① は現在完了を用ひ、② は過去を用ひて經驗をたづねた文であるが、これは何れを用ひても意味は同じである。

(D) 或る状態が現在まで繼續して居ることを表はす。

① I have known him from a child.

(僕は彼を子供の時から知つてゐる)。

② I have lived here for ten years.

(僕は十年此處に住んでゐる)。

③ He has been ill since last month.

(彼は先月から病氣をしてゐる)。

④ The has been dead for three years.

(彼女は死んでから三年になる)。

上例は何れも或る状態が現在まで繼續してゐることを表はすもので、① にありては(知つてゐる)と云ふ状態、② にありては(住んでゐる)と云ふ状態、③ にありては(病氣である)状態が、④ にありては(死んでゐる)と云ふ状態が現在まで繼續せることを表はすものである。而して此の場合には、for, since の如き語と共に用ひられることが多い。

所が此所に注意しなければならぬことは、或る過去の時から、今まで繼續して(～してゐる)と云ふ意を示す、即ち現在完了が(或る状態が現在まで繼續して居る)ことを表はすには、覚えてゐますか、(現在の用法)の項で、現在の有様や動作を述べるには、現在進行形を使つて、進行形のいな動詞は現在形を用ひるのだと述べましたね、同じわけで、この繼續を表はすには現在完了進行形と現在完了(進行形のない動詞)を用ひるのである。

① I have been studying the book since I came here.

(私は此處に来た時からずっと本を讀んでみます)。

② What have you been doing? I have been making a toy.

(君はさつきから何をしておられるのですか、私はさつきから玩具をつくつておます)。

黒字体で表はしてある部分は、どれも現在完了進行形で**継続**を示してゐるのである。

ところが、進行形のない動詞は既に述べた如く、**be** (ある、ゐる)、**have** (持つ)、**live** (住む)、**love** (愛す)、**like** (好む)、**know** (知る) など云ふ動詞 (外にもまだある) がそれである。

だから、此等の動詞には、従つて現在完了進行形なるものはないのである。それ故、以前からずつと (ゐる、ある)、(持つてゐる)、(住んでゐる)、(知つてゐる) など、**継続**を表はすには、特に普通の**現在完了形**、即ち **have (has) been**, **have (has) had**, **have (has) lived**, **have (has) known** と云ふ形を使ふのである。

① **My father has been ill since Sunday.**

(父は日曜日からずつと病氣です)。

② **He has lived here these five years.**

(彼は五年ずつと此處に住んでおます)。

③ **I have known him since he was born.**

(私は彼が生まれた時からずつと彼を知つておます)。

どれも皆**継続**、即ち過去からの時今まで引續きしてゐること、または引續いての有様を述べてゐるのである。

継続を表はす場合特に**注意すべき事**が今一つある。例へば

(私が當地へ來てから五年になります)

と云ふやうな文は、これは次の如く二様に譯し得る。

① **Five years have passed since I came here.**

② **It is five years since I came here.**

① は年數を主語とした場合で、この時は **have passed** の如く現在完了を用ひるが、② の如く「時を表はす主語」**it** を主語とする場合には現在を用ひて **It is five years** の如く書くのである。兩者の用法上の差異に注意して貰ひたい。

(吾が校は創立以來廿五年になる)。

① **Twenty-five years have passed since our school was established.**

イスタブリツシユト

was established.

② **It is twenty-five years since our school was established.**

上例に示せる如く、**since** を用ひた場合、動詞の **Tense** (時) は、**since** の前にある文は現在完了又は現在を用ひ、**since** の後の文には過去を用ひることに注意せられたい。

(3) 過去完了と未來完了

過去完了は、或る過去を標準として、その時迄に完了したこと、経験したこと、**継続してゐた**ことを述べるのに使ふのである。

未來完了は、或る未來を標準として、その時まで**完了すべきこと**、**経験すべきこと**、**継続すべきこと**を述べるのに使ふのである。

① **I didn't know him. I had never seen him before.**

ダイドント ノウ

ネバア スイーン

ビフオー

before.

(私は彼を知らなかつた、前に一度も會つたことがなかつたから)。

② **I shall have done it by to-morrow morning.**

(私は明朝までにそれを仕上げて仕舞ふ筈です)。

① は過去完了の例で、② は未来完了の例であるが、初學生には六ヶ敷くもあるし、又さほど必要ありませんから、上級になつてから研究して貰ふ事として此所では單に此んな完了もあるのだと云ふことの説明に止めて置きたい。

(9) 時形の用法 (其の三)

進行形 [A] 現在進行形

(今何々してゐる最中である) と、今現にしてゐることを述べるには、進行形現在 (又は現在進行形) と云ふ動詞の形を使ふのであるが、それはどんな形かと云ふと

is (am, are) と現在分詞を並べたもの

これが即ち進行形現在なのである。だから (私は學校へ行く途中です) と云ふには、go (行く) の現在分詞、即ち go に ing を附けたもの going を、is か am か are と (こゝでは主語が I だから am である) 並べて

I am going to school.

とすればよいのである。

次の例の ① から ③ までの英文を御覽下さい。どれも am ~ ing と云ふ進行形現在の動詞が使つてあつて、(今何々してゐる最中) の意を述べてゐるのである。

① I am getting up.

(私は起きてゐる所です)。

② I am changing my clothes.

(私は私の着物を着換へてゐます)。

③ I am washing my face and hands.

(私は私の顔と手とを洗つてゐます)。

さて、以上の文は總て主語が I であるから、am ~ ing となつてゐるのであるが、主語が別の語の時は、am の代りに is または are を使ふべきは申迄もないことである。

① You are getting up.

② He is changing his clothes.

③ She is washing her face and hands.

主語が變ると、is, am, are の使ひわけはあるが、~ing 形の分は、いつも同じで、主語が變つたからとて、~ing 形を變へる必要は全くないのである。

次に (今何々するところですか) と問ふのであつたら、is, am, are を、主語の前に出すこと、次の如くするのである。

① Are you getting up?

(君は起きる所ですか)。

② Is he changing his clothes?

(彼は彼の着物を着かへる所ですか)。

③ Is she washing her face and hands?

(彼女は彼女の顔と手とを洗つてゐる所ですか)。

(今何々してゐる所でない) と、否定の意を述べるには、is, am, are と ~ing との間に not をはさんで、次の如く云ふのである。

① I am not getting up.

② We are not changing our clothes.

③ You are not washing your face and hands.

進行形現在の特殊の用法

(1) 未来の代用

go, come, start, leave の如き動詞の現在^は未来を表はす副詞と共に用ひられて、未来の意を表はすと(現在形)の項で述べて置いたが現在進行形にも同じ用法がある。

① He ^{リーブ}is ^{イン}leaving Tokyo for London ^{トモロウ}to-morrow

= He ^{ウィル}will ^{リーブ}leave Tokyo for London to-morrow.

(彼は明日倫敦へ向け東京を立つでせう)。

② I ^{アム}am ^{ゴーイング}going to the opera ^{トナイト}this evening.

= I ^{シャル}shall go to the opera this evening.

(今晚オペラに行きます)。

上例から判断して go, leave 等の如き動詞には、未来の云ひ表はし方に三通りあるわけである。

① He ^{リーブ}leaves Tokyo for London to-morrow.

(現在)

② He ^{ウィル}will leave Tokyo for London to-morrow.

(未来)

③ He ^{イズ}is leaving Tokyo for London to-morrow.

(進行形現在)

④ ^{ビー}Be going + ^{インフイニテイブ}Infinitive (不定詞)

不定詞とは動詞の原形に 'to' の附いた形である。即ち to speak, to go, to sleep の如き形を不定詞と云ふ。そこで be going の次に不定詞を用ひた形は、(將に ~ せんとする) と云ふ意で、近き未来を表はすのである。この意味からして、この形を(將然形)と云つてもよい。

① I ^{アム}am ^{ゴーイング}going to ^{ライト}write a letter.

(私は手紙を書く所だ)。

② It ^{イズ}is going to ^{レイン}rain.

(雨が降らうとしてみます)。

序にこれと同様に用ひられる形に (be ^{アバウト}about + Infinitive (不定詞) の形がある。上例は

① I ^{アム}am about to write a letter.

② It ^{イズ}is about to rain.

と云ふも同じで意味に變りはない。

次に掲げた例を比較研究して御覽なさい。

① I go to school every day. (現在)

② I ^{アム}am going to school now. (進行形現在)

③ I ^{アム}am going to Kyoto to-morrow. (未来)

④ I ^{アム}am going to ^{スタート}start for Kyoto. (未来)

⑤ I ^{アム}am about to ^{スタート}start for Kyoto. (未来)

① は現在の習慣を表はし、② は(學校へ行く途中なる)ことを表はす進行形現在、他は何れも未来を表はすものである。

〔B〕過去進行形

〔一般形式〕 ^{ワズ}was } + 現在分詞
^{ワーズ}were }

これは過去の或る定まれる時に動作の最中なりしことを表はすものである。is, am の代りに was, are の代りに were を用ひる。

① I ^{ワズ}was getting up. (私は起きる所でした)。

② We ^{ワーズ}were changing our clothes.

(私等は私等の着物を着かへてゐる所でした)。

③ You ^{ワーズ}were washing your face and hands.

(君(等)は君(等)の顔や手を洗つてゐる所でした)。

- ① He ^{セイイン} was ^{ペアランツ} saying good morning to his parents.
(彼は彼の両親にお早う御座いますと言つてゐる所でした)。
- ② She ^{テイキン} was ^{ブレクファスト} taking her breakfast.
(彼女は彼女の朝飯をたべてゐる所でした)。
- ③ They were going to school.
(彼等は學校に行く途中でした)。
- ④ Were you getting up? (君は起きる所でしたか)。
- ⑤ I was not changing my clothes.
(私は私の着物を着かへる所ではありませんでした)。

〔C〕 未來進行形

〔一般形式〕 will } + be + 現在分詞
shall }

これは或る未來の時に動作の進行中なることを表はすものである。

- ① He ^{スタデイイン} will ^{レスン} be studying his lesson if you go now.
(今行くと彼は勉強してゐるだらう)。
- ② She ^{クキン} will ^{ハウス} be cooking when you get to the house.
(家に着く時分には彼女は食事の仕度をしてゐるだらう)。

〔D〕 現在完了進行形

〔一般形式〕 have (has) been + 現在分詞

状態の繼續を表はすには現在完了を用ひることは既に述べ

た。即ち be, have, love, live 等の如き (～の最中) と進行形を持たない動詞に限り、繼續を表はすには現在完了を用ひたのであるが、^{リード} read, ^{ライト} write, ^{スピーク} speak, ^{ラーン} learn 等の如く ing を附し得る動詞が、過去より現在までの動作の經續を表はすには、進行形現在完了を用ひるのである。この事は現在完了の(繼續)の項に於て述べたのであるが、今一度繰返して説明して置く。

- ① It ^{レイニン} has ^{スインス} been ^{ラースト} raining ^{サンデイ} since last Sunday.
(この前の日曜日からずっと雨が降つてゐます)。
- ② What ^{ドウイン} have ^{ウワイル} you been doing all this while?
(君は今までずっと何をしてみたのですか)。
- ③ I ^{リーデイン} have ^{ノベル} been reading a novel.
(僕は小説を読んでゐました)。

〔E〕 過去完了進行形

〔一般形式〕 Had been + 現在分詞

〔F〕 未來完了進行形

〔一般形式〕 will } have been + 現在分詞
shall }

以上動詞の ^{テンス} Tense (時形) に就て大略の説明を終へました。此の(時形)は中々厄介で、然も大事なことであるから何度も繰返して讀んで物にして貰ひたい。

(10) ^{ボイス} (Voice) 態

前章で述べた完了の形、即ち現在完了、過去完了、未來完了は總て have (又は has) 或は had 或は shall (又は will) have の次に動詞の第三番目の形、即ち過去分詞 (Past Participle) ^{パースト} ^{パーティ} を添へて作つたのであるが、こゝに今一つこの過去分

詞を是非使はねばならぬ場合がある。それは動詞の受身の形なのである。例へば

太郎は 次郎を 愛してゐる。

と云ふことを

次郎は 太郎に 愛されてゐる。

と云つても、結局同じことで、ただ表から言ふと、裏から言ふとの相違である。併し「太郎は次郎を愛してゐる」と云ふ文では、文の主語の「太郎」が、「愛してゐる人」即ち動作者であるが、「次郎は太郎に愛されてゐる」と云ふ文の主語「次郎」は、動作者でなくて、太郎に「愛されてゐる人」即ち被動作者、受身の人なのである。

斯んな風に動詞が

- ① 主語のなす動作を表はす場合と
- ② 主語の受ける動詞を表はす場合と

文の書き方、即ち動詞の使ひ方が同じではいけなくなるのである。動詞の形を全然變化させてしまはねばならぬ事になるのである。

文法ではこの二様の變化の事を態ぶオイス(voice)の變化と名づけ①の如く「愛してゐる」と云つた風に、主語の動作を言ひ表はすために使ふ動詞の形を能動態アクテイブ (Active Voice) とか、受身でない形など云ひ、これに對し、②の如く、「愛されてゐる」と云つた風の、他からの動作を受けることを言ひ表はすに使ふ動詞を受動態パスイブ (Passive Voice) とか、受身の形など云つてゐるのである。

Voice (vois) 態。Active (áktiv) Voice [能動態]。Passive (pásiv) Voice [受動態]。

(11) 受動態の作り方

扱、動詞には此通り二種の態の變化があるのであるが、其中の能動態には、普通の動詞を其儘用ひるのである。例へば「太郎は次郎を愛してゐる」と云ふことを、英文に作つて見て下さい。「愛してゐる」は love であるが、主語が單數の「太郎」だから、動詞の現在形は、その語尾に 's' を附けた形、即ち loves と云ふのを使はねばならぬ。

① Taro loves Jiro.

となる。

それでは、「次郎は太郎に愛されてゐる」と云ふ受身の意を、英文に書いて見る。

「愛されてゐる」と云つた風の受身の形は
is (am) are + 過去分詞 = 受身の形

即ち、主語が I には am を、you か複數の語には are を、I, you 以外の單數の語には is を用ひる。尤も前に述べた如く、この are, am, is は“Be 動詞”の變化で現在の場合であるが、過去には was (am, is の代りに) 又は were (are の代りに) と變化して用ひられ、過去分詞には been として用ひられ、それから shall, will, can, may, must, need not 等の助動詞と共に be のまゝで用ひられるのである。

で、この“Be 動詞”の變化と、過去分詞とを並べると、それで「何々される」と云ふ受身の意を表はすことになり、love は規則動詞であるから、その語尾に ed (いや、語尾が 'e' だから、'd' だけ) を附けた形即ち loved を、主語は單數の「次郎」から be 動詞は is となり、is と並べて……(is loved) ……とすると、それで「愛されてゐる」と云ふ意味を表はすのである。だから全文は

② Jiro is loved by Taro.

とすればよい。

【注意】 此場合 **is** はあたりまへの (～である) の意でなくて、(～せらる) と云ふ意味になり、**loved** に附屬するのである。依てこの **is** はただの動詞でなく、既に述べた完了の時に用ひた **have** (又は **has**) が助動詞であると同様に一種の助動詞である。つまり “**be**” は (～である) の意味の時は普通の動詞で、この受動態を作る爲めに過去分詞に添へて使はれる時は助動詞なのである。併し斯んな風に助動詞として用ひられる場合でも、I には **am**, you には **are**, 其他三人稱單數には總て **is**, また複數には總て **are**, それから過去には **is, am** の代りには **was** で、**are** の代りには **were** と云つた風に、總て普通の (～である) の意味に用ひられる時と其用法は更に變りはないのである。

① 能動態 Taro loves Jiro.
主語 目的語

② 受動態 Jiro is loved by Taro.
主語 目的語

この文には大分違つてゐる點があります。第一に能動態では目的語たるものが、受動態には主語になり、能動態では主語たるものが、受動態には目的語になつて、其位置を轉倒するのである。次に受動態の目的語の前には必ず **by** (～に) と云ふ前置詞を置かねばならぬのである。

斯んなわけで主語と目的語が轉倒するから、目的語のない動詞、即ち自動詞には受動態はないわけである。換言すれば態の變化をする動詞は目的語を有する動詞、即ち他動詞に限るのである。

① { ^{エボリボダイ} Everybody ^{ラブズ} loves him. (能)
^{ラブド} He is loved by everybody. (受)
(彼は誰にも愛せられる)。

② { ^{ストレイト} The ^{ドウボア} Strait of ^{ユーナイツ} Dover ^{イングリツシユ} unites the English
^{チャヌル} Channel and the ^{ノーサ} North ^{スィー} Sea. (能)

The English ^{チャヌル} Channel and the ^{ノーサ} North Sea **are**
^{ストレイト} united by the ^{ドウボア} Strait of Dover. (受)

(イギリス海峡と北海とは、ドーヴァー海峡にて連結せられる)。

③ { ^{スィーフ} A thief ^{ストウル} stole ^{パース} a purse. (能)

A ^{ストウルン} purse **was** stolen by a thief. (受)

(財布が一つ窃盗に盗まれた)。

④ { ^{ティーチャ} The teacher ^{プレイズ} will praise me. (能)

I **shall be** praised by the teacher. (受)
(僕は先生に賞められるだらう)。

⑤ { ^{エニボダイ} Anybody ^{ソルブ} can solve ^{プロブレム} this problem. (能)

This problem **can be** solved by anybody. (受)
(この問題は誰にでも解かれる)。

⑥ { ^{メイド} They ^{ハピ} have made me happy. (能)

I **have been** made happy by them. (受)
(私は彼等の爲に幸福にされた)。

⑦ { ^{ペインテイツド} He ^{ビクチャ} must have painted this picture. (能)

This picture **must have been** painted by him. (受)
(この繪は彼が書いたに違ひない)。

Strait [streit] 海峡。 **Channel** [tjæn] 海峡。 **North Sea** [北海]。 **unite** [ju:náit] 結合させる。 **thief** [θi:f] 窃盗。 **purse** [pɜ:s] 財布。 **steal** [sti:l] 盗む。 **stole** [stoul], **stolen** [stóulən]。 **praise** [preiz] 賞める。 **solve** [solv] 解く。 **problem** [próblem] 問題。 **paint** [peint] 畫く。

- ⑤ { ^{スイスタ} My sister ^{ペインティン} is painting a picture. [能]
 A picture is being painted by my sister. [受]
 (僕の姉は繪を書いてゐる)。

上例で分るやうに、態の變化をする動詞は他動詞に限るのである。所が

自動詞 + 前置詞 の形式、即ち自動詞が次に前置詞を附屬させて、それで他動詞と同様の意味を表はす事がある。例へば
 (私は山田君を訪問した)

と云ふ (訪問した) に他動詞 visited を用ひて

^{ボイジイテッド}
 I visited Mr. Yamada.

と云つてもよいが、この visited の代りに ^{コールド} called (呼んだ) と云ふ自動詞に ^{アポン} on (又は upon) と云ふ前置詞を付け called on 又は called upon とすれば、visited と同じに (訪問した) と云ふ他動詞の意味になるのだから

I called on (upon) Mr. Yamada.

としても同じ事である。だから此の場合其受動態に勿論作られるわけである。

{ Mr. Yamada was visited by me.
 { Mr. Yamada was called on by me.

斯んなわけで、自動詞は、次に前置詞を従へて他動詞の意味を表はす時 (文法ではこれを前置詞附動詞 = ^{プレポジショナル} Prepositional Verb と云ふが) には、他動詞同様、態の變化をする事が出来るのである。

注意せねばならぬ事は、受動態になつた時でも、肝心の前置詞は決して略してはいけない事である。即ち上例の was called

Prepositional [prepəziʃənl] Verb [前置詞附動詞]。

(又は upon) の on (又は upon) を省いてはならない。

- ① { ^{セント} We sent for the doctor at once. [能]
 { ^{ドクタ} ^{ワンス} The doctor was sent for at once. [受]
 (醫者を直ぐに迎へた)。

- ② { ^{モウタカー} ^{ランノウバア} ^{チャイルド} A motor-car ran over a child. [能]
 { ^{ラン} A child was run over by a motor-car. [受]
 (子供が自動車に轢かれた)。

- ③ { ^{ラーフト} He laughed at me. [能]
 { I was laughed at by him. [受]
 (私は彼に笑はれた)。

- ④ { ^{ライ} We can rely on him. [能]
 { ^{リライド} He can be relied on. [受]
 (あの人は當にすることが出来る)

- ⑤ { ^{ピープル} ^{スピーク} ^{イル} People speak ill of him. [能]
 { ^{スポウカン} He is spoken ill of (by people). [受]
 (あの人は人に悪く言はれる)。

^{テイク} ^{ケア} You must take good care of this book. [能]

^{テイカン} This book must be taken good care of. [受]
 (この本は大切にしなければならぬ)。

特に注意すべき事柄

以上申述べた事で態と云ふことはどんな事であるか、と云ふ事に就て述べた。次に特に注意すべき事柄を述べて見やう。

send for [呼びにやる]。 run over [轢く]。 motor-car [móutəka:] 自動車。 laugh [la:f] at [嘲笑する]。 rely [rilái] on [又は upon] 當にする、頼る。 speak ill of [悪口を云ふ]。 take good care of [大切にする]。

(1) 動詞の時の注意

能動態を受動態に改める時、動詞の時を變へてはならぬ。即ち原文の動詞が**現在**であれば、受動態に直しても矢張り**現在**であり、原文が**過去**であれば、受動態も**過去**、**未來**であれば矢張り**未來**と云つた風にせねばならぬ。能動態から受動態へと既に十數例題挙げたので、この事は既に呑み込めた事と思ふが、次に参考のため(主語を **I** として、動詞 **tell** を使つて)例を擧げて見ませう。

- | | |
|----------------------|--------------------------------|
| ① I tell. | I am told. [現在] |
| ② I told. | I was told. [過去] |
| ③ I shall tell. | I shall be told. [未來] |
| ④ I have told. | I have been told. [現在完了] |
| ⑤ I had told. | I had been told. [過去完了] |
| ⑥ I shall have told. | I shall have been told. [未來完了] |
| ⑦ I am telling. | I am being told. [進行形現在] |
| ⑧ I was telling. | I was being told. [進行形過去] |

總計、動詞は態の變化八種あるわけである。受身の進行形は現在形と過去形の二つだけである。

以上は主語を '**I**' とした例であるが、主語に依り "**be**" が變化することは既に御承知の事であるから、此處ではこれだけに留めて置く。

(2) 数を一致させること

次に注意すべきことは、能動態を受動態に變じる際、**主語と動詞の Number (數) を一致させること**である。

- | | |
|---|---|
| ① | Steam drives trains and ships. [能] |
| | Trains and ships are driven by steam. [受] |

steam [sti:m] 蒸氣。drive [draiv] 驅る, 運轉する。

(蒸氣は汽車や汽船を動かします)。

- | | |
|---|--|
| ② | Fire burns down our houses. [能] |
| | Our houses are burnt down by fire. [受] |

(火は吾々の家を焼きます)。

上例はいづれも能動態の主語は單數であるから、**drives**, **burns** の如く動詞にも '**s**' を付けるが、受動態に於ては、主語がいづれも複數だから、動詞も **are driven**, **are burnt** と複數形を用ひねばならぬのである。

(3) 省いてよい目的語

能動態の主語、即ち動作の行爲者が **we**, **you**, **one**, **they**, **people** など漠然と一般的の意味を有する時は、受動態に直す時には此等の語は省略する。反對に受動態から能動態に變へる場合には主語を適當に (**they** なり, **you** なり, **we** なり, **people** なり) 定めなければならない。

- | | |
|---|---------------------------------------|
| ① | People are building a house here. [能] |
| | A house is being built here. [受] |

(人が此所に家を建てゝゐる)。

[主語] の「人々」と云ふ意味は「誰れと誰れと誰れと」と、其「人々」と云ふ語に含んで居る人が明かな場合でなく、唯漠然「人々」と云ふ意味である。

又 **People** の代りに **They** を用ひて

- | | |
|---|-------------------------------------|
| ② | They are building a house here. [能] |
| | A house is being built here. [受] |

としてもよい。つまり受動態の文で、最後に **by** と其事をする人が明示してない場合は總て **by them** なり **by people** なりが略されてあつて、其 **them** や **people** は漠然「人々」、「世

人」などの意味だと思へばよい。

尤も漠然「人々」、「世人」などの意を表はすにも、場合に應じて they や people の外に we (我々人間), you (諸君等總て人は) など用ひる事もあるが、受動態には矢張りその變化した by us や by you も省略してしまうのが普通である。

- ③ $\left\{ \begin{array}{l} \text{We see the moon and the stars at night. [能]} \\ \text{The moon and the stars are seen at night [受]} \end{array} \right.$ (月と星は夜見える)。

- ④ $\left\{ \begin{array}{l} \text{You can trust him. [能]} \\ \text{He can be trusted. [受]} \end{array} \right.$ (あの人は信頼出来る)。

又は one を用ひて

- ⑤ $\left\{ \begin{array}{l} \text{One should keep one's promise. [能]} \\ \text{One's promise should be kept. [受]} \end{array} \right.$ (約束は守らなければならない)。

と云つてもよい。以上述べた例題中の受動態の文の最後にはそれぞれ by people, by them, by us, by you, by one が略されて居るのである。

(4) 二重目的の場合

他動詞には二重目的 (Double Object) と云つて、目的を二つとるのがある、例へば

- ① He gave me a book. (彼は私に本を一冊くれた)。
主語 動詞 間接目的 直接目的
- ② I teach him English. (私は彼に英語を教へる)。
主語 動詞 間接目的 直接目的

trust [trʌst] 信頼する。 promise [prɒmɪs] 約束。 keep [ki:p] 守る。 Double Object [dʌbl ɔbdʒɪkt] 二重目的。

斯んな風に間接目的と直接目的と二つの目的をとるのである。ではこれを受動態に直すには間接、直接何れの目的を主語とすればよいかと云ふに、それは何れを主語としても差支ないのである。従つて受動態の文は直接目的を主語とした文と、間接目的を主語とした二つの文が出来るわけである。

- ① He gave me a book. [能]
 $\left\{ \begin{array}{l} \text{(A) I was given a book by him. [受]} \\ \text{(B) A book was given me by him. [受]} \end{array} \right.$

- ② I teach him English. [能]
 $\left\{ \begin{array}{l} \text{(A) He is taught English by me. [受]} \\ \text{(B) English is taught him by me. [受]} \end{array} \right.$

- ③ He told me a funny story. [能]
(彼は私に面白い話をしてくれた)。

- $\left\{ \begin{array}{l} \text{(A) I was told a funny story by him. [受]} \\ \text{(B) A funny story was told me by him. [受]} \end{array} \right.$

〔注意〕 1) 上例の give, tell, teach の外に二重目的を持つことの出来る動詞を挙げると (ask 「たづねる」, bring 「持つて来る」, buy 「買ふ」, lend 「貸す」, offer 「提供する」, send 「送る」, show 「示す、教へる」, write 「書く」等である。

〔注意〕 2) 能動態に主語の 'I' や 'he' は受動態には目的語になるから、主語のままの I や he ではいけないので "me, him" と變化させねばならぬ。それと同じ理由で目的語の 'him' や 'me' は主語になれば "he, I" と變化させねばならぬ。斯んな風に態の變化をする時には、主語及び目的語の代名詞が其主語となり目的語と變るに依つて形を變化させねばならぬ事を忘れてはならぬ。

主語に	I	は目的語に	me
”	we	”	us

funny [fʌni] 面白い。

”	you	”	you(變化なし)
”	he	”	him
”	she	”	her
”	they	”	them
”	it	”	it(變化なし)

但し名詞は總て同じ形である。名詞は主語、目的語同形であるから、變化の必要はないのである。上例の代名詞 **you** も **it** も同形で變化する必要はない。

(5) **by** 以外の前置詞を用ひる場合

今迄述べた所に依ると、受動態の目的語の前には、いつでも前置詞は **by** が附くやうに思へるが、決して常に **by** が附くとは限らない。場合に應じ意味により **for** や **of**, **to**, **from** など、他の前置詞が用ひられることがある。唯大概の場合 **by** が用ひられるのである。

① A desk is made ^{デスク} ^{メイド} by a ^{カーペンタ} carpenter.
(机は大工に造られる)。

② I was given this book ^{ギボン} by him.
(私は彼にこの本を與へられた)。

斯んな風に **by** の次には、其「作る」、「與へる」など云ふ事をする人、即ち行爲者が來るのである。但し次の場合は **by** でなく **to** を用ひる。

③ Everybody ^{エブリボデイ} knows ^{ノウズ} him.

He ^{ノウズ} is known to everybody.
(彼は誰にも知られてゐる)。

carpenter [kɑ:pɪntə] 大工。

次が行爲者でない場合、例へば

④ This desk was made of ^{ウツ} wood.
(この机は木で造られた)。

⑤ Butter is made from milk.
(バターは牛乳で造られる)。

と云つた風に、次に其「作る」材料を表はす場合には

① 「木が机に」と云ふ風に木の形が机になつても其儘である場合には **of** を

② 「牛乳がバターに」とか「麥がビール」と云ふ風に材料「牛乳」、「麥」の原形がなくなつてしまつて居る時には **from** を用ひるのである。

又今上に述べた云ひ方と反對に

⑥ Milk is made into butter.
(牛乳はバターに造られる)。

⑦ Barley is made into ^{ビア} beer.
(麥はビールに造られる)。

と云つた風に、原料が「何々に」製造されるといふことを表はすには **into** を用ひる。

また

⑧ Yamada was killed ^{キルド} with a ^{ソード} sword.
(山田は劍で殺された)。

⑨ This picture was painted ^{ピクチャ} with a ^{ペインティッド} brush.
(この繪は筆で描かれた)。

斯んな風に「殺す」、「描く」の道具を表はす時には **with** を

barley [bɑ:li] 大麥。 sword [sɔ:d] 劍。 paint [peɪnt] 畫く。
brush [brʌʃ] 刷毛(?)。

用ひる。

また

- ⑩ It was given to me. (それは私に與へられた)。
 ⑪ It was taken for you. (それは君の爲めに取られた)。

斯んな風に「與へる」、「とる」の目的(～の爲めに)と云ふのを表はすには 'to' 又は 'for' を用ひるのである。

(7) 英作文の場合特に注意すべき點

日本語では ^{アクティブ}Active (能動態) に云ふも、英語では之を ^{パッシブ}Passive (受動態) に書かなければならぬ場合がある。

次に二三の例を擧げて置く。

- ① A goods train was derailed near Hiroshima Station last night.
 (昨夜貨物列車が廣島驛附近で脱線した)。
 ② Many fishermen were drowned off Tosa.
 (多くの漁夫が土佐沖で溺死した)。
 ③ I am surprised to hear of his mother's death.
 (彼の母の死んだのを聞いて驚きました)。

(脱線する), (溺死する), (驚く), 「喜ぶ (be pleased)」などの日本語は, ^{アクティブ}Active (能動) であるが, 英語では上例の如く ^{パッシブ}Passive (受身) で表はさねばならぬから, 特に注意して貰ひたいものである。

derail [diréil] 脱線させる。goods [gudz] train [貨物列車]。fisherman [fiʃəmən] 漁夫。drown [draun] 溺死させる。off [～沖で]。surprise [səpraíz] 驚かす。

(12) (助動詞 ^{オーグズイリヤリ}Auxiliary ^{ボアープ}Verb)

助動詞

will, shall, may, can, must, do, ought, need 等

動詞に添えて, それに特殊の意味を附加する語のことを助動詞 (^{オーグズイリヤリ}Auxiliary ^{ボアープ}Verb) と云ふ。その主なるものは

shall, will, be, do, have, can, may, must, need, ought である。この中 be, do, have, need は, 普通の動詞として使はれるが, 其他の語は助動詞専門で, 他の品詞としては使はれないのである。

(1) shall と will

この二語は、未來の意味を表はす時に、動詞に添へる助動詞で、その用ひ方は、既に「未來時制」の項で述べてあるから、ここに繰返して説明しない。

(2) would と should の用法

shall の過去形は “should” で、will のは “would” である。後章に述べる (時の照應) の規則や、(假定法) の規則などに依り、一方の動詞が過去である時などには、この would, should を will, shall に代用するのである。かく云へば頗る簡単なやうだが、どうしてもどうしても、これが用法は、なかなか厄介なものである。(時の照應) や (假定法) に用ひられる場合は、同項で了解してもらふ事とし、こゝでは大體の用法について特に注意すべき場合を説明する。

Auxiliary Verb [ɔ:gziljəri vɔ:b] 助動詞

(1) would

〔A〕 (would = used to)

即ち過去の習慣を表はす。

① He would often call on me at the office.
ウド オーフン コール

(彼はよく事務所へ私を訪ねて来たものだ)。

② He would sit idle for hours.
スイット アイドル アウアズ

(彼は幾時間も何もしないでぼんやりしてゐることがよくあつた)。

かく would が過去の習慣を表はす場合には sometimes (時時), often (よく, 屢々) の如き副詞を使ふことが多い。

(B) 意志, 願望を表はす。

③ One who would succeed must work hard.
サクスイード マスト ワーク ハード

(成功せんと欲する者は一心に勉強しなければならぬ)。

④ I would rather die than live in disgrace.
ラーナア ダイ リバ ディスグレイス

(生きて辱を受けるよりは死んだ方がましだ)。

⑤ What would you have me do?

(君は僕にどうして呉れと言ふのか)。

(C) 過去に於ける拒絶を表はす。

⑥ I offered him some money, but he would not take it.
オファド サム マニ

(幾らか金を提供したが, 彼はそれを受けることを肯ぜなかつた)。

would=used to [もとはよく~したものだ]。sit idle [何もしないでぼんやりしてゐる]。succeed [sək'si:d] 成功する。would rather [rú:ðə] 寧ろ~する方が良い。disgrace [disgréis] 恥辱, 不名誉。have me do [私にして貰ふ]。offer [ɔfə] 提供する。

(D) 婉曲を表はす。

⑦ Would you kindly show me the way?
カインドリ ショウ ウエイ
(道を教へて下さいませんか)。

2) should

(A) (~すべきだもの)。義務を表はす。

① You should obey your parents.
オベイ ペアランツ
(両親には服従すべきである)。② We should respect our superior.
リスペクト ショピアリア
(吾々は目上の人を尊敬すべきだ)。③ You should thank him for his kindness.
サアルク カインドニス
(君は彼の親切に對して感謝すべきである)。

(B) 當然を表はす。

④ It is natural that he should say so.
ナチヨラル セイ
(彼がさう言ふのは當然である)。⑤ It is right (good, well, proper, important) that you should have done so.
ライト グド ウエル プロパ イムポータント

(君がさうしたのはよい—宣しい—當り前の—大事な—ことである)。

⑥ It is necessary that I should have the money.
ネスイサリ

obey [obéi] 従ふ。parents [péarənts] 両親。respect [rispékt] 尊敬する。superior [sjupíəriə] 目上の人。thank [θæŋk] 感謝する。kindness [káindnis] 親切。natural [náetʃurəl] 當然の。right [rait] 正しい。proper [própe] 適当な。important [impó:tənt] 重要な。necessary [nésisəri] 必要な。

(此金は是非なければならぬ)。

(C) 意外を表はす。

- ⑦ I am surprised that he should have failed in the entrance examination.

(彼が入學試験に落第したとは驚いた)。

- ⑧ I wonder such a man as he should have succeeded.

(彼のやうな人が成功したとは不思議だ)。

- ⑨ It is strange that he should have broken his promise.

(彼が約束を破つたとはをかしい)。

(D) (I should like) = (～したいものだ)。

婉曲を表はす。

- ⑩ I should like to go abroad.

(僕は洋行したいものだ)。

- ⑪ I should like to know on what ground you chose that boy.

(どう云ふ理由であなかがあの少年を選んだかを
知りたいものです)。

(E) (Lest~should) = (～せぬやうに)

surprise [səpraɪz] 驚く。 fail [feɪl] 落第する。 entrance [ɛntrəns] examination [入學試験]。 wonder [wʌndə] 驚く, 不思議がる。 strange [streɪndʒ] 奇妙な。 promise [prɒmɪs] 約束。 go abroad [əbrɔ:d] 洋行する。 ground [graʊnd] 理由。 chose [tʃoʊz] は choose [tʃu:z] 選ぶの過去。

消極目的を表はす。

- ⑫ He works hard lest he should fail.

(彼は失敗しないやうに一心に勉強する)。

- ⑬ This was done lest any one should take it away.

(誰かがそれを持ち去らないやうにこれがなされました)。

(3) Be の用法

此語は(ある),(ゐる)などの意味を示す時は、普通の動詞である。そして次の意味を表はすために、他の動詞に添へて使はれる時は即ち助動詞としての役目をしてゐるのである。

① be + 現在分詞 = (進行形)

② be + 過去分詞 = (受身の形)

助動詞として使はれる時も、普通の動詞の場合と同じに、'be' には次の五つの形がある。

原形(根形) 'be'	現在形 "is, am, are"
過去形 "was, were"	現在分詞 'being'
過去分詞 'been'	

(4) Do の用法

この語も(なる),(まにあふ)などの意味に使はれる時はそれは普通の動詞で、助動詞ではない。助動詞としての 'do' は

(A) 疑問文

- ① Do you like to hear the waves?

wave [weɪv] 波。

(君は波の音を聞くことを好みますか)。

② Does he ^{スピーク}speak English?

(彼は英語を話しますか)。

③ How **did** you ^{スベンド}spend the ^{ホリデイズ}holidays?

(君は休暇をどうして過しましたか)。

のやうな疑問文、但し“be”又は“have”の時は普通 do を用ひない。

④ Is she an ^{アメリカン}American ^{ガール}girl?

(彼女はアメリカの少女ですか)。

⑤ Have you many ^{メニ}brothers ^{ブラザーズ}?

(君は兄弟が澤山ありますか)。

又疑問詞が主語又は主語の修飾語となつてゐる時の肯定の疑問文にも do を用ひない。

⑥ Who **told** you so?

(誰が君にさう言ひましたか)。

⑦ Which ^{ワン}boy ^{プライズ}won the prize?

(どの少年が入賞しましたか)。

(B) 否定文

⑧ I **do not** ^{ビリーヴ}believe it.

(僕はそれを信じない)。

⑨ I **did not** go there.

(僕はそこへ行かなかつた)。

spend [spend] 過す。holiday [hɔlədeɪ] 休暇。won [wɒn] は win [wɪn] [勝つ、得る] の過去。prize [praɪz] 賞。believe [bɪli:v] 信ずる

のやうな否定文にも do を用ひる。否定文の時も“be”と“have”とは例外である。

⑩ He **is not** ^{ブエリ ウェル}very well.

(彼はひどく丈夫でない)。

⑪ I **have not** any ^{エニ}money ^{マニ}with me. ^{ウイヂ}

(私は金を一文も持合せてゐない)。

否定の語が not でなく ^{ネバフ}never の時には do を用ひない。

⑫ I **never** saw him.

(私は彼に會つたことがない)。

以上述べた疑問文並に否定文を作る場合に使はれる外に

(C) 強勢の意を表はす場合

⑬ Do **tell** me what he ^{セツド}said.

(彼の言つたことを是非話して下さい)。

⑭ I **did** ^{トライ}try, but ^{ギブン}have given it up.

(僕は試みることは試みたが、それを中止した)。

⑮ The ^{ウルフ}wolf **did** come.

(狼は本當に來た)。

といつた風の強勢の意を表はす時に使はれるのである。また

(D) 代動詞 (Pro-verb)

⑯ I **do not** ^{ライト}write ^{クワイツクリ}so quickly as he **does**.

(私は彼ほど早く書かない)。

⑰ I **know** ^{ノウ}as much ^{マツチ}as they **do**.

never [névə] 決して～ぬ。give~up [見捨てる、断念する]。wolf [wulf] 狼。Pro-verb [代動詞]

(私は彼等と同じ位に知つてゐる)。

㉔ Did you go there? — Yes, I did.

(君はそこへ行つたか。—はい、—行きました)。

のやうに、問ひの動詞をくりかへす代りに、又同じ動詞を繰返す代りに使はれることもある。㉒の does は writes の、㉓の do は know の、㉔の did は went の代動詞である。

(5) Have の用法

この語も(持つ)の意を示す時は、助動詞でなくて、普通の動詞である。助動詞としての have は

(have + 過去分詞) = (完了形)

この使ひ方をする時の have が助動詞の役目をしてゐると云ふのである。そして、この役目の外には、助動詞をしての have の役目はないのである。

原形(根形) 'have'	現在形 "have, has"
過去形 'had'	現在分詞 'having'
過去分詞 'had'	

さて、以上の語の使ひ方は、既に今までも度々説明した事もあり、諸君も御存知の事と思ふから、大體にとどめたが、これから以下は、ずつと詳しく述べたいと思ふ。

(6) Can の用法

① ~できる ② 全體~か

Can と云ふ語は、be や have や do の様に、助動詞にも本動詞にも、どちらにも使はれる語でなくて、必ず助動詞にのみ使はれる語である。

Can は普通は (~ことが出来る)、(~能ふ) と云ふ意を表はすに使はれるが、問ひの文と、否定の文とに使はれてゐる

can には、もつと外の意味に使はれる事があるのである。

① In England you can send a wire from almost any post office.

(英國では殆んどどの郵便局からでも電信を打つことが出来る)。

② Boys cannot all become great men, but they can all become good men.

(子供等は皆偉い人になる譯にはいかないが、善人になることは出来る)。

③ Can he run fast? No, he cannot run fast.

(あの男は早く走る事が出来るか。いや、あの男は早く走る事が出来ない)。

以上の文中の can は何れも (~できる) の意に使はれてゐるが、同じ can ~: や can not でも、

④ Can he be clever? No, he can not be clever.

なる文中の can は (あの男は全體利巧でせうか。いや、利巧の筈がない) で (全體~か)、 (~の筈がない) の意を表はしてゐるのである。即ち前者は「疑惑」を表はし、後者は「否定的推定」を表はしてゐるのである。

斯んな風に、問ひの文と、否定文中の can には、二つの別の意味があるから、どちらの意味に使はれてゐるか、よく前後の場合を考へて見ねばならぬ。尤も肯定文、即ち問ひでも否定でもない文中の can は、いつでも (~できる) の意味にのみ用ひられるのである。

become [bikám] なる。almost [3:lmoust] 殆んど。wire [waia] 電信。clever [kléva] 利巧な。

疑 惑

- ① Can it be true?
(それは本当だろうか)。
② What can this be?
(これは何だろうか)。

否定的推定

- ③ It cannot be true.
(それは本当である筈がない)。
④ This cannot be a cow.
(これは牛である筈がない)。

尙 Cannot には次の如き慣用句がある。

- ① { Can not but + 原形 } ~せざるを得ない。
② { Can not help + ~ing }

- ① I cannot but admire his bravery.
キヤノット バット アドマイア ブレイブアリ

- ② I cannot help admiring his bravery.
ヘルプ アドマイアリン
(彼の剛勇には感心せざるを得ない)。

- ③ Cannot ~ too (～しすぎることはない)。

- ④ You cannot be too careful.
トゥ ケアフル
(いくら注意しても尙足りない)。

(7) May の用法

- may ~? ① ~てよいか。 ② ~かも知れぬか。
may ~ ① ~てよい。 ② ~かも知れぬ。
may not ~ ぬかも知れぬ。(must not ~ならぬ)。

true [tru:] 本當な。 admire [ædmáɪə] 感心する。 bravery [bréivəri] 勇敢。

may と云ふ語も, can と同様, 助動詞のみに用ひられて, 決して本動詞には使はれない。

此語にも二つの意味がある, どちらの意味に使はれてゐるかは, 前後の場合から考へて區別するより外はないのである。

その二つの意味とは, 一つは(～てよい)で, 一つは(～かも知れぬ)である。問ひの文で

- ① May I go back now?
バック ナウ

- ② May he come here soon?
スーン

同じ May ~? でも, ① は(私はもう歸つてよろしいか)で, ② は(あの男はぢきに此處へ来るかも知れないでせうか)である。同じわけで, 肯定文で

- ① Yes, you may go back now.

- ② Yes, he may come here soon.

① は(はい, 君はもう歸つてよろしい)で, ② は(はい, あの男はぢきに此處へ来るかも知れません)である。否定文は

- ① No, you must not come back now.

- ② No, he may not come here soon.

斯んな風に, ① では may を使はないで, must に not をつけて使ふのである。それで(いや, まだ歸つてはいけない)の意である。② では矢張り may に not を付けて使ふのである。(いや, あの男はぢきに此處に來ないかも知れぬ)である。

- ① May I put some sugar in it?
プト サム シュガ
(少し砂糖を入れてもよろしいか)。

- ② May I go out for a walk?
アウト ウォーク
(散歩に出てもよろしいか)。

- ③ Your ^{ハウス} house ^{テイク} may ^{ファイア} take fire and your ^{マネ} money ^{バーンド} may be burned.

(君の家は火事がいくかも知れない, そして君のお金が焼けるかも知れない)。

- ④ A ^{グレイト} great ^{スコラ} scholar is not always a ^{オールウイズ} good ^{ティーチャ} teacher.
He ^{ノウ} may ^{ハウ} not know ^{ティーチ} how to teach.

(大學者必ずしも良教師ではない, 彼は教授法を知らぬかも知れない)。

慣用句

(May well) = (～も尤もである)。

- ⑤ He ^{メイ} may ^{ウエル} well be ^{プラウド} proud of his ^{サン} son.
(彼はその息子を自慢するのも尤もである)。

(8) Must の用法

must ~? ~ねばならぬか。

must ~ ① ~ねばならぬ。 ② ~に違ひない。

(need not ~に及ばぬ) (can not ~の筈がない)

この語も, 次の通り二つのちがった意味を表はすのに使はれるのである。

① ~ねばならぬ。 ② ~にちがひない。

① Must I go? (行かねばならぬか)。

Yes, you ^{ニード} must (go). (はい, 行かねばならぬ)。

No, you ^{ニード} need not (go). (いや, 行くには及ばぬ)。

take fire [火事がいく]。 burn [bɜ:n] 焼ける。 scholar [skɔlə] 學者。 not always [必ずしも～ない]。 how to teach [教授法, 教へ方]。 be proud [praʊd] of [～を自慢する]。

- ② Can it be true? (全體本當なのか)。

Yes, it ^{トル} must be true. (はい, 本當にちがひない)。

No, it cannot be true. (いや, 本當の筈がない)。

即ち, ① の用法では, 問ひと答へにのみ must を使つて, 否定には need not を使ふのである。 must not は, 前に may の所で申述べた通りに「～てはならぬ」と云ふ意を表はすのである。

② の用法は, これは can の用法で申上げた通りで, 問ひと否定には can を使つて, 肯定にのみ must を使ふのである。だから

must ~? (ねばならぬか)

must not (～てはならぬ)

と, 問ひと否定の must の意味は一つだけで,

must (～ねばならぬ), (～にちがひない)

と, 肯定の must は, 二つの意味に使はれるだけである。

- ① I ^{マイセルフ} must do it myself.
(私は自分で之をしなければならぬ)。

- ② You ^{ペイ} must ^{マネ} pay the money.
(君は金を仕拂はなければならぬ)。

- ③ You ^{テル} must ^{ライ} not tell a lie.
(君は嘘を吐いてはならぬ)。

- ④ You ^{スモウク} must not smoke.
(君は喫煙してはならない)。

- ⑤ He ^{ステューピッド} must be ^{トーク} stupid to talk ^{ライク} like that.

stupid [stju:pid] 愚鈍な。

(あんなことを云ふからには彼は馬鹿に違ひない)。

- ⑥ ^{サツチ} Such a man as he ^{サクスイード} must ^{エニサイン} succeed in anything.
(あのやうな人は何をしても成功するに違ひない)。

(9) Need の用法

need と云ふ語は、前項 **must** の所で申述べた如く、否定の場合にのみ、即ち **not** の附いた場合にのみ助動詞として用ひられて、**need not** で (ねばならぬ) の意の **must** の反対、即ち (に及ばぬ) の意を表はすのである。

not の添はぬ **need** は (入用である) と云ふ意を表はす本動詞である。

- ① Do you ^{エニサイン} need anything? (何か入用か)。
② I ^{サム} need ^{マニ} some money. (少し金が入用だ)。
③ I ^{ナサイン} need nothing. (何も入用はない)。

所で注意すべき事は、この本動詞に使ふ **need** は三人稱單數の主語に添へて使はれる場合には

- ④ He ^{ニーズ} needs nothing. (あの男は何も入用はない)。
⑤ He **needs** some money. (あの男には少し金が入用だ)。

と云つた風に、**need** の語尾に 's' を附けた **needs** を使はねばならぬが、助動詞として使ふ場合の **need not** は、主語が三人稱單數でも、**needs** とはする必要はない、**need** のまゝでよいのである。

- ⑥ He **need not** go soon.
(あの男はぢきに行くには及ばぬ)。

(10) Can, May, Must の過去形

- ① ^{クド} Could ② ^{マイト} Might ③ Had to

次に **Can** と **may** と **must** との過去の形に就て述べやう (できた), (てよかつた), (ねばならなかつた) の意を表はす場合には

can は **could**

may は **might**

must は **have to** の過去形 **had to**

の形を用ひるのである。即ち

Could he ^{ランフアースト} run fast? (あの男は速く走れたか)。

No, he **could not** run fast.

(いや、速く走れませんでした)。

と云つた風にである。

所が (全體~か), (~た筈がない), (~たかも知れない), (たにちがひない) の意を表はす場合には、以上の **could**, **might**, **had to** を使はないで

can ~? は **can** ~ **have** ~?

can not は **can not have** ~?

may は **may have**

must は **must have**

と、それぞれ現在の形のまゝに、**have** を添へた形を使ふのである。

- ① **Can** he **have** done so?
(全體彼の男はさうしたのか)。
② He **can not have** done so.
(あの男がさうした筈がない)。

③ He may have done so.

(あの男がさうしたかも知れん)。

④ He must have done so.

(あの男がさうしたにちがひない)。

(11) Can, may, must の未来形

(shall 又は will) +

① be able to ② be allowed to ③ have to

Can と may と must の未来形即ち (できるでせう), (~てもよいだらう), (ねばならぬでせう) の意を表はす場合には

can は will (又は shall) be able to

may は will (又は shall) be allowed to

must は will (又は shall) have to

と云ふ形を用ひる, 而して shall を用ひるか, will を用ひるかは, 既に述べた “shall, will” の用法に従ふのである。

① I shall be able to read it next year.

(私は来年それが読めるだらう)。

② You will be allowed to enter the room.

(君はこの室に入つてもよいだらう)。

③ I shall have to buy a new hat.

(僕は新しい帽子を買はねばならないだらう)。

(12) Ought to の用法

この語は常に “to” を伴ふのである。助動詞に “to” を伴ふのはこの ought だけである。(～すべきもの) の意で「義

be allowed [ə'laʊd] to [～してよい]。

務」や「當然」の意味を表はす。

① We ought to love our neighbours.

(吾々は隣人を愛すべきである)。

② You ought not to speak ill of others.

(人の悪口を言ふものではない)。

③ He ought to succeed.

(彼の成功するのは當然だ)。

次に ought to + Present Perfect (現在完了) の形は (~すべき筈だつたのにしなかつた) の意を表はす。

④ You ought to have thanked him.

(君は彼に禮を言ふべきであつたのだ)。

⑤ The troop ought not to have been sent.

(軍隊が送らるべき筈ではなかつたのだ)。

⑥ You ought to have done it yesterday.

(昨日それをなすべき筈だつた)。

⑦ He ought to have succeeded.

(彼の成功しないのは變だ)。

(13) 法 (Mood)

法 (Mood) の種類

① 直接法 ・ ② 假定法 ・ ③ 命令法

動詞が動作や有様状態を述べる時, その言ひ表はし方がある。

neighbour [néibə] 隣人。 speak ill of [悪口を云ふ]。 troop [tru:p] 軍隊。

その述べ方を法 (^{ムード}Mood) と云ふのである。英語には次の三つの法がある。

(1) 直接法 (^{インディカテイブ} Indicative Mood)

これは現在過去、未來に關せず事實として述べるもので、從來述べ來つたものは皆之に屬してゐる。だからこゝでは直接法に就いては説明を省略し、單に一二の例を擧げるに止めて置く。

- ① There ^{ぶエアリアス} are ^{カインツ} various ^{ふイツシユ} kinds ^{ボウズ} of fish, both ^{ラーヂ} large and ^{スモール} small, in this ^{ポンド} pond.

(此の池には大きなのや小さなのや種々の魚類が居ります)。

- ② Yamada ^{オウンリ} had ^{ふウー} only a few years' ^{スクーリン} schooling in his ^{ボイフド} boyhood.

(山田は少年時代にはたつた數年しか學校に行かなかつた)。

(2) 假定法 (^{サブジャンクテイブ} Subjunctive Mood)

(1) 假定法過去

(若しさうであれば) と假定して云ふ時の言ひ方、文法ではこれを(假定法)と云ふのを、お話す事にしませう。

(私が女の子なら) (實際は男の子だが)

If I were a girl, ~

(私が男の子なら) (實際は女の子だが)

If you were a boy, ~

Indicative Mood [indikətiv mu:d] 直接法。various [v'eəriəs] 色々の、種々の。schooling [skú:liŋ] 學校教育。boyhood [bóihud] 少年時代。

(彼が英國人なら) (實際はさうではないのだが)

If he were an Englishman, ~

(あれが馬なら) (實際は馬ではないのだが)

If it were a horse, ~

斯んな風に (~である) に、主語が何であつても、いつでも 'were' を使ふのである。普通の場合だつたら were は「過去」の意味を表はす場合に、主語が you が複數に限り使ふのであるが、假定法では、主語が單數でも複數でも、I でも he でも it でも、何でも、然かも「現在」の事を云ふに、過去形の were を使ふのである。そして同じ過去形でも was の方は一切使はない事になつてゐるのである。

假定法では、現在の事を言ふに過去形の動詞を使ふのは、(~である) の場合だけではない。總ての動詞が皆さうである。だから

(私が口を二つ持つてゐるなら) (實際は持つてゐないのだが)

If I had two mouths, ~

(彼がそれを知てゐるなら) (實際は知らぬのだが)

If he knew it, ~

この場合、現在形の have や know は使はないのである。助動詞も同じわけで、

(私にそれが出来るなら) (實際は出来ないのだが)

If I could do it, ~

(君が行つてよいのなら) (實際は行つてはならぬのだが)

If you might go, ~

(私が行けば) (實際は行かぬのだが)

If I ^{シュド} should go, ~

(私がさうするつもりなら) (實際はそんなつもりはないのだが)

If I ^{ウド} would do so, ~

斯んな風に、總てに過去形の動詞(又は助動詞)を使ふから、文法では、これを假定法過去 (Subjunctive Past) ^{サブジャンクティブ パースト} といつてゐるのである。即ち假定法過去は、現在の事實がさうでないことを、若しさうならと、假定して言ふ時に使ふ形である。

この假定に對して、(私が女の子なら、旨く歌へるんだに)、(私が知つてゐたら、君に話すんだに)、(できるならば、嬉しからうに) といつた風の事を言ふには、普通なら

I can sing well.

I will tell it to you.

I shall be glad.

と云ふところであるが、一方に過去形を使つてゐるから、こちらの動詞(助動詞が附いていたら、それを)も過去形にして

If I ^{ウワー} were a girl, I ^{クド} could sing well.

If I ^{ニウー} knew it, I ^{ウド} would tell it to you.

If I ^{クド} could do it, I ^{シュド} should be glad.

と云つた風にせねばならぬことにも注意せねばならぬ。

① If I ^{ビズイ} were not so busy, I ^{トライ マイセルフ} would try myself.

(そんなに忙しくなければ、自分でやつて見たいのであるが)。(實際は忙がしくて出来ない)。

② If I ^{タイム} had the time, I ^{サム} would try to do some-

Subjunctive Past [假定法過去]。 busy [bizi] 忙しい。

^{サイン} thing for them.

(時間があれば、彼等に何かしてあげたいのだが)。

(實際は時間がないので出来ない)。

③ If he ^{マイト イクスプレイン} were here, he might explain this.

(若し彼がここに居れば、これを説明するかも知れないのだが)。

(實際は此處にゐないから出来ない)。

④ If I ^{オウンリ ウィンズ} had only wings, I ^{ダイライテッド} should be much delighted.

(私に羽根さへあつたら、どんなにか嬉しいのだが)。

(實際は私には羽根はない)。

上述の如く、假定法過去は形は過去であるが、實際は現在の事實に關係した事を述べてゐるのだから、この點を誤らぬやうに注意が肝要である。

一般的の形 (假定法過去)

If ~ were ~, ^{should} would ^{could} } + 動詞の原形

(2) 假定法過去完了

過去に實際さうでなかつた事を、(若しさうであつたならば)と、假定して言ふ場合には、過去完了形を使ふのである。で過去完了形を用ひるので、之を假定法過去完了 (Subjunctive Past perfect) ^{サブジャンクティブ パースト パーフェクト} と云ふ。

(私が男の子であつたのだつたら) (實際はさうではなかつた)

If I had been a boy, ~

explain [ikspleɪn] 説明する。 Subjunctive Past Perfect [假定法過去完了]。

(私が口を二つ持つてみたのだつたら) (實際は持つてみ
なかつた)。

If I had had two mouths, ~

(私がそれを知つてみたのだつたら) (實際は知らなかつ
た)

If I had ^{ノウン} known it, ~

(私がそれが出来たのだつたら) (實際は出来なかつた)

If I could have done it, ~

(君が行つてよかつたのだつたら) (實際はよくなかつた)

If you might have gone, ~

(私がさうするつもりだつたら) (實際はそのつもりはな
かつた)

If I would have done so, ~

斯んな風に、過去完了形は

助動詞のない時は、had + 過去分詞

助動詞があれば、その助動詞の過去形 + have + 過去分詞と
云ふ形を用ひるのである。

次に、この假定法に伴ふ文は、過去完了形の動詞又は助動詞
を使はねばならぬことに注意せねばならぬ。

If I had been a girl, I could have ^{サン ウエレ} sung well.

(女の子だつたら皆く歌はれたであらうに)。

(實際は歌はれなかつた)。

If I had ^{ノウン} known it, I would have told it to you.

(知つておたら、君に話したらうに)。

(知らなかつたから話さなかつた)。

If I could have done it, I ^{シュド} should have been glad.

(之れが出来たら嬉しかつたらうに)。

(實は出来なかつたので、つまらなかつた)

一般的形式 (假定法過去完了)

If ~ had + 過去分詞 ~ $\left\{ \begin{array}{l} \text{should} \\ \text{would} \\ \text{could} \end{array} \right\} + \text{have} + \text{過去分詞}$

① If I had been there, I might have been ^{マイト} kill(d) ^{キルド}
(若し僕がそこ^{マイト}にみたならば、殺されたかも知れない)。
(實際は出来なかつたので、殺されなかつた)。

② If it had been ^{フアイン} fine ^{イエスタデイ} yesterday, we should have ^{シュド}
^{ゴン} gone on an ^{イクスカーション} excursion.
(昨日若し晴天であつたら、遠足に行くところだつたのだ
が)

(晴天でなかつたから、行かなかつた)。

(3) 假定法現在

現在又は未來のことで、(よく解らないが、若し~)と假定し
て云ふには、^{サブジャンクティブ プレゼント} 假定法現在 (Subjunctive Present) といふ形
を使ふのである。この形は以前は必ず原形 (= 根形) の動詞を
使つて、主語が何であつても、(~である)には“be”を、(持
つ)には“have”，其他の動詞は、I, you 以外の主語の場合
でも、‘s’や‘es’を付けぬ形、即ち原形を使つて

If it ^{シュド} be good, ~ (良ければ)

(實際良いとも悪いとも解らぬ)

If he ^{シュド} have it, ~ (彼が持つておたら)

(實際持つておるともおないとも解らぬ)

Subjunctive Present [假定法現在]。

If he **come** this afternoon, ~

(午後に彼が来るなら (どうか解らぬ))。

と云つた風にして, **is, am, are** や **has, comes** と云ふ形を使はない定めであつたが, 現在では, 矢張り主語に依り

If it **is** good, ~

If he **has** it, ~

If he **comes** this afternoon, ~

と云つた風に, 普通の規則通りの動詞の形を使つてもよい, ~いや, 使ふ人の方が却つて多い位になつてゐるのである。即ち今日では多くの場合に假定法現在に直接法現在を代用するのである。

さうして, これに伴ふ文の動詞は, あたりまへに

If it $\left\{ \begin{array}{l} \text{is} \\ \text{be} \end{array} \right\}$ good, I will take it.

(よければ買はう)。

If he $\left\{ \begin{array}{l} \text{has} \\ \text{have} \end{array} \right\}$ it, I will ^{アースク}ask him to ^{レンド}lend it.

(彼がそれを持つてゐるなら貸してくれるように頼まう)

If he **come(s)** this afternoon, I shall be glad.

(午後に彼が来れば嬉しい)。

と云つた風にするのである。これは

If it were good, I would take it.

(良ければ買ふんだが)。(悪いから買はぬ)

If he **had** it, I would ask him to lend it.

(持つてゐたら貸してくれと頼むんだに)。

(實は持つてゐない)

If he **would** come, I **should** be glad.

(来れば嬉しいに)。(實は来ない)

と云つた風の假定法過去と混同してはいけない。

① If it $\left\{ \begin{array}{l} \text{rain} \\ \text{rains} \end{array} \right\}$ to-morrow, I will not go.

(若し明日雨天ならば, 私は行きません)。

② If it $\left\{ \begin{array}{l} \text{be} \\ \text{is} \end{array} \right\}$ fine to-morrow, I will ^{スタート}start.

(若し明日晴天ならば, 私は出掛けます)。

③ I wonder if it $\left\{ \begin{array}{l} \text{be} \\ \text{is} \end{array} \right\}$ true.

(それは本當であるか知ら)。

(4) 假定法未來

假定法未來 (Subjunctive Future) ^{サブヂヤンクテイぶ} ^{ふゆーチャ}とは, 現在及び未來の事に非常に疑ひを抱いて假定する形で, (萬一 ~ たら) の意に用ひる。人稱に關係なく, 即ち主語が何でも “should” を用ひる。而して之に使ふ文には, **should (would) + 原形** 又時には **shall (will) + 原形** を用ひる。

① If he **should** come, I $\left\{ \begin{array}{l} \text{should} \\ \text{shall} \end{array} \right\}$ be glad.

(萬一來たら嬉しからうに)。(大丈夫来なからう)

② If it **should** be good, I $\left\{ \begin{array}{l} \text{would} \\ \text{will} \end{array} \right\}$ take it.

(萬一良ければ買はうのに)。(大丈夫良くなからう)

③ If I **should** fail, I $\left\{ \begin{array}{l} \text{would} \\ \text{will} \end{array} \right\}$ try again.

Subjunctive Future [假定法未來]。

(萬一私が失敗したら、もう一度試みます)。(大丈夫失敗しないだらう)

(5) 注意すべき假定法の用法

(A) If の省略せられる場合

普通假定法は if を以て始まるものであるが、これが屢々省略される場合がある。かかる場合には、動詞又は助動詞は主語の前に来るのである。

① ^{プレイス} Were I in his place, I would not do so.
(若し私が彼と處をかへておたら、さうはしないのだが)。

② ^{リガタ} Should it rain to-morrow, the regatta will be ^{プットーふ} put off.
(萬一明日雨天であれば、競漕會は延期されるだらう)。

③ ^{ドクタ} Had the doctor come sooner, he would have ^{レスキュー} been rescued.
(醫者がもつと早く来ておたら彼は助かつたらうに)。

上例に就て注意すべき事は、文の始めに動詞又は助動詞があつて、然も文の終りは疑問符(?)でなくて、終止等(.)の場合而して文中に **should, would, could** などの語があれば、假定法だなど気が附かなければいけない。特に英文の解釋の際この點に留意して貰ひたいものである。

(B) ^{ウィツシュ} I wish { were } (假定法過去) (達せられない願望)
 { had }

① I wish I were a bird. (鳥であつたらなあ)。

regatta [riɡætə] 短艇競漕會。 put off [延期する], rescue [réskju:] 救ふ。

^{ソリ} (= I am sorry I am not a bird.)
(残念だが鳥ではない)。

② I wish I had a motor-car of my own.
(自分所有の自動車があればよいになあ)。

(= I am sorry I have no motor-car of my own.)
(残念だが自分所有の自動車がない)。

上例に示せる如く I wish の後に假定法過去を用ひた場合には、「現在達し難い願望」を表はすのである。

(C) I wish + 假定法過去完了 (達せられなかつた願望)

① I wish I had been there yesterday.
(昨日あそこに居ればよかつたなあ)。

(= I am sorry I was not there yesterday.)
(残念だが昨日あそこにゐなかつた)。

② I wish I had been a merchant.
(僕は商人であつたらよかつたに)。

上例は I wish の次に假定法過去完了が用ひられてゐるので、「過去の達し得ざりし願望」を表はすものである。

(D) as if } + 假定法
 as though }

① He talks { as though } he knew everything.
 { as if } ^{トークス} ^{オウ} ^{ニウー} ^{エブリスイン}

(彼は何でも知つて居さうな口ぶりだ)。

② He looks { as though } nothing had happened.
 { as if } ^{ルツクス} ^{ナスイン}

(彼は何事もなかつたやうな顔をしてゐる)。

merchant [mɜ:ɪʃənt] 商人。 happen [hæpn] 起る。 as if = as though [恰も〜かの如く]。

as if 又は as though の後には假定法を用ひ、「恰も～かの如く」の意を表はす。

(E) But for (～なかりせば)。

① But for his idleness, he would be a good man. (假定法過去)。

(なまけさへしなければ好い人だが)。

② But for your help, I should have been burnt to death. (假定法過去完了)。

(君が助けてくれなければ、私は焼死んであらうに)。

but for は假定法過去 (=if it were not for) にも、假定法過去完了 (=if it had not been for) にも用ひられるのである。両者の區別は後に來る文の動詞が「would (should, could)+原形」であれば、假定法過去であり、「would (should, could)+have+過去分詞」であれば、假定法過去完了である。

(F) If it were not for } = (～なかりせば)
Were it not for }

これは but for と同意で、假定法過去の特別な表はし方である。

(A) Were it not for your help, he would not succeed. (But for your help)

(B) If it were not for your help, he would not succeed. (But for your help)

(君の助力なかりせば、彼は成功しなからう)。

(G) Had it not been for } = (～なかりせば)
If it had not been for }

but for = if it were not for = were it not for [～なかりせば]。
be burnt [bɜ:nt] to death [deθ] 焼死する。 had it not been for = if it had not been for [～なかりせば]。

これは but for (假定法過去完了) と同意で、假定法過去完了の特別な言ひ表はし方である。

(A) Had it not been for your help, he would not have succeeded. (But for your help)

(B) If it had not been for your help, he would not have succeeded. (But for your help)

(君の助力がなかつたならば、彼は成功しなかつたらう)。

(H) 慣用句

次に假定法を用ひた慣用語句を二三擧げて置く。

① had better (～した方がよからう)

① You had better go. (君は行つた方がよからう)。

② You had better not go.

(君は行かない方がよからう)。

③ As it were (言はば)

④ He is, as it were, an incarnation of avarice. (彼は言はば慾の固まりだ)。

⑤ He is a grown-up baby, as it were. (彼は言はば成人した赤ん坊だ)。

⑥ had } rather ~ than (～よりいつそ～がまし
would } だ)。

⑦ We { had } rather die than be disgraced. (恥をかくよりいつそ死んだ方がましだ)。

had better [～た方がよからう]。 as it were [言はば]。 incarnation [inkɑ:nɛɪʃən] 化身, 權化 [ゴンゲ]。 avarice [ævərɪs] 強慾。 grown-up [grəʊnʌp] 生長した。 disgrace [disgrɛɪs] 辱める [名を], 面目を失はしめる。

(3) 命令法 (Imperative Mood)

命令法とは命令依頼、忠告、祈願などを表はすもので、普通は第二人称 (you) に對してなすものであるから、you は書かないで、動詞の原形 (又は根形) を文頭に置くのである。否定の時には don't 又は never を文首に出すのである。既に述べた命令文がこの命令法のことなので、次に詳しく申述べやう。

(1) 命令文に於ては通例主語 (you) は省略する。

- ① Always speak the truth. (常に眞實を語れ)。
オールウイズ スピーク トルース
- ② Go at once. (直ぐ行け)。
クワイアット
- ③ Be quiet. (静かにせよ)。
オニスト
- ④ Be honest. (正直にきなさい)。
キープ スティル
- ⑤ Keep still. (じつとしてみなさい)。
サム ウォータ
- ⑥ Give me some water. (水を少し下さい)。
シャット ドー
- ⑦ Shut the door, please. (どうか戸を閉めて下さい)。
デイリ ブレッド
- ⑧ Give us this day our daily bread.
 (日々の糧を今日も授け給へ)。

(2) 否定の命令、即ち禁止の意を表はすには don't (= do not) 又は never を文首に附ける。

- ① Never tell a lie. (決して嘘を吐くな)。
ネバア テル ライ
- ② Do not make a noise. (騒いではいけない)。
メイク ノイズ

Imperative [impérativ] Mood [命令法]。 truth [tru:θ] 眞實。 quiet [kwáíət] 静かな。 honest [ɔnist] 正直な。 daily [déili] 日目の。 make a noise [noiz] 騒ぐ。

③ Don't be idle. (怠けるな)。
アイドル

④ Don't despise a weak enemy.
 (小敵を侮る勿れ)。
デイスパイズ ウィーク エニミ

(3) 命令法に於て意味を強めるため (即ち強勢のため) に “do” を動詞原形の前に附ける事がある。

① Do tell me what he said.
 (彼の言つた事を是非話して下さい)。
セド

② Do get up, it's very late.
 (さあ起きなさい、大變晚い)。
イツツ レイト

③ Do go, please! (どうか是非行つて下さい)。

(4) 命令文は既に申述べた如く主語は通例略するのであるが、意味を強めるために主語を用ひる場合もある。

① You go and get me my book.
 (お前は行つて私の本を取つてお出で)。

② Don't you do that!
 (お前はそれをしてはいかぬ)。

③ Don't you forget! (お前忘れないやうにしろ)。
ムアゲット

(5) 命令は普通第二称 you にするのであるが、第一人稱、第三人稱に間接命令と云つて let を用ひて、命令する場合がある。

① Let me see the book. (その本を私に見せなさい)。

② Let me go. (私を行かせて下さい)。

第一人稱複數 we に對する要求、即ち “us” を用ひた場合

despise [dispáiz] 侮る。 weak [wi:k] 弱い。 enemy [énimi] 敵。 forget [fəgét] 忘れる。

には「提案」又は「誘引」の意味となる。

③ ^{ゴウ アウト} Let us go out ^{ウォーク} for a walk.
(散歩に出掛けませう)。

④ ^{メイク} Let us make ^{ヘイスト} haste.
(急がうではありませんか)。

⑤ Let him wait. (待たせて置け)。

⑥ Let each man do his best. (各員努力せよ)。

(6) 命令法の特別用法

① (命令法+and)

命令法の後に and が用ひられた場合、かゝる and は〔然らば〕の意に解する場合が多い。

① ^{プレス} Press the button, ^{ボタン} and the bell ^{ベル} will ring ^{リン}.
(ボタンを押せばベルが鳴ります)。

上例の如き形の文は、‘if’ を以て始まる文に書き改めても意味は同じである。

If you press the button, the bell will ring.
(ボタンを押すとベルが鳴ります)。

② ^{ワーク} Work hard, ^{ハード} and you will be sure to ^{シエア} succeed ^{サクスイード}.
(=If you work hard, you will be sure to succeed.)
(一生懸命勉強すれば、きつと成功するでせう)。

尚ほこの場合特に注意すべきことは、命令文に始まり、and が次に来て又命令文の来ることがある。かゝる場合の and は

go out for a walk [散歩に出掛ける]。make haste [heist] 急ぐ。do his best [最善を盡す]。press [pres] 押す。button [bátŋ] ボタン。be sure to [きつと~する]。

命令文を連続、即ちつなぐにすぎないのだから、(然らば)の意に解してはならない。

③ ^{ラブ} Love God with all your ^{ゴド} heart, ^{ハート} and love your ^{ネイバ} neighbour ^{よーセルフ} as yourself.

(心から神を愛せよ、又己を愛する如く隣人を愛せよ)。

② (命令法+or)

かゝる ‘or’ は ^{アナアライズ} otherwise (然らずんば) の意であるから、^{アンレス} if not 又は unless を以て書き改めても同じである。

① ^{ヘイスト} Make haste, ^{タイム} or you will not be in time.

(急ぎなさい、さもなければ時間に間に合はない)。

(=If you do not make haste, you will not be in time.)

(=Unless you make haste, you will not be in time.)

② ^{プロバ} Take proper ^{エクササイズ} exercise, or you will get ill.

(=If you do not take proper exercise, you will get ill.)

(=Unless you take proper exercise, you will get ill.)

(適當に運動なさい、でないと病氣になりますぞ)。

(14) 變體動詞 (Verbal)

^{有限} 限定動詞 (Finite Verb) 動詞は主語に就て或る事柄を述べるのが本来の目的であつて、その「人稱」と「數」に於て主語に一致し、常に主語に依つて形の制限を受けるものである。(人稱),(數),(時),(法)等の制限ある動詞を限定動詞と云ふのである。

heart [hɑ:t] 心。neighbour [néibə] 隣人。yourself [jɔ:sélf] あなた自身。otherwise [áðəwaiz] 然らずんば。unless [ənlés] ~でなければ。proper [prɔ:pə] 適當な。exercise [éksəsaiz] 運動。Finite [fáinait] Verb [限定動詞]。Verbal [vɔ:bəl] 變體動詞。

變體動詞 所が、それ自身だけで動詞になることが出来ず、文法上の主語を持つことも出来ない、従つて「人稱」、「數」等の制限を受ける事もなく、**動詞と他の品詞**との性質を兼ね備へるものがある。之を變體動詞と云ふ。

變體動詞の種類 變體動詞には次の三種ある。

- ① 不定詞 (Infinitive) インフイニテイブ
- ② 分詞 (Participle) パーテイスイブル
- ③ 體用詞 (Gerund) ゼランド

では次のこの三種に就て委しく述べて見やう。

(1) 不定詞のお話

不定詞と云ふのは今迄度々申述べた通り“to”と動詞の原形(又は根形)とで一かたまりになつた形を云ふのである。to do, to go, to learn, to write, to read, to play などは皆この不定詞である。外にもう一つ‘to’と‘have’と「過去分詞」とで一かたまりとなつたもの、例へば to have done だの to have written だのと云ふ形がある。これを完了不定詞 (Perfect Infinitive) と云ふ(完了不定詞の事に就ては上級文法書で學んで下さい)。

不定詞は、名詞、形容詞、又は副詞の役目をするのが普通の用法である。即ち

- ① 名詞的不定詞 (Noun-Infinitive) ナウン インフイニテイブ
- ② 形容詞的不定詞 (Adjective-Infinitive) アヂクティブ

Infinitive [infinitiv] 不定詞。 **Participle** [pártisipl] 分詞。 **Gerund** [džérənd] 體用詞。 **Noun-Infinitive** [名詞的不定詞]。 **Adjective-Infinitive** [形容詞的不定詞]。 **Adverb-Infinitive** [副詞的不定詞]。

③ 副詞的不定詞 (Adverb-Infinitive) アドブアーブ

(A) 名詞的用法

これは不定詞が名詞の役目をする場合で、従つて主語、目的、補(足)語として用ひられることは勿論のことである。

- ① To tell a lie is wrong. [主語] テル ライ ろん

(嘘を言ふのは悪い)。

- ② To work is the duty of every man. [主語] ワーク デューテイ エボリ

(働くことは各人の義務である)。

- ③ He likes to tell a lie. [目的語] ライクス

(彼は嘘を云ふ事が好きだ)。

- ④ He loved to read, but he had few books. [目的語] ラブド リード フュー

(彼は讀書を愛したが、書物は殆んど持つてゐなかつた)。

- ⑤ He seems to be honest. [補語] スイムズ オニスト

(彼は正直らしい)。

- ⑥ My object is to become a soldier. [補語] オブジクト ビカム ソウルヂヤ

(僕の目的は軍人になることである)。

- ⑦ He appears to be a wise man. [補語] アピアズ ワイズ

(彼は賢人らしい)。

(B) 形容詞用法

これは不定詞が形容詞の役目をする場合で、形容する名詞の後にあるのが普通である。

wrong [rɔŋ] 間違つた。 duty [djú:ti] 義務。 seem [si:m] と見える、らしい。 appear [əpiə] to be [～らしい]。 wise [waiz] 賢い。

① I have no one to help me.
(誰も私を助けてくれる人はない)。

② I want something to eat.
(何か食ふ物が欲しい)。

③ This is the house to let.
(これは貸家です)。

① の to help は one を, ② の to eat は something を, ③ の to let は house を形容するものである。

④ There is no chair to sit on.
(坐るべき椅子がない)。

⑤ He has no house to live in.
(彼は住む家がない)。

自動詞を不定詞に使ふ時には, 前置詞を次に付けることを忘れてはならぬ。上例は。

④ There is no chair on which to sit.

⑤ He has no house in which to live.

と云つても同じであるが, on which to sit. in which to live なる形の which を省略せる爲め, on which, in which の on, in が動詞の後に來たのである。即ち which は to sit, to live の目的である, 所が sit, live は何れも自動詞である, 次に前置詞を挿まなくては目的を置く事の出来ない動詞は自動詞であるから, それぞれ前置詞 on, in が必要なのである。関係代名詞の項で述べた如く関係代名詞が目的に用ひられた時は, 往々にして省略されるのであるから, この which

help [助ける]。something [sʌmθɪŋ] 何か。house to let [貸家]。

が省略され, 前置詞はそれぞれ動詞の後へ置かれたのである。on which to sit, in which to live の形は餘り現代では使はれない形で, chair to sit on, house to live in の形を用ひる場合が多い。

(C) 副詞的用法

これは副詞の働きをする不定詞でこの用法が一番厄介である, と云ふのは副詞的用法は次に示す如く種々な場合があるからである。

(1) 目的を表はすもの。

① I will take you to see the game.
(試合を見に連れて行つてやろう)。

② I hurried to the station to catch the train.
(汽車に乗れるやうに停車場へ急いで行つた)。

(連れて行つてやろう), (何にしに連れて行つてやるのか), (試合を見に連れて行つてやる), 即ち to see は目的を表はすと同時に will take を形容(説明)するから副詞である。②の to catch もこれと同様で目的を表はし, hurried を形容(説明)してゐる。

(2) 原因を表はすもの。

① I am glad to hear it.
(私はそれを聞いて嬉しい)。

② I am sorry to have kept you waiting.
(お待たせ申して済みません)。

hurry [hʌri] 急ぐ。catch [kætʃ] つかまへる。sorry [sɔ:ri] 悲しい。keep~waiting [待たせて置く]。

- ③ I am ^{サプライズド}surprised ^{スイー}to see ^{サツチ}such a ^{グランド}grand ^{サイト}sight.
(私はかゝる壯觀を見て驚いた)。

上例の如く **glad, sorry, surprise** 又は **pleased** などの喜び, 悲しみ, 驚きなどを表はす語の次に用ひられた不定詞は, その喜び, 悲しみなどの原因を表はすのである。即ち ① に就いて云へば, (私は嬉しい) その原因は (それを聞いた) からである。

(3) 結果を表はすもの。

- ① He awoke one morning ^{アウオーク}to find ^{モーニン}himself ^{フアインド}famous ^{ヒムセルフ}and ^{フエイマス}famous.
(彼は或朝眼を覺して見ると有名になつてゐた)。

- ② Columbus loved the ocean and grew ^{カラムパス}to be ^{フボド}a ^{オウシヤン}great ^{グー}sailor.
(コロンブスは海を好んだ, そして成長して偉大な水夫となつた)。

- ③ He worked hard ^{ワークト}only ^{ハード}to ^{オウンリ}fail ^{フエイル}.
(彼は一心に働いたが, 結果は失敗に終つた)。

③ の例に示せる如く不定詞の前に “only” のある時は, かかる不定詞は結果を表はし, (～したが, その結果は～だ) と解するのである。今一例挙げると

- ① I went ^{ウエント}only ^{オウンリ}to ^{フアインド}find ^{アウト}him out.
(行つて見ると彼は不在だつた)。

即ち, I は went したがその結果は唯 he が不在だと云ふ事を find (見附ける) ばかりであつたと云ふ事で, **to find** と云

surprise [səpraɪz] 驚かす。 **famous** [fəɪməs] 有名な。 **ocean** [ˈoʊʃən] 大洋。 **sailor** [ˈseɪlə] 船乗り。

ふ不定詞は, 動詞の **went** を説明してその結果を示して居るのである。又

- ① It is ^{ビュア}pure ^{イナフ}enough ^{ドリנק}to drink.
(純良だから飲んで差支へない)。

の如く **to drink** は副詞の **enough** に附いて (程度を表はして) ゐる。又

- ② He must be a fool ^{マスト}to say ^{フル}such ^{セイ}a ^{サツチ}thing ^{スイン}.
(そんな事を言ふとは彼は馬鹿に相違ない)。

の如く (理由を表はす) 場合もある。

斯んな風に, 副詞的用法とは, 形容詞, 動詞又は副詞に附いて, それを説明する役目をする事を云ふのである。要するに不定詞の用法に於ては, 副詞に用ひられた場合が一番厄介で, たゞこれを (～すべく) と直譯しては徹底しないから, 此場合の不定詞は何を表はすかを十分研究して, 然る後適當な譯解をなす事が必要である。

(D) 假設主語と假定目的

(1) 假設主語

不定詞が主語の時は, 成るべくそれを文の後部に置いて主語の位置には ‘it’ を代りに置く方がよいのである。だから例へば「英語を學ぶことは困難だ」と云ふ事をいふ時には, その中の主語は (英語を學ぶのは), 即ち英語で云ふと **to learn English** と云ふ不定詞を含んだ句であるから, これよりも前に叙述部の「困難だ」即ち **is hard** を置きその前, 即ち普通の主語を置くべき位置には假設主語 **it** を置いて

pure [pjʊə] 純粹な。 **enough** [ɪnʌf] 充分な。 **fool** [fu:l] 愚人, 馬鹿者。

^{ハード} ^{ラーン}
It is hard to learn English. (1)

とするのである。普通 it を使はないで。

To learn English is hard. (2)

としても別に誤りと云ふのではないが、英國人は斯んな場合は大抵 ① の形を使つて、② の方は餘り使はないのである。

(毎朝五時に起床する事は私には困難です) と云ふ文の場合でも主語は(毎朝五時に起床する事は)で、叙述部は(私には困難です)である。だからこれをそのまま譯して

^{ゲッターアップ} ^{アクロック} ^{エブリ} ^{モーニン} ^{ハード}
To get up at five o'clock every morning is hard for me.

とするよりは、to get~ と云ふ不定詞を含んだ長い主語は後に廻して、その位置には例の**仮設主語 it** を置き、

It is hard for me to get up at five o'clock every morning.

とする方がよいのである。

(2) 仮設目的

同じわけで、目的語は普通動詞の直ぐ次に置くものであるがその目的語が單語でなくて、不定詞を含んだ様な長い句の時は、動詞の次、即ち普通の目的語の位置には 'it' を代りに置いて、本當の長い目的語は一番後に廻すと云ふ事も英語ではよくやるのである。斯んな時の **it** を**仮設目的語**と云ふ。

例へば(私は嘘をつく事は悪いと思ひます)と云ふ文中の主語は(私は)で、叙述動詞は(思ひます)である。そして(何)を思ふのか、即ち(思ふ)の目的になるものは(嘘を吐く事)である。だから、本當なら

I think to tell a lie is wrong.

と to tell a lie と云ふ目的語を、think の直ぐ次に入れる筈であるが、普通はそこへは代りに 'it' を入れて置いて、to tell a lie と云ふ句は wrong の後、即ち文の最後に置いて

^{スイン} ^{ろん} ^{テル} ^{ライ}
I think it is wrong to tell a lie.

とするのである。

(E) 不定詞を打消す場合

私は誰にも話すなと彼に頼みました。

^{アースクト} ^{ネバア} ^{テル} ^{エニワン}
I asked him never to tell it to anyone.

斯んな風に、不定詞を打消す場合には、その直ぐ前に not 又は never を附けるので、此場合 do not とする必要はない。次の關係を研究して下さい。

I told him to go. = I told him, "Go."

I told him not to go. = I told him, "Do not go."

① I told him not to go there.

(私は彼にそこへ行くなと言つた)。

② I have made up mind not to smoke.

(私は喫煙すまひと決心した)。

③ It is our duty not to tell a lie.

(嘘を吐かないことは吾々の務である)。

(F) 疑問詞+不定詞

どう綴るのか教へて下さい。

^{ショウ} ^{ハウ} ^{スペル}
Please show me how to spell.

斯んな風に what, which, whom 又は how, when, where 等の疑問詞の次に不定詞を添へると(〜てよいか)と云ふ意味

made up his mind [決心した]。

を表はすのである。

- ① He will tell you **where to get it**.
(何處で買はれるか、あの男が話ませう)。
- ② He asked me **how to do it**.
(そのしかたを彼男は私に尋ねました)。
- ③ He showed me **what to do**.
(何をすればよいか彼男は私に教へました)。

(G) 不定詞の“to”を省略する場合

不定詞が五官の働きを表はす動詞, ^{スィー}see (見える), ^{ヒア}hear (聞える), ^{フイール}feel (気がする), ^{オブザーブ}observe (əbzə:v・認める), ^{ウォッチ}watch (眺める), ^{ノウテイス}notice (nóutis・気が附く) などと云ふ語の目的に附いて形容詞的用法をする場合には“to”を省略するのである。

- ① I ^{ソー}saw him ^{グット}get rich.
(彼が金持ちになるのを見た)。
- ② They ^{オブザーブド}observed the barometer ^{バロミタ}fall suddenly.
(晴雨計が急に下がるのを見た)。
- ③ I was ^{ウォッチン}watching a bird ^{フライ}fly.
(私は鳥の飛ぶのを見つめてみた)。
- ④ I ^{ヒア}hear the bell ^{ベル}ring.
(ベルの鳴るのが聞える)。
- ⑤ I have never ^{スィーン}seen a cat ^{スイム}swim.
(私は猫の泳ぐのを見たことがない)。
- ⑥ We ^{フェルト}felt the house ^{ハウス}shake.
(我が家は揺れるのを感じた)。

barometer [bə'ɒmɪtə] 晴雨計。 suddenly [sʌdnli] 急に。
shake [ʃeɪk] 揺れる。

(吾々は家の揺れるのを感じた)。

- ⑦ I did not notice any one ^{ノウテイス}enter the room.
(誰一人室に入るのに気が附かなかつた)。

斯んな風に notice は大抵 not が附く場合に使ふのである。此處に注意申上げて置きたい事は、五官の働きを表はす動詞の目的語に附く不定詞の“to”は省いてよいと云ふのは上例の如く(能動態)の場合に限るのであつて、(受動態)の時は“to”を省略することは出来ないのである。では以上の例を受動態に變へて見ませう。

- ① He was seen to get rich.
- ② The barometer was observed to fall suddenly.
- ③ A bird was being watched to fly by me.
- ④ The bell is heard to ring.
- ⑤ A cat has never been seen to swim.
- ⑥ The house was felt to shake.
- ⑦ No one was noticed to enter the room by me.

(H) 注意すべき不定詞の慣用句

- ① To be + Infinitive = (～の筈)
① We are to meet here this evening.
(吾々は今晚こゝで會合することになつてゐる)。
- ② The tea-party is to be given on Sunday.
(お茶の會は日曜に催される筈である)。
- ③ Have + Infinitive = (～せねばならぬ)
① I had to go there.

tea-party [お茶の會]。

(私はそこへ行かなければならなかつた)。

- ② He ^{オーフン} has often to ^{メスイズイズ} do messages in the ^{ブイリヂ} village.
(彼は度々村に使せねばならない)。

- ③ Have only + Infinitive (～さへすればよい)

You ^{オウンリ} have only to ^{スタディ} study ^{ハード} hard.

(君は一心に勉強さへすればよいのだ)。

- ④ Have not + Infinitive = need not (～する必要はない)。

You have not to go.

(君は行くには及ばない)。

(2) 分詞のお話

今お話した(不定詞)と同じやうに、動詞でありながら、動詞の役目と、他の品詞の役目とを兼ねるものには、分詞といふのがある。本項では、そのお話を詳しく申述べたいと思ふ。

(A) 分詞の三形

形から云ふと、分詞には三種ある、即ち

- ① 現在分詞 — 動詞の原形 (= 根形) = ing を添へたもの、
^{ゴウイン} going, ^{ラニン} running, ^{スリーピン} sleeping, ^{ライティン} writing の類。

- ② 過去分詞 — 第三番目の活用の形を云ふのである、^{ゴン} gone, ^{ラン} run, ^{スレプト} slept, ^{リトン} written の類。

- ③ 完了分詞 (Perfect Participle) — ^{パーフェイスブル} having と過去分詞

do message [mésidʒ] 使をする。village [vɪlɪdʒ] 村。Perfect Participle [完了分詞]。

とを並べたもの、having gone, having run, having slept, having written の類完了分詞は上級文法書で學んで下さい。

(B) 分詞の用法

(1) 形容詞の役目

分詞は名詞又は代名詞の前、又は後に置いて形容詞の役目に使ふのである。前に附くと大抵純然たる形容詞の役目となり、後に附くと、此間に關係代名詞と Be 動詞を略したのものと同じく、動詞と形容詞の役目を兼ねたものとなる。

名詞の前、又は後何れに置かれるにしても、過去分詞は受身の意を表はす事になる。

- ① The language (which is) ^{ラングワイツヂ} spoken ^{スボウカン} in England.

(英國で話されてある國語)。

- ② The man (who is) ^{スピーキン} speaking to her.

(あの女に話をしてある男)。

- ③ Men ^{リビイン} living ^{タウンズ} in towns. (都會に住む人)。

- ④ Living men. (生ける人)。

- ⑤ A letter ^{レタ} written ^{リトン} in English.

(英文で書かれてある手紙)

- ⑥ A ^{イグサミネイシヤン} written examination. (筆算試験)。

- ⑦ Men ^{タウン} living in town do not know ^{ノウ} rural ^{るらル} pleasures.

(都會に住んである人は田園の樂みを知らない)。

- ⑧ The picture ^{ピクチャ} painted ^{ペインテイツド} by Mr. Brown won the ^{ブラウン} ^{ラン} the

rural [rúəɹəl] 田園の。pleasure [pléʒə] 樂み。

プライズ
prize.

(ブラウン氏の畫は入賞した)。

④ The man ^{スモウキン} **smoking** ^{パイプ} a pipe is my brother. ^{ブラナア}

(パイプを喫へてゐる人は私の兄です)。

⑩ I have received a letter ^{リスイーフド} **written** ^{レタ} in English. ^{リトン}

(私は英文の手紙を受取つた)。

(2) 補語の役目

形容詞は直接名詞に附いて、それを説明する役目の外に、補語として用ひる事の出来るのは、既に述べた。

① The ^{オニスト} **honest** boy. (直接用法)。

(正直な少年)。

② The boy is **honest**. (主語の補語)。

(その少年は正直である)。

③ I think him **honest**. (目的語の補語)。

(私は彼を正直だと思ふ)。

これと同じで、分詞もまた主語及び目的語の補語に用ひる事が出来る。

主語の補語 (動詞+分詞)

① He came ^{ラニン} **running**. (彼は走つて来た)。

② He went ^{ウエント} **begging** ^{ベギン} from door to door. ^{ドー}

(彼は戸別に乞食して行つた)。

③ I went ^{フイシン} **fishing**. (私は魚釣りに行つた)。

smoke a pipe [一服吸ふ]。 from door to door [家から家へ、戸別に]。

① He lay ^{レイ} ^{オインキン} **thinking**.

(彼は考へながら横になつてゐた)。

⑤ I kept ^{ケプト} ^{スタンデイン} **standing** ^{ウワイル} all the while.

(私は始終立つてばかりゐた)。

⑥ How did you get ^{ゲット} ^{ハート} **hurt**?

(どうして君は怪我をしたのか)。

⑦ He is **pleased**. (彼は喜んでゐる)。

⑧ Look out, or you will get ^{ルツカウト} ^{キツクト} **kicked**.

(氣をつけなさい、でないと蹴られますよ)。

⑨ I sat ^{サット} ^{サラウンデイッド} **surrounded** ^{チルドラン} by the children.

(私は子供に取巻かれて坐つた)。

⑩ He seemed ^{スイームド} ^{アストニツシユト} **astonished** at it.

(彼はそれを見て驚いたらしかつた)。

目的の補語 (動詞+目的語+分詞)

① I saw ^{ソー} ^{リーデイン} ^{ペイパ} **him reading** a paper.

(私は新聞を讀んでゐる彼を見た)。

② I found ^{フアウンド} ^{ダイイン} **him dying**.

(見れば彼は死にかゝつてゐた)。

③ I am sorry I have kept ^{ソリ} ^{ケプト} ^{ウエイテイン} **you waiting**.

(お待たせして済みません)。

④ She wept to see ^{ウエプト} ^{キルド} **him killed**.

lie, lay, lain [横はる]。 all the while [始終]。 get hurt [hə:t] 怪我する。 kick [kik] 蹴る。 surround [səraund] 取りまく。 astonish [əstəniʃ] 驚く。 die [死ぬる]+ing=dying。

(彼女は彼が殺されるのを見て泣いた)。

- ^{ふアウンド} ^{ボウン} ^{ブラウカン}
⑤ We found no bone broken.

(見れば骨は一枚も折れてみなかつた)。

- ^{ネボア} ^{ソー} ^{ウエイル} ^{ゴート}
⑥ I never saw a whale caught.

(鯨の捕へられるのを見たことがない)。

比較

- ① He kept standing.

(彼は立ち詰めてゐた)。

- ② He kept me standing.

(彼は私を立たして置いた)。

上例を比較して見るに、①の **kept** は自動詞で **standing** は補語、(動詞+分詞)の形式、即ち主格補語である。②の **kept** は他動詞、**me** はその目的、**kept** は **me** を説明せる(動詞+目的語+分詞)の形式、即ち目的補語である。

(3) 接續詞の役目

分詞はまた動詞と接續詞との役目を兼ねる事がある。

例へば

^{ジョン} ^{ソー} ^{パリースマン} ^{ランナウエイ}
John saw a policeman and ran away.

と云ふ文中の動詞 **saw** と接續詞 **and** との代りに、現在分詞の **seeing** を使つて、

^{スイーイン}
John, seeing a policeman, ran away. (A)

としても、また主語を動詞の **ran** の前にやつて

Seeing a policeman, John ran away. (B)

bone [boun] 骨。 **whale** [weil] 鯨。 **policeman** [pəli:smən] 巡査。

としてもよい。併し主語が代名詞の時は、必ず (B) の形を使つて、動詞の直ぐ前に主語を置く事にせねばならぬ。だから

He, seeing a policeman, ran away.

はいけない。必ず

Seeing a policeman, he ran away.

とせねばならぬ。

以上述べた事に依り分詞が接續詞の役目と動詞の役目をする事が分る。では今少しく委しくその用法を分類して述べて見やう。

(A) 時を表はす。

- ^{ウォーキン} ^{アロン} ^{ストリート} ^{メツト} ^{フレンド}
① Walking along the street, I met a friend.

(= While I was walking along the street, I met a friend.)

(町を歩いてゐる時友人に會つた)。

- ^{ルキングアップ} ^{ソー} ^{サムスイン} ^{ウワイト}
② Looking up, he saw something white.

(= When he looked up, he saw something white.)

(上を見た時彼は何か白い物を見た)。

(B) 原因又は理由を表はす。

- ^{ビーイン} ^{ハングリ} ^{ウォンテイッド} ^{サムスイン}
① Being hungry, he wanted to have something to eat.

(= As he was hungry, he wanted to have some thing to eat.)

(空腹であつたので、彼は何か食べ物を欲した)。

- ^{タイアド} ^{ウイザ} ^{ワーク} ^{サット} ^{ダウン}
② Being tired with the work, he sat down to

hungry [hʌggri] 空腹の。 **was tired with** [~で疲れた]。

レスト
rest.

(= ^{ビコズ}Because he was ^{ダイアド}tired with the ^{ワーク}work, he sat down to rest.)

(仕事に疲れたので、彼は坐つて休んだ)。

(C) 条件を表はす

① ^{ターニン}Turning to the left, you will ^{レフト}find a ^{フアインド}large ^{ストーン}stone ^{ビルディング}building.

(=If you turn to the left, you will find a large stone building.)

(左に曲ると大きな石造の建物を見出すでせう)。

(D) 譲歩を表はす

① ^{アドミテイン}Admitting what you say, I still ^{ウオツト}think that you ^{セイ}are in the ^{スタイル}wrong.

(= ^{サオウ}Though I admit what you say, I still think that you are in the wrong.)

(君の言ふ事を認めても、尙私は君は間違つてゐると思ふ)。

(E) 連続を表はす

① ^{スイーイン}Seeing this, he ^{ランナウエイ}ran away.

(=He saw this and (he) ran away.)

(これを見て彼は逃げ出した)。

rest [休む, 休息する]。turn [tə:n] 曲る。building [bildig] 建物。admit [ədmit] 認める。what you say [=that which you say] 君の云ふ(ところの)事。wrong [rɔŋ] 間違ひ。

(4) 分詞の主語

上記の動詞と接続詞との役目を兼ねる分詞に主語のある場合と、ない場合とある事に注意せねばならぬ。

Being tired, he sat down. (A)

(彼は疲れたので腰を掛けた)。

^{ビーイン}He ^{タイアド}being tired, I ^{グイブ}gave him a ^{グラス}glass of ^{ワイン}wine. (B)

(彼は疲れたので、私は葡萄酒を一杯やつた)。

即ち(A)は(疲れた)人は、sit down した人と同じ人、即ち其文の主語になる人が being tired なのであるから、分詞には格別主語はないが、(B)では文の主語は'I'で、being tired は別人の“he”であるから、これを明示して分詞の主語に“he”を付けてあるのである。

(5) 受身の分詞

動詞と接続詞との役目を兼ねる分詞は(受身)の場合には being と 過去分詞とを並べて

① ^{パーセントイントウーティアズ}Being told it, she ^{ティアズ}burst into tears.

(それを話されたので、彼女は涙にむせんだ)。

② ^{ストラック}Being struck ^{ヘブイリ}heavily, the boy ^{ウエプト}wept ^{ビタリ}bitterly.

(打たれたので、子供は激しく泣いた)。

所が此場合 being は全くこれを省いて、單に過去分詞だけにして置く事がある。これは受身の場合に限らず、being と過去分詞と並ぶと皆さうして差支ないのである。

① Tired with the work, he sat down.

burst into tears [涙を流す]。struck [strak] は strike [straik 打つ] の過去分詞。wept は weep [泣く] の過去。heavily [hévili] 烈しく。bitterly [bíteri] ひどく、烈しく。

- (=Being tired with the work, he sat down.)
 (=He was tired with the work, and (he) sat down.
 (仕事に疲れたので、彼は腰をおろした。)
- ② **Struck** heavily, the boy wept bitterly.
 (=Being struck heavily, the boy wept bitterly.)
 (=The boy was struck heavily, and he wept
 bitterly.)
 (ひどく打たれたので、子供は激しく泣いた。)

(6) **Have ~ Past Participle** (過去分詞)

この形を備へた文には次の如く三通りある。

(A) (～される) と受身に解する場合。

- ① I had to **have** my luggage **examined**.
 (=My luggage had to be examined.)
 (私は私の荷物を調べられねばならなかつた。)
- ② I had my watch **stolen** in the car.
 (=My watch was stolen in the car.)
 (私は電車の中で時計を盗まれた。)

(B) (～して貰ふ)

- ① You can **have** a letter **registered** to ensure
 its delivery.
 (手紙の配達を確かにするために手紙を書留にして貰ふことが出来る。)

luggage [lʌgɪdʒ] 荷物。 **examine** [ɪgzæmɪn] 調べる。 **stole** [stəʊl] は **steal** [sti:l 盗む] の過去分詞。 **register** [rɛdʒɪstə] 書留にする。 **ensure** [ɪnʃʊə] 保証する。 **delivery** [dɪlɪvəri] 配達。

(C) (～させる)

- ① I must **have** my coat **made**.

(私は上衣を作らせねばならぬ。)

(3) 體用詞のお話

體用詞は、實は英文法中でも、中々六づかしい部分の一つで、初年程度の諸君には、大分わかりにくからうと思ふ。併し既に不定詞や分詞のお話を終つた後だから、順序として是非お話した方がよからうと思ふ。

前項で述べた分詞の中の**現在分詞**、即ち動詞の原形(又は根形)の語尾に‘ing’を附けたもの、例へば **doing**, **writing**, **reading** などの語が、名詞と同様の役目をする時には、これを**現在分詞**とは言はないで、別に**體用詞**、英語では **Gerund** と云ふのである。即ち

(A) 「～ing 形」は、形容詞や副詞の役目をする時は、これを**現在分詞**と云ひ

(B) 「～ing 形」は、名詞の役目をする時は、これを**體用詞**と云ふのである。

だから

- ① A **standing** boy. (立つてゐる少年)。
 ② A boy **standing** there.
 (あそこに立つてゐる少年)。
 ③ The boy read the book **standing** there.
 (少年は其處に立つて本を読んだ)。

などの **standing** は、形容詞や副詞の役目をしてゐるから、**現在分詞**であるが

I like **standing**.

(私は立つてゐる事が好きです)。

の **standing** は「起つてゐる事」と、或る動作の名を示し、動詞 **like** の目的になつて、名詞同様の役目をしてゐるから、此時は現在分詞とは云はないで、**體用詞**と云ふのである。

(A) 體用詞の形

體用詞には、四つの形がある。

- ① **writing** (書くこと)。
- ② **having written** (書いてしまうこと)。
- ③ **being written** (書かれること)。
- ④ **having been written** (書かれてしまうこと)。

上の二つの ①, ② が能動態で、下の二つ ③, ④ が受動態、また **having** を使つたのが完了形である。完了形は上級の英文法で學んで下さい。

(B) 名詞の役目

體用詞が名詞の役目をするると云ふのは、どんなことかと云ふと

- ① 主語となること
- ② 動詞の目的語となること
- ③ 前置詞の目的語となること
- ④ 補(足)語となること

以上四つを云ふのである。この中 ③ を除く三つの役目は、既に説明した名詞の役目をする不定詞も同じくするのであるが、④ だけは體用詞に限つた役目なのである。

(1) の例(主語)

^{ライティン} **Writing** good English is not easy. ^{イーズイ}

(立派な英文を書くことは容易でない)。

これを

To write good English is not easy.

と、不定詞を使つてもよろしいが、その場合には、普通假設主語の **it** を使つて

It is not easy to write good English.

とする。もう一例舉げて見ると。

^{ウォーキン} **Walking** is a good exercise. ^{エクササイズ}

(=**To walk** is a good exercise.)

(歩行はよい運動である)。

ただし、今述べた通りに、不定詞を主語に使ふ時は、假設主語 **it** を使つて

It is a good exercise to walk.

と云つた風にするのが普通である。

(2) の例(動詞の目的語)

I like reading. (私は本を読むことが好きです)。

これは不定詞を使つて

I like to read.

としても勿論同じである。ただし不定詞の時には、**it** を假設目的語とする場合もあるが、體用詞にはこれがないことは、主語として使はれる場合も同じである。

^{ヒリーブ} **I believe walking** in the ^{アーリ} ^{モーニン} early morning a good exercise.

(=**I believe it** a good exercise **to walk** in the early morning.)

(朝早く歩行することはよい運動だと私は信じます)。

am fond of = like [好む, 好き]。 **earn** [ɜ:n] 儲ける。 **novel** [nóvəl] 小説。

(3) の例 (前置詞の目的語)

^{ふオンド}
I am fond of reading.

(私は本を読むことが好きです)。

これを I am fond of to read. とすることは出来ない。前置詞の目的語に不定詞を使つてはいけないのがきまりである。

動詞の目的語としては、體用詞も不定詞も、どちらを使つてもよいが、前置詞の目的語には必ず體用詞を使つて、不定詞は決して使はないのである。

(4) の例 (補足語)

^{スイーイん} ^{ビリーブイん}
Seeing is believing.

(見ることは信ずることである。=百聞は一見に如かず)。

これを To see is to believe. としても同じである。

(C) 體用詞と名詞

よく似てゐるが、純然たる名詞には冠詞が必要で、これを説明する語は形容詞であるが、體用詞には冠詞は不用で、説明する語は副詞でなくてはならぬ。次の例を注意して貰ひたい。

^{アーンズ} ^{リブイん} ^{ライテイん} ^{ノブアルズ}
① He earns his living by the writing of novels.

② He earns his living by writing novels.

(彼は小説を書いて生計を立てゝゐます)。

両方共(彼は小説を書いて生計を立ててゐる)と云ふ意であるが、①は純然たる名詞であるから、冠詞の the を付け、またその次にちかにその目的語を置かないで、of をはさむのである

walking [wɔ:kɪŋ] 歩行。 exercise [éksəsaiz] 運動。 believe [biliv] 信ずる。

が、②は體用詞であるから、冠詞は不用、目的語がちかに附くのである。

^{アーリ} ^{ライズイん} ^{ヘルス}
① Early rising is good for the health.

② Rising early is good for the health.

共に(早起きは健康によい)であるが、①は名詞で、それに附く early は形容詞、②は體用詞で early は副詞である。

(D) 體用詞に関する主なる Idiom (慣用句)

^{キャノット} ^{ヘルプ} ^{ゼランド}
(1) (Cannot help + Gerund) = (～せざるを得ない)

^{フィーリン} ^{サド}
① I cannot help feeling sad.

(私は悲しまざるを得ない)。

^{ラーフイん}
② I could not help laughing.

(私は笑はずにゐられなかつた)。

(2) (There is no + Gerund) = (～することは出来ぬ)

^{ダイナイイん} ^{ファクト}
③ There is no denying the fact.

(=It is impossible to deny the fact.)

(その事實を否定することは出来ない)。

^{ノウイん}
④ There is no knowing when he will come.

(いつ彼が来るか分らない)。

(3) (On + Gerund) = (～するや否や)

^{リーブイん} ^{ビズニス}
⑤ On leaving school, he went into business.

(學校を出ると直ぐ彼は實業に就いた)。

is good for the health [健康によい]。 feel sad [悲しむ]。
deny [dinái] 否定する。 impossible [impɔsəbl] 不可能な。 Go
into business [biznis] 實業に就く。

① ^{アライブイん} **On arriving** at the station, I motored to the ^{ステイシヤン} **station**, I motored to the ^{モウタド} **hotel**.

(停車場に着くや否や私は自動車ホテルへ行つた)。

(4) ^{ワース} (**Worth+Gerund**) = (～する価値がある)

⑦ **It is not worth reading**

(それは読み甲斐のない本だ)。

⑧ ^{ウオツテガア} **Whatever is worth doing is worth doing well**

(する価値のあることは何んでも立派になす価値がある)。

(5) (**Go+Gerund**)

^{ボウテイん} **Go boating** (船漕ぎに行く)。^{フイシン} **Go fishing** (漁に行く)。

^{シューテイん} **Go shooting** (銃獵に行く)。^{スワイミン} **Go swimming** (水泳に行く)。

⑨ ^{アハンテイん} **He has gone a-hunting.**

(彼は獵に行つてゐる)。

⑩ ^{マサア} **Mother goes shopping** in the morning and ^{シヨビん} **shopping** in the morning and ^{モーニん} **morning** and ^{ファアサア} **father hunting**.

(母は朝買物に行き父は獵に出かけます)。

(15) ^{スイークワンス} **時の照應 (Sequence of Tenses)**

(時の照應)

① ^{サインク} **I think** (that) he ^{アメリカン} **is an American.**

motor [móutə] 自動車で行く。 **worth** [we:θ] 価値ある。 **a-hunting** [əhántig] 狩に。 **Sequence of Tenses** [sí:kwəns əv ténsiz] 時の照應。

(僕は、彼は米國人であると思ふ)。

② ^{ナオート} **I thought** (that) he **was** an American.

(僕は、彼は米國人であると思つた)。

英語では、主節の動詞が過去ならば、従属節の動詞も過去の類でなくてはならぬといふ規則がある。

今上例の二文を比較して見ると、日本語では(～と思ふ)が(～と思つた)に變つても、(～である)は變らないが、英語では‘think’が‘thought’に變ると共に‘is’が‘was’に變つて居る、これが即ち上に述べた規則によるのである。これを(時の照應=Sequence of Tenses)と云ふのである。

(A) 原則の一 (主節の動詞が現在の場合)

時の照應、即ち主節の動詞が現在か現在完了か未来である時は、従属節の時は無制限である、云ひかへれば従属節の動詞はどんな Tense でも差支へないから、皆で十二あるわけである。次に主節の動詞に現在を用ひて、十二文例を示して見やう。

I think that	he writes a letter.	①
	he is writing a letter.	②
	he has written a letter.	③
	he has been writing a letter.	④
	he wrote a letter.	⑤
	he was writing a letter.	⑥
	he had written a letter.	⑦
	he had been writing a letter.	⑧
	he will write a letter.	⑨
	he will be writing a letter.	⑩
	he will have written a letter.	⑪
	he will have been writing a letter.	⑫

(B) 原則の二 (主節の動詞が過去の場合)

主節の動詞が過去の場合は、従属節の動詞も過去か過去完了か過去未来でなければならぬ。上の十二例の主節の動詞を現在の“think”から過去の“thought”にかへれば、従属節の動詞もそれに伴つて次の如き変化を生ずるのである。

I thought that	he wrote a letter.	①
	he was writing a letter.	②
	he had written a letter.	③
	he had been writing a letter.	④
	he had written a letter.	⑤
	he had been writing a letter.	⑥
	he had written a letter.	⑦
	he had been writing a letter.	⑧
	he would write a letter.	⑨
	he would be writing a letter.	⑩
	he would have written a letter.	⑪
	he would have been writing a letter.	⑫

①の write は wrote に、②の is は was に、③、④の has は had にと、①から④までは現在が過去に變つたものといへる。

⑨、⑩、⑪、⑫の will が would に變化したのも矢張り現在からの過去への變化といへる、それと同様に shall は should となるのである。

⑤の wrote は had written に、⑥の was は had been に變化してゐる、これは過去が過去完了に變つたものと云へる。

⑦の had written と⑧の had been は過去完了であるから變化がない。

(C) 例外

時の照應の規則には二つの例外がある。

(A) 一般的眞理、習慣的動作及び現在の事實はたとひ主節の動詞が過去でも、現在のまゝでよい。例へば“The earth moves round the sun.”(地球は太陽の周圍を廻る)は眞理であるから

① The teacher ^{ティーチア} told ^{トウルド} us that the earth ^{アース} moves ^{ムーブズ} round ^{ラウンド} the sun. ^{サン}

(地球は太陽の周圍を廻ると云ふ事を先生が僕等に話した)の如く主節動詞が‘told’と過去でも、従属節の動詞は‘moves’と現在でよいのである。

② He ^{ユースト} used ^{セイ} to say that knowledge ^{ノリツヂ} is ^{パウア} power. (彼は知識は力であると常々言つてゐた)。

も一般的の眞理である。

③ He ^{アースクト} asked ^{テイク} me why I ^{ウォーク} take ^{エブリ} a walk every morning. (私は何故毎朝散歩するかと彼は私に尋ねた)。

これは習慣的動詞を表はしたものである。

④ He ^{スイムズ} seemed ^{ソリ} sorry to hear that I ^{ヒア} am ^{オールウイズ} always ill. (私は始終加減が悪いことを聞いて彼は氣の毒に思つたらしい)。

⑤ I ^{ボート} bought ^{ハウス} the house two years ago that I ^{アゴウ} live ^{ナウ} in now. (私は二年前に買った家が今も住んでゐる)。

used to [~するのが常であつた]。 knowledge [nólidz] 知識。 power [páue] 力。

(私の今住んである家は二年前に買ったのだ)。

以上 ④, ⑤ は現在の事実を表はしたものである。

(B) 歴史上の事実を述べる過去は、たとひ主節の動詞が過去でも、過去完了に變らない。“Columbus discovered America.” (カラムバスが亞米利加を發見した) のは歴史上の事実であるから、

The ^{ティーチャ} teacher ^{カラムバス} told us that ^{デイスカボアド} Columbus ^{アメリカ} discovered America.

(カラムバスが亞米利加を發見したと先生が僕等に教へた)。

であつて、“had discovered” とはならぬのである。

(16) 話法 (Narration) ^{ナレイション}

(A) 直接話法と間接話法

人の云つた事をそのまま傳へるのを直接話法 (Direct Narration) ^{ダイレクト ナレイション} と云ひ、單に趣意だけを取り自分の言葉に直して傳へるのを間接話法 (Indirect Narration) ^{インダイレクト} と云ふ。例へば、甲が “I am very busy.” ^{ブエリ ビズイ} (私は大層忙しい) と云つてゐるのを乙が聞いて來て丙に傳へるのに

He says, “I am very busy.”

(彼は「僕は非常に忙しい」と云つてゐる)。

と云ふのは直接話法である。“say” の次が (,) で仕切られ、

Narration [nəˈreɪʃən] 話法。 Direct [dɪˈrekt] Narration [直接話法]。 Indirect [ɪndɪˈrekt] Narration [間接話法]。 Quotation Mark [kwɒtəˈɪʃən mɑ:k] 引用符。

甲の云つた言葉が引用符號 (Quotation Mark) ^{クウオーテイション マーク} で前後を圍まれて居る事に注意して下さい。甲が云ふて居る事の趣意だけを傳へるならば、“say” の次の Comma (コムマ) をやめて、“that” と云ふ接續詞にし、引用符號を除いて甲が “I” と云つたのは乙から見れば “he” だから

He says that he is very busy.

(彼は大層忙しいと云つて居る)。

とするのである。即ち I am が he is に變つただけで Tense (時) は元通りの現在で變化はない。

然るに “says” を “said” にして、

He said, “I am very busy.”

(彼は「僕は非常に忙しい」と云つた)。

と云ふのを間接話法にすると

He said that he was very busy.

となつて、“I am” が “he was” に變つてしまつた。間接話法の方だけ並べて見ると、

He says that he is very busy.

He said that he was very busy.

の如くで、“says” が “said” に變ると共に “is” が “was” に變つて居る。かういふ現象は間接話法に於てばかりでなく、凡ての複合文に於て起ることで、前項で述べた所謂時の照應である。

(B) 直接話法より間接話法へ

直接話法を間接話法に直すには、第一に其場合に適合する様に代名詞の人稱を改めねばならぬ。例へば、甲が云ふ “I” は、乙が丙に向つて話す場合には “he” であり、甲が乙に向つて云ふ “you” は乙からは “I” であるから、

- He said, "I am sorry you are ill."
 (「君が病気で僕は気の毒に思ふ」と彼が言つた)。
 He said that he was sorry I was ill.
 (僕が病氣なのを彼が気の毒だと云つた)。

の如き関係となる。

此外にも場合によつて次の如き變化を要することが往々ある。

直接	間接
this (これ)	that (それ)
here (此所)	there (彼處)
now (今)	then (其時)
to-day (今日)	that day (其日)
to-morrow (明日)	the next day (其翌日)
yesterday (昨日)	the day before (其前日)

(C) 疑問文を間接話法へ

疑問文を間接話法に直すには

- ① He said, "Who are you?"
 =彼は「あなたはどなたですか」といつた。
 He asked me who I was.
 =彼は僕が誰であるかを尋ねた。
- ② He said, "Where are you going?"
 =「君は何處へ行くか」と彼が言つた。
 He asked me where I was going.
 =彼は僕が何處へ行くかを尋ねた。

の如くする。即ち“say”が“ask”に變り、疑問詞が所謂附屬疑問詞となつて接續詞の役目をするから“that”は不要である。

(D) 疑問詞のない疑問文即ち直接疑問文の場合。

この場合には(〜かどうか)の意の“if”又は“^{ウエナア}whether”と云ふ接續詞を用ゐなければならぬ。

- ① He said, "Are you ill?"
 (「あなたは病氣ですか」と彼が云つた)。
 He asked me if I was ill.
 (彼は僕が病氣であるかを尋ねた)。
- ② He said, "Do you know English?"
 (「君は英語を知つて居るか」と彼が云つた)。
 He asked me whether I knew English or not.
 (彼は僕が英語を知つて居るかどうかを尋ねた)。

此場合の“if”は「若しもならば」といふ Adverb Clause (副詞句)を率ひる“if”とは全然性質が違ふ、“whether or not”と同じ意味で「であるか否か」といふ Noun Clause (名詞節)を率ひる接續詞である。

(E) 命令文を間接話法へ。

命令文を間接話法に直すには“say”の代りに“tell,” “order”などを用ひ、前に命令法の動詞であつたものを Infinitive「不定詞」(原形に to のついた形)に變へて次の様な形とする。

- ① I said to them, "Be quiet."
 (=「静かにせよ」と私は彼等に言つた)。
 I told them to be quiet.
 (=私は静かにせよと彼等に命じた)。

否定命令は“not to~”といふ形になる。

- ③ { I said to them, "Don't ^{メイク} make such a ^{ノイズ} noise."
 (=私は彼等に「そんな騒ぎをするな」といつた)。
 I told them **not to make** such a noise."
 (=私は彼等にそんな騒ぎをせぬ様に命じた)。

第六章 Adverb (副詞)

今例を擧げて説明すると、例へば ^{ビューティフル} beautiful ^{フラワー} flower (美しい花) の beautiful (美しい) は flower (花) と云ふ名詞を説明するもので、即ち形容詞である。所が Flowers bloom ^{ブルーム} beautifully. (花美しく咲く) と申せば、其 beautifully (美しく) は直接 flower (花) を説明せず、それがどんな風に咲いて居るか、bloom (咲く) と云ふ動詞を説明することになり、即ち副詞なのである。また very beautiful flowers (甚だ美しき花) の (甚だ) 即ち very は形容詞の beautiful (美しき) を説明せるもの、また Flowers bloom very beautifully. (花甚だ美しく咲く) の very (甚だ) は副詞の beautifully (美しく) を説明するもので、何れも皆副詞なのである。

日本語では (美しき) の如き (花) (「い」列の音) で終る語は大抵皆形容詞で、(美しく) の如き (花) (「う」列の音) で終る語は大抵副詞である。

(1) 副詞の種類

副詞には次の三種類ある。

- ① 単純副詞 (Simple Adverb) — 動詞、形容詞及び他の副

Simple Adverb [sɪmpl ədɜ:və:b] 単純動詞。

詞を單に形容 (即ち説明) するものが、その大部分を占めてゐるが、又時としては他の品詞は勿論、文章全體を形容することもある。

- ① He speaks English ^{フルアントリー} fluently. (動)

(彼は流暢に英語を話す)。

〔註〕 副詞 fluently は動詞 speaks を形容。

- ② It is ^{ファイン} very fine to-day. (形)

(今日は大變天氣がよい)。

〔註〕 副詞 very は形容詞 fine を形容。

- ③ He sings **wonderfully well**. (副)

(彼は恐ろしく歌が上手だ)。

〔註〕 副詞の wonderfully が副詞 well を説明せる場合。

- ④ ^{イーブン} Even a boy can do it. (名)

- ⑤ Even he can do it. (代名)

(子供(彼)でさへそれが出来る)。

〔註〕 副詞 even が ④ の場合は名詞 a boy を、⑤ の場合は代名詞 he を形容せる例。

- ⑥ This ^{ミステイク} mistake was made ^{メイド} ^{インタイアリ} entirely ^{スルー} through ^{フォールト} your fault. (前)

(この失策は全く君の過失から起つたのだ)。

〔註〕 through your fault の through は (～のために、～によつて) の意で「原因を表はす」前置詞である。(全く～によつて) と副詞 entirely が前置詞 through を修飾せる場合。

fluently [flúəntli] 流暢に。 wonderfully [wándəfuli] 驚くべき程。 even [i:vən] ～でさへ。 entirely [intáíəli] 全く。 fault [fɔ:lt] 過失。

⑦ I don't like this place ^{ライク} simply ^{プレイス} because ^{スイムプリ} the air ^{ビゴズ} is ^{エア} too hot. (接)

(私がこの土地を好まないのは、全く空気が暑過ぎるからだ)。

〔註〕 because は (～のために) の意で接続詞である。(全く～のために) と副詞 simply が because を形容せる例。

⑧ Evidently ^{エビダントリ} you are ^{ろん} wrong. [全文]

(明かに君は間違つてゐる)。

⑨ Happily ^{ハピリ} he did not ^{ダイ} die. [全文]

(幸にも彼は死ななかつた)。

〔註〕 ⑧, ⑨ は何れも副詞 evidently, happily が文全体を修飾せる場合である。

② 疑問副詞 (Interrogative Adverb) — where ^{インタラガテイぶ} (何處), when ^{ウエン} (何時), why ^{ウワイ} (何故), how ^{アドブアーブ} (どうして) の如き、問ひの文に用ひる語を云ふ。

③ 関係副詞 (Relative Adverb) — 同じく where, when, why, how 等の語が、節 (clause) ^{ウエア} をつなぐ役目をする時、即ち接続詞と副詞の二つの働きを兼ねてゐるもの。形は疑問副詞と同じだが疑問の意を有してゐない。

(2) 單純副詞

① 分類 — 意義上次の數種に分類することが出来る。

(A) 時を表はすもの

simply [simpli] 單に、全く。 evidently [évidentli] 明かに。 happily [hæpili] 幸にも。 Interrogative [intərogativ] Adverb [疑問副詞]。 Relative [rélativ] Adverb [關係副詞]。

now ^{ナウ} (今), then ^{チエン} (其時); before ^{ビフオー} (前), since ^{スインス} (以來), ago ^{アゴウ} (～前); already ^{オールレダイ} (既に), soon ^{スーン} (直ぐ); early ^{アーリ} (早く), late ^{レイト} (遅く); yesterday ^{イエスタデイ} (昨日), to-day ^{タデイ} (今日), to-morrow ^{タモロウ} (明日), always ^{オールウイズ} (常に), often ^{オーフン} (屢々), never ^{ネバア} (決して～ぬ), again ^{アゲイン} (再び) 等。

(B) 場所を表はすもの

here ^{エイサイン} (此所に), there ^{ウイナアウト} (彼處に); in ^{アバぶ} (内へ), out ^{ビロウ} (外へ); within ^{ムアア} (内部に), without ^{ニア} (外部に); above ^{サムウエア} (上に), below ^{エぶりウエア} (下に), far ^{エぶりウエア} (遠く), near ^{ノウウエア} (近くに); somewhere (何處かに), everywhere (到る處に), nowhere (どこにも～ない) 等。

(C) 程度を表はすもの

very ^{ブエリ} (非常に), much ^{マツチ} (多く), too ^{トゥー} (～もまた、あまりに), quite ^{クワイト} (全く), hardly ^{ハードリ} (かろうじて～する), enough ^{イナフ} (十分), just ^{ジャスト} (丁度), almost ^{オールモウスト} (殆んど), nearly ^{ニアリ} (殆んど:～近く), only ^{オウンリ} (ほんの、只), simply (全く、單に) 等。

(D) 性状、方法を表はすもの

slowly ^{スロウリ} (徐々と), surely ^{シユアリ} (きつと), readily ^{レデイリ} (快よく), kindly ^{カインドリ} (親切に), well ^{ウエル} (よく), fast ^{ファースト} (早く), suddenly ^{サドンリ} (俄かに), gladly ^{グラッドリ} (喜んで), thus ^{チアス} (かくの如く), so ^{ソウ} (それ故), probably ^{プロバブリ} (多分) 等。

(E) 肯定及び否定を表はすもの

yes (はい), no ^{ノー} (いゝえ), not ^{サートンリ} (～ぬ); certainly ^{インデイード} (確に、承知しました), indeed ^{ネバア} (實に), never (決して～ぬ) 等。

(3) 副詞の比較変化

副詞の比較は大體に於て形容詞の場合と同じであるが、少し例を擧げて見やう。

(A) 一音節の語及二音節の語のあるものは、原級の語尾に 'er' を付けて比較級、'est' を付けて最上級を作る。

スーン	スナ	スニスト
soon (直ぐ)	sooner	soonest
レイト	レイタ	レイテイスト
late (遅く)	later	latest
ニア	ニアラ	ニアリスト
near (近くに)	nearer	nearest
オーフン	オーフナ	オーフニスト
often (屢々)	oftener	oftenest
アーリ	アーリア	アーリイスト
early (早く)	earlier	earliest
ファースト	ファースタ	ファーステイスト
fast (早く)	faster	fastest

(B) 'ly' に終る副詞は **more, most** を前に付けて比較級及び最上級を作る。但し **early, earlier, earliest** は例外。

ハピリ	モー	モウスト
happily (幸福にも)	more happily	most happily
クワイツクリ		
quickly (早く)	more quickly	most quickly
サドンリ		
suddenly (俄かに)	more suddenly	most suddenly

(C) 不規則な変化をするもの

ウエル	ベタ	ベスト
well (よく)	better	best
イル バドリ	ワース	ワースト
ill (badly) (悪く)	worse	worst
マツチ	モー	モウスト
much (多く)	more	most
リトル	レス	リースト
little (少く)	less	least

(4) 副詞の位置

既に述べた形容詞も其通りであるが、總て副詞でも形容詞でも、成るべく其説明せられる語の傍に置くのが通例である。所

が副詞は前にも申す通り其説明する語は ① 動詞, ② 形容詞, ③ 他の副詞, ④ 接續詞や前置詞と云つた風に種々あるから、それに附く副詞の位置も、同じく(傍に置く)とは云ひながらも、其説明さるゝ語に依て一様でないのである。

(A) 動詞を説明する副詞の位置は

(1) 自動詞の場合には其次に副詞を置いて

ワークス ハード
① He works hard. (彼は充分に働く)。

ウエント アーリ
② I went early. (僕は早く行つた)。

の様にする。

オールウイズ ネぶア オーフン サムタイムズ ゼナラリ
但し **always, never, often, sometimes, generally** 等の場合には、**動詞の前に置くのである。**

ゼナラリ クウオータ パースト
① I generally go to school at a quarter past seven.
(私は大抵七時十五分に學校へ行きます)。

オーフン
② He often comes here to see me.
(彼は私に會ひによく此處に来ます)

オールウイズ デイリヂアント アニスイン
③ Always be diligent in doing anything.
(何事をするにも常に勤勉であれ)。

(2) 他動詞の場合には其目的語 (Object) の次か又は動詞の前に置いて

① He told me kindly. (彼は親切にも私に話した)。

カインドリ レンド
② Will you kindly lend me that magazine?
(どうかその雑誌を貸して下さいませんか)。

sometimes [sámtaimz] 時々。 **generally** [džénərəli] 大抵, 概して。

自動詞に前置詞が付き他動詞の意味になる時も同様(目的語の次に)

③ I go to school early. (私は早く学校に行く)。

(3) 助動詞と本動詞と二つある時は、副詞が「時」を示す語であれば

① 主語+助動詞の前。 ② 本動詞の前。

③ 目的語の次。

この①②③の何れに置いてもよろしい。ですから

① Soon he has returned the book.

② He has soon returned the book.

③ He has returned the book soon.

(彼はちきに本をかへした)。

尤も中には必ず②又は③に置かねばならぬといふ例外の語も多少あるが、大體に於てこれが規則になつて居るのである。

(B) 動詞以外の語、即ち形容詞、副詞、接續詞、前置詞等に附く副詞は、大抵其前に置く。

① 形容詞に附く副詞の例

It is very cold. (大變寒い)。

② 副詞に附く副詞の例

He works pretty hard. (彼は可なりよく働く)。

③ 接續詞に附く副詞の例

He left soon after I arrived.

(私の着いた後間もなく彼は立去つた)。

④ 前置詞に附く副詞の例

He left soon after my arrival.

(私の到着後間もなく彼は立去つた)。

〔註〕③の after は接續詞で、④の after は前置詞である。

(C) 時を表はす副詞と、場所を表はす副詞と共に用ふる場合には、場所を先にし、時を表はす副詞を後にする。

① A severe earthquake took place in the Kanto district ten years ago.

(十年前關東地方に大激震がありました)。

② An art exhibition will be held here on and after the 1st of May.

(美術展覽會が五月一日より當地で開かれる筈)。

(D) 一語の副詞は文中に置くこともあるが、熟語の副詞は大抵は文尾に置くことが多い。

① The cherry-blossoms at Ueno are now at their best.

(上野の櫻花は目下満開です)。

② A bad cold is prevalent in this city at present.

(悪性の感冒が目下流行してゐます)。

(5) 注意すべき副詞の用法

〔(イ) Not〕

It is not a dog. だの、I did not go. などの not は總て副詞である即ち動詞に附いて否定文を作る時に必要の副詞である。

earthquake [ɜ:Okweik] 地震。 severe [sivɪə] 激しい。 take place [取る]。 district [distrikt] 地方。 art exhibition [eksibiʃən] 美術展覽會。 on and after [～より]。 be at one's best [満開である]。

否定文の作り方は、既に説明が済んで居るので、従つて not の使ひ方も解つて居る筈だから、こゝに繰返へす必要はないと思ふ。

唯一つ御注意申して置きたい事は ^{ナサイン} nothing だの ^{ノウボダイ} nobody, ^{ナン} none, ^{ネガフ} no——の如き、また never の如き既に否定の意を表はす語句のある時は重ねて not を用ひる必要はない、not を重ねて用ひては否定を否定して肯定に戻つてしまふ事である。

「誰も行かなかつた」を

Nobody did not go.

としては誤りである。

Nobody went.

でよいのである。

「一度も行つた事がない」を

I did not never go there.

としては誤りである。

I never went there.

でよいのである。

また ^{ホウブ} I hope not. だの ^{サインク} I think not. だのよく使はれることであるが、一寸考へると (私は望まない) なら I do not hope. として、(私は考へない) なら I don't think. としなければならぬ様に考へられるが、實はこの not は hope や think を打消して居るのではない、では not は何を打消してゐるのかと云へば、例へば

甲の人が ^{ふエイル} He will fail in the ^{イクザミネイション} examination. (彼は試験に落第するだらう) と云つたに對して、乙が I hope not. と答へる。すると其意は

I hope that he will not fail in the examination.

(試験に落第しない様に望む = どうか落第しなければよいが)。

なのである。即ち not は先方の言葉 He will fail in the examination. を打消して居るもので、其中先方の言葉と同じ部分を省いて not だけを言つて居るのである。

同じわけで

You say he is faithful, but I think not.

も實は以下が

but I think that he is not faithful.

とあるべきを略したものなのである。

〔(口) Yes と No〕

人に何か問はれた時、日本語で、「ハイ」「イエ」といふと同じ様に、yes と no を使ふ。そして此兩語は副詞なのである。

yes は常に「ハイ」で、no は常に「イエ」と誤解してはいけない。時によると yes が「イエ」、no が「ハイ」に當る事がある。

それはどんな場合かと申すと、先方が「何々でないか」といつた風の否定の問を發した時例へば、甲が

Don't you like it? (これがお好きではありませんか)。

と問ふに對し、日本語なら

① ハイ、好きません。

② イエ、好きです。

と云ふ。即ち先方の言ふ通り「好きでなく」ば「ハイ」で、反對なら「イエ」である。所が英語では

① No, I don't like it.

② Yes, I like it.

といふのである。即ち先方が「好きですか」と問ふても「好きでないか」と問ふても、それには頓着なく「好き」なら **yes** 「好かぬ」なら **no** といふ。だから此場合 **yes** が「イエ」に當り、**no** が「ハイ」に當ることが分る。

總て英語の **yes, no** の使ひ方は、先方の問の言葉には頓着しないのである。そしてその肯定の答をする時には、先方の問が何であらうとも **yes** を、否定の場合には **no** を使ふのである。

〔(ハ) **Very** と **much**〕

① **very** は形容詞、副詞を形容し、**much** は動詞を形容する。

① I like coffee **very much**.

(私はコーヒーが大層好きです)。

② Isn't it a **very beautiful** sunrise?

(大そう美はしい日出ではありませんか)。

〔註〕 ①上例 **much** は動詞 **like** を形容し、**very** は **much** なる副詞を、又 ②の **very** は **beautiful** なる形容詞を形容する副詞である。

③ **very** は形容詞、副詞の原級を形容し、**much** は比級較、最上級を形容するに用ひる。

① Taro is **very tall**.

(太郎は大變丈が高い)。

② Taro is **much taller** than Jiro.

(太郎は次郎より甚だ丈が高い)。

③ 現在分詞を形容するには **very**、過去分詞を形容するには **much** を用ひる。

sunrise [sʌnraɪz] 日出。

① It is a **very pleasing** news.

(大變嬉しい知らせだ)。

② He was **much pleased**.

(彼は大變喜んだ)。

但し **tired** は例外である。

I am **very tired** and want a few hours' sleep.

(大變疲れた、二三時間眠りたい)。

〔(ニ) **Seldom, hardly, scarcely**〕

いづれも「殆んど～せぬ」と打消しの如く譯する副詞である。

① As he gets up **very late** in the morning, he has **hardly** time to wash his face or brush his hair.

〔彼は朝は非常に遅く起きるので、顔を洗ひ、髪をとく時間が殆んどない)。

② Wine is **seldom** made in England, but you can get foreign wines from the wine merchants.

(葡萄酒はめつたに英國では作らないが、外國の葡萄酒は酒屋から買ふことが出来る)。

③ I was so loaded that I could **scarcely** walk.

(私は荷物を大變積まれてゐたので、歩き兼ねました)。

(ホ) **Already** と **Yet** と **Still**

already は肯定叙述文に用ひ、**yet** は否定文、肯定疑問文に用ふ。**still** は **not** のない文、即ち肯定文に用ひられ (まだ

news [nju:z] 知らせ。 **seldom** [sɛldəm]。 **hardly** [hɑ:dlɪ]。 **scarcely** [skɛəslɪ] 殆んど～せぬ。 **load** [ləʊd] 荷物を積む。

～して居る)の意を表はす。

① Has he come here yet?

(もう彼は此處へ来ましたか)。

② No, not yet (いや, まだです)。

③ When I got to the station, the ^{トレイン} train had ^{オールレディ} already started.

(私が停車場に着いた時は, 汽車はもう出た後でした)。

④ Is he still in bed?

(彼はまだ寝ておますか)。

〔(へ) Ever, never, once〕

Ever も once 「嘗て」の意であるが, 其區別は already と yet との區別と同じで

① 問の文には ever を用ひ

② 答の文には once を用ひ

それから

③ 答の否定文には never (これは not と ever と二語と同じもの) を用ひるのである。

① Have you ^{エゴア} ever been there?

(嘗て其處へ行つた事があるか)。

② Yes, I have ^{ワンス} once been there.

(ハイ, 嘗て行つた事があります)。

③ No, I have ^{ネゴア} never been there.

(イヤ, 嘗て行つた事ありません)。

尤もこの once は「一度」の意であるから, 「二度」行つた

keep in mind [心に留める]。

事があるのなら ^{トワイス} twice, 「數度」なら ^{セボラル タイムズ} several times といった風に, 適當に once を他の度數を表はす語に変更せねばならぬは勿論の事である。ever が問ひの文でなく, 普通の肯定文に用ひられる場合がある。

① I have lived here ^{スインス} ever since I was ^{ボーン} born.

(私は生れてからずっと此處に住んでゐる)。

② Ever ^{キープ} keep this in ^{マインド} mind.

(常にこれを心に留めよ)。

の様に ever が(常に), (ずっと始終)の意に用ひられる時と, それから

① He is the ^{ファイニスト} finest gentleman I ^{ソー} ever saw.

(自分の嘗て見た中で彼が一番立派な紳士だ)。

② Ieyasu was the ^{グレイテイスト} greatest man that our country ^{カントリ} has ^{ブラデュースト} ever produced.

(家康は我國が嘗て産んだ中の最も偉い人だ)。

斯んな風に(嘗て～の中の最も～だ)と云ふ文の(嘗て)には once でなく 'ever' を使ふのである。

〔ト) Ago, since, before〕

I came ^{ホウム} home ten days ^{マンサス} since, three months ^{ビホオー} before
I was ^{フアーラウト} far out at ^{スイー} sea.

(私は十日前に歸宅したが, 其三ヶ月前に遠く外遊した)。

上例中の since も before も邦語では同じく(前)と譯すが, 其間には判然たる區別があるのである。

produce [prədju:s] 産する。

① **since** は現在を標準として(今より何日前)など云ふ時に用ひられる。尤も此場合 **ago** を用ひても差支はない。此兩語は同意である。上例の **since** を **ago** に改めても、もとより差支はない。但し

Yoritomo lived in our country about seven hundred years ago.

カントリ アバウト ハンドラド
アゴウ

(頼朝は約七百年前に我國に居たんだ)。

此文の **ago** を **since** には改めない方がよい。其理由は幾十年幾百年といふ「前」をいふには **ago** を成るべく使ふ習慣になつて居るから。

② **before** は或る過去の時を標準として、「それより更に幾日前」などいふ時に用ひる。

上例も其通りで、一方は今より十日前で、一方は其十日前に帰宅した時より更に三ヶ月前といふのである。

此外、**ago**, **since**, **before** に就いて注意すべき事は

① **before** が單獨に用ひられる時は、例へば I saw it before. は **before now** の意で「(今より)前に見た」He showed it me last year, but I told him that I had seen it before. は **before then** の意で「去年彼が私に見せたが、其時私は(其時より)前にそれはもう見たと言つた」の如く **before now** 又は **before then** の意をあらはして居るのである。

② **since** が單獨に用ひられる時、I met him last month and have not seen him since. 「前月彼に遇つたが、其後は遭はない」の様に **since then** (其後)の意をあらはすのである。

③ **ago** は單獨には決して用ひない。だから He was here

ago. 「彼は以前此處へ来た」など書いては誤りである。**ago** を **before** に改めるか、**ago** に其時を示す語句を付けて He was here a week ago. の様に訂正せねばならぬ。

〔(チ) Too~to〕

Too~の次に **to**~といふ句の來る事がある。例へば

It is too hot to go out.

とするとこれは

It is so hot that I can not (又 must not) go out.

暑いから外出できぬ(又してはならぬ)。

の意になる。即ち

too~to~=so~that~ $\left\{ \begin{array}{l} \text{can not} \\ \text{must not} \end{array} \right\}$

といふ事をよく注意して置いて貰ひたい。

He spoke too fast for me to understand.=He spoke so fast that I could not understand him.

又書き直して

He spoke very fast, so I could not understand him.

(餘り早く言つたので僕には解らなかつた)。

〔(リ) Not always=必ずしも~ならず〕

① The wind does not always play. It has work to do.

(風は必ずしも遊んでゐるとは限らない。風にはする仕事がある)。

② Those who have read everything are thought

to understand everything; but it is not always so.

(あらゆる物を読んだ人はあらゆる物を了解すると思はれるが必ずしもさうとは限らない)。

〔(又) The〕

‘The’ が冠詞でなく副詞として用ひられる事がある。其時には必ず比較級の語が来て、「それだけ」、「それに應じて」など云ふ意を表はす。

^{ワークト} ^{ハード} He worked hard, and ^{リスペクティッド} the more he was respected.

(彼は一生懸命働いたのでそれだけ尊敬された)。

この the の用法が更に擴がつて

(～すればするだけ、それだけ～)

と云ふ意味を表はすには

(the + 比較級~, the + 比較級)

と云ふ形がある。

^{ハード} The harder he works, the more he will be respected.

(彼は一生懸命働けば働くだけそれだけ餘計に尊敬されます)。

最初の the は(だけ)に當る關係副詞で、後の the が(それだけ)に當る單純副詞である。

此形の文の主語と動詞が it is とか they are とかいつた風のもので、格別なくても解る場合には、それを省いて文章を簡潔にするのが例になつてゐる。例へば

not always [必ずしも~ならず]。 understand [andəstænd] 了解する。 respect [rɪspɛkt] 尊敬する。

The more they are, the better they are.

(多ければ多い程よろしい)。

は略して

The more, the better.

と普通云ふのである。同様に

① The earlier, the better. ② The sooner, the better.

(早ければ早い程よい)。

これは“it is”が双方に略されてゐるのである。

(6) 疑問副詞

疑問副詞とは when, where 等の如く副詞であつて疑問詞に用ひられる語である。次に其用法を分類して例示して見やう。

I. 時を表はすもの

① When did he come?

(いつ彼は来たのか)。

② ^{ハウ} ^{ロン} How long will he stay ^{ステイ} here?

(どの位彼は當地に滞在しますか)。

③ How often do you go there?

(幾度君はそこへ行きますか)。

II. 場所を表はすもの

④ where do you live?

(君は何處にお住ひですか)。

⑤ ^{ハウ} ^{ファア} How far did you go?

(君はどの位——どこまで——行きましたか)。

III. 程度を表はすもの

⑥ ^{ライキット} How do you like it?

(それが何う気に入りますか)。

- ⑦ How far was the report true?
リポート トルー
 (その報はどこまで事実でしたか)。

IV. 性狀, 方法を表はすもの

- ⑧ How is he to-day?
 (彼は今日如何ですか)。

- ⑨ How did you do this?
 (どういふ風にして之をしましたか)。

V. 理由を表はすもの

- ⑩ Why did you not study?
スタディ
 (何故君は勉強しなかつたか)。

(7) 関係副詞

関係副詞とは副詞と接續詞との二つの働きを兼ねてゐる語である。

- ① Lincoln lived in the days when books were
リンカン プレンティフル
 not so plentiful as they are now.

(リンカーンは書物が今日程澤山ない時代の人であつた)。

- ② The town where I live contains thirty
タウン カンティンズ
 thousand inhabitants.

(私の住んでゐる町には人口が三萬ある)。

- ③ This is the reason why our river flows so fast.
リーズン リバア フロウズ ファースト
 (これが吾々の河がこんなに早く流れる理由である)。

report [ripó:t] 報告。 plentiful [pléntiful] 澤山な, 十分な。
 contain [kəntéin] 入れる, 含む。 inhabitant [inhæbitənt] 住民。

関係副詞は先行語を省略することがある。

- ① I don't know (the time) when he will come.
ノウ
 (私は彼の来る時間を知りません)。

- ② This is (the place) where he was born.
プレイス ボーン
 (こゝは私の生れた所です)。

- ③ He told me (the reason) why he had done so.
 (彼は私に彼がさうした理由を話してくれた)。

第七章 Conjunction 接續詞

(1) Co-ordinate Conjunction 等位接續詞

- ① I have a brother and a sister.

(僕には兄と姉がある)。

- ② Taro is diligent, but Jiro is idle.
デイリヂヤント アイドル

(太郎は勤勉だが, 次郎は怠惰だ)。

接續詞とは, 語と語, 句と句, 節と節とを接合するものであるが, その中文法上對等の語, 句, 節を接續するものを Co-ordinate Conjunction (等位接續詞) と云ふのである。上例①の“and”は a brother と a sister といふ語を結合してゐるのだが, a brother と a sister は此の場合文法上對等の位置にあるのである, 何れが主, 何れが従とも云ひ兼ねる, 五分五分の重要さを持つてゐるのである。また, ②の“but”は

Co-ordinate Conjunction [kouó:dinit kændʒəŋkʃən コウオー
 デイニツト ケンヂヤンクシヤン]。

Taro is diligent. なる節と, **Jiro is idle.** なる節を結合してゐるのだが, これとても同様, 二つの節に主従, 上下の區別はない。Taro is diligent. と云ふ文句も大切なれば, Jiro is idle. と云ふ文句も同様に大切なのである。斯様な場合に用ひられる, “and,” “but” が所謂等位接續詞なのである。

(2) ^{サボ-デイ} ^{ツト} ^{カンヂヤルクシヤン} **Subordinate Conjunction 従属接續詞**

① I know **that** he is honest.

(僕は彼が正直である事を知つてゐる。)

② He is honest, **though** he is poor.

(彼は貧乏であるが, 正直だ。)

Subordinate Conjunction (従属接續詞) とは, 主たる節に従属的の節を結合する役目の接續詞である。と云つただけでは解らぬかも知れないが, ①の “that” は I know と云ふ節と he is honest と云ふ節を結合してゐる。それはお分りでせう。ところで, 此の二つの節を比較研究して見ると, 其處に主従の別が表はれてゐる。さてどちらが主でどちらが従だらうか。勿論 I know が主で, he is honest が従である。次に ②の “though” はどうだらう, これは He is honest と he is poor の兩節を結合してゐるが, 何れが主で何れが従かと云へば, He is honest が主で, he is poor は従である。「彼は正直だ」と云ふのが主眼で, 「貧乏だ」と云ふのは云はば附けたりである。上例だけで見ると諸君は, かう思ふかも知れない。かう云ふ接續詞のある時は, 何時も文章の左項が主節で, 右項が従属節だと。併しそれは誤解である。上例 ②の如きは左と右と位置を換へて, 次の様に云つてもよい。

Subordinate [səbɔ:dɪnɪt],

^{チオウ} ^{プア} ^{オニスト}
Though he is poor, he is honest.

上例の外, 此の種に屬する接續詞に次の様なものがある。

① If you wish, I will go with you.

(君がお望みなら一緒に行かう。)

② The train started **before** I had got to the station.

(停車場へ着かないうちに汽車が出た。)

③ Let us wait **until** he comes.

(彼の来るまで待たう。)

④ He as well as you is to blame.

(君ばかりでなく彼も悪いのだ。)

⑤ Tell me **when** he comes.

(彼が來たら云つて呉れ。)

⑥ He succeeds **because** he perseveres.

(彼は忍耐するから成功する。)

⑦ I will not go, **for** I have a headache.

(僕は行かない, 頭が痛いから。)

^{ウイザアウト}
Not~without (～すれば～する)

⑧ It is no doubt true that we **cannot** go through life **without** sorrow.

(吾々は一生涯悲しみなしに過すことは出来ぬのは確に事實である。)

headache [hédeik] 頭痛。 **no doubt** [疑ひもなく, 勿論で]。
true [tru:] 信實で。 **go through life** [一生涯を過す]。 **sorrow** [sɔ:rou] 悲み。

- ① There can be ^{サンシャイン} no sunshine ^{シャドウ} without shadow.
(日光があれば必ずや陰の伴ふものである)。

A time~when=「~する時」

- ② A time will soon come ^{エアロプレーンズ} when aerplanes will ^{プラクティカル} be used for more practical purposes.
(飛行機がもつと實用向きに用ひられる時代がやがて来るでせう)。

However }
Whoever } + may = No matter { how }
Whatever } { who } ~とも
Whichever } { what }
 } { which }

- ③ ^{ハウエゴア} However hard you may try, you will not be ^{エイブル} able to finish this work by the evening.
(いかに一生懸命やつて見ても、この仕事を晩まで仕上ることは出来ないでせう)。

- ④ ^{ワイツチエゴア} whichever way you look, ^{ウエイ} great wind-mills ^{グレイト} lift ^{ウインドミルズ} their arms ^{リフト} against the sky.
(どちらを眺めても、風車はその腕木を空に向けて上げてゐます)。

- ⑤ You cannot succeed in anything, ^{サクスイード} whatever ^{エニサイン} it ^{ウオツテゴア} may be, unless you have perseverance.
(何事にも成功しない、^{アンレス} 忍耐 ^{パスイゴイアランス} を持たなければならぬ)。

sunshine [sʌnʃaɪn] 日光。 shadow [ˈʃædəʊ] 陰。 practical purpose [ˈpræktɪkəl] [ʃaɪn] 實用向。 try [traɪ] 試みる。 finish [fɪnɪʃ] 仕上る。 wind-mill [wɪnmɪl] 風車。 arms [ɑ:mz] 腕。 perseverance [pəˈsɪvɪərəns] 忍耐。

(忍耐がなければ、どんな事にも成功はしない)。

- ⑥ ^{フーエゴア} Whoever ^{ブレイク} may break this law ^{ロー} he will be ^{パニッシュト} punished.
(誰がこの法律を犯すとも處罰せらるべし)。

(誰がこの法律を犯すとも處罰せらるべし)。

Whether~or (not) = { 「~かどうか」
 { 「~であらうがなからうが」

- ⑦ I don't know ^{ウエチア} whether ^{イレクテイツド} he will be elected an ^{エムピー} M.P. or not.
(彼が代議士に當選するかどうか知りません)。

As long as = (～の間)

- ⑧ ^{ストレインヂ} These two strange friends ^{ふれンヅ} stayed together ^{ステイド} as ^{タゲチア} long as they lived.
(これ等の不思議な二人の友達は生きてゐる間中一緒にゐました)。

So long as = 「～の限りは」

- ⑨ ^{マタズ} It matters comparatively little ^{カムバラテイブル} what a healthy ^{ヘルスイ} man ^{イート} eats, so long as he does not eat too much.
(健康な人は食ひ過ぎない限りは何を食ふとも比較的かまわない)。

As = though (～とはいへ)

As が though の意に解される場合がある、それは次の如き文の形を備へた時である。

break [breɪk] 破る。 law [lɔ:] 法律。 elect [ɪˈlekt] 選ぶ。 strange [streɪndʒ] 不思議な。 it matters~little=it does not matter [mætə] 構はない。 comparatively [kəmpeɪrətɪvli] 比較的。 healthy [ˈhelθi] 健康な。

名詞(冠詞なき)
形容詞
副詞
過去分詞

} + as ~ = though ~

⑮ **Much as** sheep look alike, there is a difference between them.

(羊は大變よく似てゐるけれども、彼等の間には差異がある)。

⑯ **Surrounded as** he was by the enemy, he was not afraid. (過去分詞)

(敵に囲まれてゐたけれども彼は恐れなかつた)。

⑰ **Heroine as** she was, she wept at the news of her son's death. (名詞)

(流石の女丈夫も息子の死を聞いて泣きました)。

第八章 Preposition (前置詞)

① The book is **on** the table.

(その本は卓子の上にある)。

② I went **to** Osaka **with** my father.

(私は父と大阪へ行つた)。

Preposition (前置詞) は、名詞や代名詞の前に置いて、他

look alike [似てゐる]。 difference [dɪfərəns] 差異。 surround [səraʊnd] 囲む。 enemy [ɛnɪmi] 敵。 afraid [əfráɪd] 恐れる。 heroine [hérouin] 女丈夫。 news [nju:s] 知らせ。 death [deθ] 死。 **Preposition** [prepeziʃən]。

の語との関係を示すもので、その名詞又は代名詞を前置詞の目的語と云ふ。上例①の“on”は book と table との位置の関係を示すものであり、②の“to”は went と Osaka との関係、“with”は went と my father との関係を示してゐるのである。

前置詞は日本語の「テニオハ」に相當するものであるが、その数は「テニオハ」どころでなく、中々多い。且つ動詞や形容詞には夫々其次に伴ふ前置詞が一定してゐるし、同一語でも種種の前置詞が附いて皆異つた意味を表はすから非常に面倒なものであるが、此處では普通使用されてゐる前置詞を掲げることにする。

(1) 時に関する前置詞 at, on, in

① I get up **at** six o'clock.

(僕は六時に起きる)

こんな風に **at** は時間を表はす場合に用ひられる。次の様な成句には **at** を用ひる。但冠詞 **the** を用ひない。 **at noon** (正午), **at night** (夜分に), **at dawn** (夜明に), **at midnight** (真夜中に)。

② (A) I came home **on** Sunday.

(僕は日曜に帰宅した)。

(B) I started **on** the 7th of December.

(僕は十二月七日に出發した)。

こんな風に **on** は日を表はす場合に用ひられる。所が次の二つを比較して下さい。

① **in** the morning. ② **on** the morning of 11th.

dawn [dɔ:n]. **midnight** [midnait].

一般に「朝」と云ふ時には at でなく “in” を用ひる慣例になつてゐるが、「十一日の朝」の如く、ある日の朝を指す時には on を用ひる。これと同様に

① at night. ② on the night of 10th. と云ふと、一般に「夜分」と云ふ時には at を用ひるが、「何月何日の夜」と云ふ時は “on” を用ひる。

③ I entered ^{エンタド} this school ^{エイブラル} in April, in the 12th year of Showa.

(私は昭和十二年の四月にこの學校に入學しました)。

こんな風に in は「月」を表はす場合や、「年」を表はす場合に用ひられる、尤も「何年何月何日」と月日を云ふ時には月の名には in でなく “of” を用ひる。例へば、十二月十日と云へば on the 10th of December で、on the 10th in December とい言はない。尙次の成句には in をつけて定冠詞を必要とする。

in the morning; in the evening; in the afternoon.

(2) 場所に関する前置詞 at, in, in front of, behind

① I was born in Tokyo. (僕は東京で生れた)。

② I live at Shiba, Tokyo.

(僕は東京の芝に住んでゐる)。

(1) では at は時間に、in は年月に用ひるのだと述べた。場所を表はす場合にも此れと同様な區別がある。即ち狭い場所には at を用ひ、広い場所には in を用ひる。

① I arrived ^{アライブド} at Kamakura.

(私は鎌倉へ到着しました)。

② I arrived in Manchuria.

(私は滿洲に到着しました)。

尙、この到着すると云ふ言ひ方には次の三通りある。

① We arrived at Hakone this morning.

② We got to Hakone this morning.

③ We reached ^{リーチト} Hakone this morning.

(吾々は今朝箱根に到着せり)。

つまり “arrive” には at か in を, “get” には to を用ひ, “reach” には前置詞は不要である。これは arrive と get は自動詞であるから目的語を取ることが出来ないから at, in, to 等の前置詞の力を借りて目的語を取るのである, reach は他動詞だから、いきなり目的を取つてもよいからである。

④ There is a stationer's shop ^{ステイシヤナズ ショップ} in ^{フロント} front of our school.

(私共の學校の前には文房具屋があります)。

⑤ There flows a river ^{フロウズ} behind ^{ビハインド} that building ^{ビルディング}.

(あの建物の後には川が流れてゐる)。

(~の前には) には “in front of” を用ひ, (~の後には) には “behind” を用ひる。元來前置詞は一語のものが多いが, in front of の如く三語から成り立つて一の前置詞の役目をしてゐる様な場合もある。

(3) 時を表はす前置詞 till, by, since, for

arrive at [又は in], get to, reach [到着する]。stationer's [stéiʃənəz] 文房具屋の。flow [flou] 流れる。building [bildig] 建物。

- ① He will stay here ^{ステイ} till ^{ウエズデイ} Wednesday.

(彼は水曜^{まで}ここに滞在する)。

- ② He will arrive here ^{アライブ} by ^{ネクスト} next ^{マンデイ} Monday.

(彼は次の月曜^{まで}には此處へ到着するだらう)。

till は「まで」の意で繼續を表はし、by は「までには」の意で、ある事件がその頃までに完了してある事を表はす。

- ③ I have been playing tennis ^{プレイイン} since ^{テニス} this morning.

(今朝^{から}テニスをしてゐた)。

since は「以來」とか「から」と云ふ意味で、繼續を表はす。従つて、since を用ひた文には現在完了形を使ふ場合が多い。又 since の前に“ever”を使つて ever since の様に用ひられる事がある。これは「~から始終」と云ふ事である。

We have lived in Kobe ever since we came to Japan.

(私共は日本へ來て^{から}始終神戸に住んでゐます)。

- ④ I have been ill for a week.

(私は一週間病氣でした)。

for は「何日間」、「何年間」の「間」の意味に用ひられる。

- (4) 時間に関する前置詞 during, for, in, within, before, by.

- ① I stayed at Hakone ^{デウアリ} during ^{ブアケイシャン} the vacation.

(休曜中箱根に滞在した)。

- ② I made a trip ^{メイド} for ^{トリップ} a ^{フオートナイト} fortnight.

(私は二週間旅行した)。

during [dju:erig]. vacation [vəkeiʃən] 休暇。 make a t i [旅行する]。 fortnight [fɔ:tnait] 二週間。

during は「~中」、for は「~間」と云ふ場合に用ひる。

- ③ He will come home in two days.

(彼は二日^{すれば}歸ります)。

- ④ He will come home ^{ウイカイン} within two days.

(彼は二日^{以内に}歸ります)。

in は(~すれば)、「~經てば」の意であるが、within は「~以内に」、「~經たぬうちに」の意。

- ⑤ I shall come back ^{バック} before ^{ビフォー} six.

(六時^{前に}歸つて來ます)。

- ⑥ I shall come back by six.

(六時^迄に歸つて來ます)。

before は「前に」、「~ぬ内に」の意であるが、by は「~迄に」と云ふ意味である。by と till との相違は(3)で述べてある。

(5) 位置に関する前置詞

- ① Kyushu lies in the ^{ウエスト} west of Japan.

(九州は日本の西部^にあり)。

「東部」とか「西部」とか云ふ時には前置詞は“in”を用ひる。此の場合は必ず一方が他方の範圍内に含まれてゐる。例へば、上例、九州は日本の中に存在してゐて、その一部をなしてゐる。この場合は必ず in the ~ of の形式を取るのである。勿論東西南北には the を附す。

in the ^{イースト} east of (東部に) in the ^{ウエスト} west of (西部に)

in the ^{サウス} south of (南部に) in the ^{ノーサ} north of (北部に)

south [sauθ] 南。 north [nɔ:θ] 北。

② Kyushu lies to the west of Honshu.

(九州は本州の西に當る)。

(西に當る), (東に當る) と云ふ場合には前置詞 “to” を用ひる。この場合は必ず一方が他方の範疇外に存在してゐる。上例, 九州は本州の一部ではなく, 本州以外に存在してゐる。そしてこの場合には必ず “to the~of” の形式を取るのである。尤もこの場合には to the を略して次の如く云ふ事も出来る。

Kyushu lies west of Honshu.

③ Atami lies in the coast of Izu.

(熱海は伊豆海岸にあり)。

“on” は物の面に接し, 又は線に沿ふてある場合に用ひる。例へば

My house stands on the Sanyodo.

(僕の家は山陽道に沿ふてゐる)。

これと反對に離れてゐる場合には off を用ひる。従つて off は「沖」と云ふ意味にもなる。

The ship went down off the coast.

(船は沖で沈んだ)。

④ Go right along the road.

(この道を真直ぐお出なさい)。

along は長いものに「沿ふて」の意である。along は “go, walk, ride” などの運動の動詞と共に用ひられることが多い。又 along が “with” を伴ふと「一緒」と云ふ意味にもなる。

Mr. Toda went to England along with his father.

(戸田君はお父さんと一緒に英國へ行つた)。

coast [koust] 海岸。 right [rait] 真直ぐ。 road [roud] 道。

(6) 位置を表はす前置詞 (續き)

① Mother divided the cake between the two boys.

(母は二人の子供に菓子を分けてやつた)。

② Mother divided the cake among us three.

(母は吾々三人に菓子を分けて下さつた)。

between も among も共に「間」と云ふ意味であるが, between は「二つのものゝ間」, among は「三つ以上のものゝ間」と云ふ場合に用ひる。それからもう一つ「大きなものゝ間」と云ふ時には “in” を用ひる。

He was hidden in the forest.

(彼は森の中に隠れてゐた)。

③ There is a cherry-tree by the well.

(井戸の傍に櫻の木がある)。

④ I live near the station.

(私は停車場の近くに住んでゐる)。

by は「傍に」, near は「近くに」と云ふ意味である。「すぐ傍に」とか「すぐ近くに」と「すぐ」の意を表はすには, “close by” とか “quite near” と云ふ。

① She lives close by the river.

(彼女は川のすぐ傍に住んでゐる)。

② I live quite near the police-station.

(私は警察署のすぐ近くに住んでゐる)。

divide [diváid] 分ける。 hide [haid] 隠れる。 forest [fórist] 森。 cherry-tree [tʃéritri:] 櫻の木。 police-station [pəli:stéiʃən] 警察署。

⑤ There is a roof ^{ルーフ オウボア} **over** ^{ヘツツ} our heads.

(頭の上に屋根がある)。

⑥ The sun shines ^{サン シヤインズ アバズ} **above** ^{ホライズン} the horizon.

(太陽は地平線の上に昇る)。

above も **over** も「上」と云ふ意味であるが、**above** はあるもの、「上」と云ふ事で高さに関し、**over** は上を蓋ふ意に用ひる。尙 **over** には「越へる」の意味があつて、(上)+(運動)を表はすことがある。

The burglar ^{バークラ クライムド} climbed ^{フェンス} **over** the fence.

(泥棒は塀を乗り越へた)。

above と **over** には大體上の如き區別があるが、時には **over** の代りに“**above**”を用ひる事がある。

A hawk ^{ホーク フライイン} is flying ^{ウッド} **above** (=over) the wood.

(森の上を鷹が飛んでゐる)。

⑦ There is a dictionary **on** the desk.

(机の上に辞書がある)。

on も **above**, **over** と同様「上」の意であるが、**on** は「上にのせてある」即ち物の面に接してゐる場合に用ひる。

There are many flies ^{フライズ} **on** ^{スイーリン} the ceiling.

(天井に澤山蠅がゐる)。

(7) 間違ひ易い前置詞

① That box is made of ^{ペイパ} **paper**.

roof [ru:f] 屋根。 horizon [horáizn] 地平線。 burglar [bɜ:g'lə] 盗棒。 fence [fens] 塀。 hawk [hɔ:k] 鷹。 fly [flai] 蠅。 ceiling [si:lɪŋ] 天井。

(あの箱は紙で造つてある)。

② Sake is made from ^{ライス} **rice**.

(酒は米で造る)。

同じ「造る」でも、**made** の次に“**of**”を使つた時と、“**from**”を使つた時と區別がある。①〔箱は紙で造る〕の様に紙で箱を造つても紙の形こそ變れ、その性質には少しも變りはない。こんな風に材料として用ひられ、ただ形が變化する場合には **of** を用ひ、②〔酒は米で造る〕の様に、原料として用ひた米の性質が全く變化してしまふ場合には **from** を用ひる。

單に **make** の場合だけでなく、他の動詞、例へば **build** (bild ビルド「建てる」) も同様に使はれる。

That house is built of wood. (あの家は木造です)。

③ This cloth was woven ^{クロース ウイウブン} **by** ^{ハンド} hand.

(その織物は手で織られた)。

④ This letter was written ^{レタ} **with** ^{リトン} pen.

(この手紙はペンで書かれた)。

上例を比較して見ると、同じ「で」でも、一方は“**by**”，一方は“**with**”を用ひてある。その區別は、**by** の方は、働きをするもの、即ち行爲者を表はし、**with** は手段や道具を表はす場合に用ひられる。

(8) 位置を表はす前置詞(續き)

① There were a number of ^{ナムバ} small ships ^{スモール シツプス} **below** ^{ビロウ} the old brige.

(古い橋の下には澤山の小舟がゐた)。

cloth [klɔ:θ] 片、織物。 woven [wɔ:vɪn] は weave [wi:v 織る] の過去分詞。 a number of [澤山の]。 brige [brɪdʒ] 橋。

below はあるものより「下」の意であつて、必ずしも「真下」の意でなくともよいのである。この點は次に述べる **over** に對する語は違ふのである。この語は **above** の「上」に對して「下」と云ふ時に用ひられる。

“**beneath**” は **below** より意味が強く、或る物に觸れて「すぐ下」の意に用ひられる。

You had better place a cushion **beneath** you.

(布團を敷いた方がよいでせう)。

② He stood **under** a tree.

(彼は木の下に立つてゐた)。

under は「真下」の意で、あるものに蔽はれて下にある場合に用ひられる。**over** (真上) に對して用ひられる。

③ He ran **down** the hill.

(彼は山を走り下りた)。

down は「下へ」の意で、“run, walk” などの様な運動を示す動詞と共に用ひられる。この語は **up** (上へ) に對して(下へ)と云ふ時に用ひられ、よく **up and down** と熟語として使はれる。

① We walked **up and down** the room.

(彼は部屋をあちこち歩いた)。

② We ride **up and down** in the elevator.

(吾々はエレベーターに乗つて上下する)。

(9) 特に注意すべき前置詞

had better [~した方がよい]。 **cushion** [kúʃən] 蒲團。 **elevator** [éliveite] エレベーター。

① Smoke came out **at** the window.

(煙が窓から出た)。

上例の“**at**”は「~から」の意で、**through** と同じである。

② The white peaks of the Japan Alps are bright **against** the blue sky.

(日本アルプスの白い峯が蒼空に輝いてゐる)。

against には種々の用法がある。上例の **against** は(~を背景として)の意で、對照を表はしてゐる、ついでに **against** の他の用法を二三擧げて見ると

① Ants store up food **against** the winter.

(蟻は冬の準備に食物を蓄へる)。

上例の **against** は(準備に)とか(用意に)の意。

② They said nothing **against** him.

(彼等は彼の不利なことは何も云はなかつた)。

上例の **against** は(~に不利な)の意。

③ The rain is beating **against** the window.

(雨が窓を打つてゐる)。

上例の **against** は(~に向つて)、(~に對して)の意。

④ He died **of** consumption.

(彼は肺病で死んだ)。

of と云ふ前置詞は普通「の」と譯してゐるが、上例の如き **of** を「の」と譯しては意味が通じない。こんな **of** は(~た

smoke [smouk] 煙。 **peak** [pi:k] 峰。 **bright** [brait] 輝いて。
store [sto:] 貯へる。 **beat** [bit] 打つ。 **die** [dai] 死ぬる。
consumption [kənsəmʃən] 肺病。

めに), (～で) と死因を表はすので, 普通 **die** と云ふ動詞の後に用ひられる。 **from** と云ふ前置詞もやはり **die** の後に用ひられて原因を表はすことがある。この場合死んだ直接原因を表はす。

He died **from** ^{ハンガ}hunger. (彼は餓死した)。

① The boy has eaten **up** the whole cake.

(子供はすっかり菓子を食べてしまった)。

up は普通に「上」を表はす前置詞であるが, **eat up** を「上へ食べる」など譯したらとんでもない事になる。上例の如き **up** は動詞の意味を強めるために用ひたので, 「すっかり」, 「のこらず」と云ふ意である。普通 **eat** (食べる), **drink** (飲む) などの動詞と續けて用ひるとこんな意味になる。「**out**」と云ふ前置詞もよく「すっかり」と云ふ意味に用ひられることがある。

I am **tired out**.

(僕はすっかり疲れた) (= 疲れ果てた)。

但, こんな風に用ひられた **up** や **out** はもはや前置詞ではなく副詞であることに注意せねばならぬ。

第九章 間投詞 (Interjection)

間投詞の事に就ても第一編で述べました。即ち文の中の他の語と文法上の関係なく, 唯だ感情を表はすために随時文の中に挿入するものである。

歡喜—Hurrah! Huzza!

悲哀—Oh! Ah! Alas!

賞讃—Brovo! Well done! Hear! hear!

注意—Lo! Hark! Hush!

呼掛—Hollo! Ho!

驚愕—What! Why! Oh dear! Dear me!

輕蔑—Pooh! Pshaw! Bah!

訣別—Good-bye! Farewell! Adieu!

歡迎—Welcome! Hail to you!

哄笑—Ha! ha!

疑惑—Hum! Hem! Humph!

[THE END = 終り]

hurrah [hurá:] フラー, 萬歳。 **huzza** [huzá:] = **hurrah oh** [ou]。 **ah** [a:] あゝ, おう。 **alas** [alá:s] まあ悲しいかな。 **bravo** [brá:vou] でかした。 **lo** [lou] 見よ, あれ。 **hark** [hɑ:k] しつ, あれ, 聞け。 **hush** [ʃ:] しつ, 静にしる。 **hollo** [hólou]。 **ho** [hou] ほう。 **Oh dear!**; **Dear me** [おや, あらまあ]。 **pooh** [pu:] ふゝん, 馬鹿な。 **pshaw** [pʃə:] なんだ。 **bah** [bɑ:] なんだ, 馬鹿な。 **adieu** [ədjú:] さよなら, ごきげんよう。 **hail** [heil] 萬歳。 **ha** [hɑ:] はあ, あゝ。 **hum** [ham] えへん, うふん。 **hem** [hm] えへん, ふむ。 **humph** [hamʰ] ふゝん, ふうん。

昭和14年9月20日第1版印刷
昭和14年9月28日第1版發行

M. Takakashi

著 者 高 橋 盛 雄

發 行 者 照 井 健 伍
東京市神田區神保町二ノ五

印刷者及ビ 愛 光 堂 印 刷 社
印刷所 社 主 岩 本 米 次 郎
東京市赤坂區青山南町二ノ一六

發 行 所

太 陽 堂 書 店

東京市神田區神保町二丁目五番地
電話九段一九四四番・振替東京三一七二五番

◇ 自 修 者 の 英 文 法 ・ 定 價 一 圓 五 十 錢 ◇
(外地定價一圓六十五錢)

東京外國語學校元講師
高橋盛雄先生の十大名著

THE BASIS OF
ENGLISH LANGUAGE

初學者に絶對的理想の参考書

親切で斬新な説明と挿繪の豊富な
事、而して印刷の鮮明と、相俟つて絶
對的他書の追從を許さぬ良書。



寫眞に示す各書の内容及び其の
定價送料等本書の卷末に記載あり

發行所 東京市神田區神保町2ノ5 振替東京三一七二五番 太陽堂

IMPORTANT WORDS AND PHRASES FOR BEGINNERS

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

初年生の英単語と熟語

(最新刊) [四六判美装 460頁, 定價 1.50, 送料 15]

初年生の英語・英作文・英文法の姉妹篇

英語の単語、熟語に関する上級生用参考書は数へきれぬ程、澤山の數に上つてゐるが、初年用のものは極めて少い、否適當なものがないと云つてよい位である。英語の単語と熟語は上級生には絶対に必要で、初年生には不要のものだとされてゐる感がある、矛盾も甚だしい次第である。中學上級生や卒業生が比較的六ヶ敷い、あまり日常使用されない語は知つてゐるが、誰でも知つてゐなければならぬ語を知らなかつたり、又その活用を間違へる者が澤山あるのは何故だらうか、これは初年級時代に単語と熟語を等閑視した爲である。

初年生参考書には獨特の怪腕を持つてゐると云はれてゐる著者は此の一大缺陷を補はんがため本書を公にしたのである。

本書の特長は一語一語につき或は名詞としての、或は動詞、或は形容詞と各語の有する役目を平易なる例を挙げ説明し、英文和譯は勿論英作文の研究を容易ならしめ、例題に現はれる新語を解註し、同意語、反意語等一語を中心として自由自在に活用せしむるやう編んである。従つて機械的に言葉を覚えねばならぬと云つた風に出来てゐる類書とは全然趣を異にし、自然に知らず識らずに覚えられ、単語の研究に興味を覚えるやうに仕組んである點は一大特色と云つてよい。尙現在使用中の中等學校英語教科書數十種より統計を取り語の使用される度數を一二三順に〔一が最もよく使はれる〕示してある點も本書の誇とする所である。

一年生程度、二三年生程度と二大別してあるので、初年生は勿論の事であるが、上級生にも練習用として大に効果がある事と信ずる、是非座右に一冊備へ置かれるやうお進めする。

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

よくわかる 自修者の英作文

(最新刊) [四六判美装 320頁, 定價 1.50 送料 15]

英作文を初めて學ぶ人の理想的参考書

英作文が難題であると叫ぶ聲を度々耳にするが、英作文は難題なものではない、英文の土臺になる諸形式を會得すれば、何んでもないことだ、たゞそれを度外視して、上級に進んでからいくら勉強した所で土臺の固らない地上に鐵筋コンクリートの建物を建てると同様、いくら努力しても甲斐のない事である。著者は初年生英語の權威者である、この難題だと叫ばれてゐる英作文を誰にでも分り易く、即ち頁を重ねる毎に血となり肉となるやうに懇切に説明し、初學者として容易に理解せしめる爲に編んであるのが本書の大特色である。姉妹篇自修者の英語と共にいやくも英語自修熟達せんとする者には必要飲くべからざる良書たるを疑はない。是非一讀をお勧めする。

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

よくわかる 初年生の英作文

(好評五版) [四六判美装 340頁, 挿繪 108個, 定價 1.50, 送料 15]

第一編(一、二年程度)、第二編(二、三年程度)、第三編(英作文の公式)に分ち ABC 廿六文字の知識を得た程度の初年級諸君なら誰でも分る様に、文の作り方を説明し、一課一課と順を追うて進み、知らず識らずの間に本書を完了する様に編んである。

【特色】 文法上の複雑なる説明を省き、簡單明瞭に然も著者獨得の條項書きに述べてある點などは他の類書に見受けられぬ特長である。

【教材】 教材は中等學校英語科の進度に合はせて編纂した關係上、現行中等學校英作文教科書二十數種より拔萃せるを以て中等學校一、二、三年生に好適の英作文参考書たる事を疑はない。

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

よくわかる 自修者の英文法

(最新刊) [四六版美装 320頁・定價 1.50 送料15]

英文法を初めて学ぶ人の理想的参考書

本書は特に自修者の爲め出来るだけやさしく、わかり易く説明したもので何人にも直ちに英文法の大切な原理公式を會得出来るやう極めて要領よく説明したものである。下の「初年生の英文法」の姉妹篇として著したものであるが、該書より説明を簡単に且つ挿繪を略して320頁に説明し盡したものである。著者の説明は全く要領を得たもので初學者の福音である。

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

よくわかる 初年生の英文法

(最新刊) [四六版美装 505頁・定價 1.50 送料 15]

英文法を初めて学ぶ人の理想的参考書

本書は、初めて英文法を学ぶ人のために、出来るだけやさしくわかり易く書いたものである。固より「初年生の英文法」のことであるから、極めて大切なことの外は省略してあるが、今までの多くの文法書が、品詞の説明に力を入れて、肝心の「文」の説明に粗略である弊を本書では完全に補つてある。即ち英文の組立、其各部の要素に對する概念を得て、それからおもむろに、各品詞の研究の順序にと云つた風に編纂したもので、著者獨特の簡單で要領を得た然も懇切なる説明ぶりは、初學生諸君が必ず満足し學修し得る良参考書たる事を疑はぬものである。眞の初學者無二の良書。

THE BASIS OF ENGLISH LANGUAGE

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

よくわかる 自修者の英語

[四六版美装 350頁・口繪1・挿繪50・定價1.50 送料15]

英語を初めて学ぶ人の理想的参考書

本書は自修者の英作文、自修者の英文法の姉妹篇である、初年生英語の權威である著者が初學者をして最も容易に理解せしむる様苦心した結晶である。ABCの正確なる読み方から始り萬國音標文字の説明は勿論の事、日本假名併用の工夫を加へ、アクセント、消字等英語入門に必要な事項は細大洩らさず述べ、基本文は煩雜事を避け簡單要領にして誰でも分るやう編輯し、初年生に必要な英文の土臺となる諸形式を理解せしめ、この基本文を土臺として應用篇では英作文と英文解釋の總仕上げの出来るやう極めて秩序正しく編んである。要するに易から難へと漸進し知らず識らずの間に樂々と英語を物になし得る一大快著である。要するに「初歩英學生諸君の最良師友、即ち手八丁、口八丁」とは、此の書物のこと、是非本書をお求めになつて愉快に勉強を續けられるやうにお薦めいたします。

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

好十五
評版

英文和譯 英文法 英作文 初年生の英語

[四六判539頁、口繪一枚・石版一枚・發音圖74個]

[挿繪54個・定價 1.50 送料 15]

【第一編】英語の學び方と英語の發音 英語學習者への一番近道の「ローマ字の説明」より初め「ABC廿六文字」の名稱とその音との連絡を示し、その得たる知識を土臺とし「萬國音標文字」の研究に入り「知らず識らずのうちに學習出来るやうに編纂」【アクセント・消字】と微に入り細をうがち、最後に「英語の書き方」が説明してあります。

【第二編】基本文 は、初學者に必要な飲くべからざる材料を現行中等學校教科書五拾幾種より集め、組織的に、低級より上級へ、反復又反復主義を採用、何ん等の疑問を残す事なく「英文の解釋」より「英文法」、【英作文】へと詳細にわたり説明がしてある。

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

テスト式・二三年の 新 英 文 解 釋

〔最新刊〕〔46版 446頁・定價 1.50・送料 14〕

本書は英語界の大勢に順應して、中等學校二三年程度の學生なら、誰にでも容易に分るやうに、編纂したものである。英語學習に於ては、何人と云つてもその中心となり、根本となるものは、英文の解釋力の涵養である。而して英文の土臺となり、基本となる形式は、二年乃至三年用の教科書に於て、殆んど盡きて居るのである。本書はかゝる見地より、二年三年に於て、是非學ばねばならぬ必要な事項、即ち英文の基本的形式・英文の公式・熟語・主語と述語・動詞の種類・前置詞や冠詞の用法等に就き、詳細なる説明と、實際初學生の陥り易き語謬とを指摘し、以て讀者の實力養生を企圖した。教材は中等學校新教授要目に據る現行リーダー六拾種より拔萃し、且つ参考のため、高等專門學校入學試験問題小數を選択した。比較的好參考書に恵まれざる中級學生諸君に取り、絶好の參考書たることを疑はぬ。

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

テスト式・二三年の 新 英 作 文

〔最新刊〕〔四六版美裝 400頁・定價 1.50 送料14〕

テスト式・二三年の**新英文解釋**を公にし江湖の絶大なる好評を得たる著者は姉妹篇として**新英作文**を公刊す。二三年生の中級生諸君の一大福音書たるを疑はず。

本書は英語界の大勢に順應して、中等學校二三年程度の諸君の爲に成るべく平易な抜題を選び、且つ二三年程度の讀者なら誰でも分るやう、著者獨特の説明ぶり、實にかゆい所へ手の届くやう述べてある。二三年に於て必要な事項、即ち英文の基本的形式、主語と述語、動詞の種類、テンス、關係代名詞、前置詞や冠詞の用法等に就き細大洩らさず説明、初學者の陥り易い語謬を指摘し讀者の實力養成を企圖せる點など他類書の見受けられぬ一大長を有してゐる。初學者は勿論、温古知新の知識を得る意味に於て上級生にも必須の英作文參考書である。是非一讀せられん事を勧めする。

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

ABC から かなつき英米會話

〔最新刊〕〔新四六版458頁 挿圖100個一定價1.80 送料 9〕

初等英語會話研究者への一大福音

本書は初年生英語の權威者であり、英語會話に就ては名著數點を公刊し**新界に其名ある著者の獨得な編纂**になれる快著である。

第一編は ABC 廿六文字から始め英語發音の正確なる仕方を述べ
第二編に於ては**英語基本文約六十型**を示し、極めて丁寧に誰にでも分り易く説明し、英語の土臺を明瞭に理解せしむるやうに親切味たっぷり、類書には見られない特長である。

第三編は英語會話に關する重要語句の説明
第四編は日常會話の簡單なる重要語句とし、易より難へと順を追うて英語知識の土臺を築き上げ、此等の知識を基として

第五編 社交會話—**第六編 實用會話**
を以て終り、所謂英語研究に苦しむ士の指針たらしめたもので、讀み方は勿論、文の上げ下げに到る迄著者獨得の腕が振つてある、是非一讀をお進めする。

バチエラ 田中路三先生著
オブ・アーツ

微笑・英語社交會話の手引

〔最新刊〕〔36版 300頁 挿圖72個一定價1.50—送料9〕

從來の所謂「かなつき英會話」といふ書物はたゞ漫然と高級な英會話にカナを附けただけで、必要な語句の用法も説明も記してない。しかもそのカナたるや、實際には役に立たないものだ。例へばどの書物を見ても Good afternoon は「グッドアフタヌーン」だし、How are you? は「ハウアルユー」 Not at all. は「ノットアットオール」 I am glad to see you. は「アイアム グラッド トウ シー ユー」だ。ところが實際の會話では Good afternoon は「グダーフタヌーン」 How are you? は「ハウェ」 Not at all. は「ノタトー」 I am glad to see you. は「アイムグラタシーユ」で必しも辭書の發音通りに言はない。

本書は在來の非實用的なかなつきの英會話書とちがつて實際に英米人の紳士淑女の話す通り極めて上品にカナを附け、日常最も必要な實用會話の基礎となる語句の用法をくわしくわかり易く説明し、いかなる初學者にも解るやうに巧みに仕組んである。しかもその説明の巧みさ面白さは讀者をして思はず破顔一笑せしむること請合ひだ。微笑しながら何んの苦もなく直ぐ役に立つ會話を學びたいと思ふ人へ敢てお勧めする。

バチエラ 田中路三先生著
オブ・アーツ

英語會話の手ほどき

(最新刊) [36版302頁・挿圖75個・定價1.50, 送料09]

近來急激に會話熱が勃興して來たが折りも折り次期オリンピックが東京開催と決定するや更に熾烈を極め今や老幼男女を問はず何人も英會話を習ふ状態である。然し勤務時間や仕事の關係上、直接教師に就いて學び得るものは極めて少數に過ぎない。本書は特にさうした人々の爲めに直接先生に就いて學ぶと同様の効果を擧げる様苦心の結果成れるもので、初めて英會話を學ぶ人によく分るやう、極めて平易に懇切に説明してあるばかりでなく、從來の會話書では全然顧みなかつた文句や言葉の用法に付いて特に詳しく説明してある。カナ付きの初學者向き會話書も既に多種出て居るが多くは單に高級な會話書にたいカナを付けたに過ぎないやうなものばかりであるが本書はそれ等とは全く異つた内容のもので、眞に初學者の手ほどきとなるべきやう極めて親切な分り易い初歩の會話書である。

大阪外國語學校 小川 正先生著
元 教 授

ハンデイ英米會話

(好評三版) [新四六判 406頁, 定價 1.50, 送料 10]

本書は「手軽に直ぐ役に立つ」ことをモットーとしたものである、従つて内容の最も新らしきこと、必要に応じて各自の求むる各種各様の場面の活きた會話の實例が自由自在に見出せること、又各項目に涉り注意すべき事柄を説明し、いかなる場合に於いても支障なく直ちに應用し役立つやうにした、最も手軽で、しかも要領を得た最新最良の會話書である。

上級英語批評「ハンデイ英米會話」は從來の英語會話書の短を補つて編纂されたものにして、諸君の一讀を奨めて止まないもの一つである。同書は時代の要求に應じ、材料の選擇に留意し、斬新なるものを採り、實際的なもの、趣味深きものが選んである。尙邦人の陥り易き文法上の難點を要所々々に解釋して、英語と米語とを混用せぬやう區別してあり、更に風俗習慣禮儀作法等も折々に委しく説明されてあるから必ず學習者諸子の満足を得ることが出来ると思ふ。

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

生ける英米會話

(最新刊) [新四六版 593頁, 挿圖 127個, 定價 2.00 送料 18]

本書の特長を略説すれば ①會話の基礎語句 英語會話に是非必用な用句を説明し ②會話の實際 實際に直面した場合を適切に述べ ③會話の同意句を擧げて會話の變化に富ましめ ④説明方法としては懇切丁寧を極め、脚註なども類書に見られない程詳細を極め、邦人の陥り易い點を指摘し、かゆい所へ手の届くやうに説明し ⑤對話的に ⑥或は説明的に 一定の統制の下に會話の研究方法の様式を多種多様に述べ、知らず識らずの内に然も愉快に通讀し得るやう ⑦海外並に日本の實物挿繪を豊富に示し無味乾燥を防ぎ ⑧要所要所に海外の事情風俗習慣等を述べ ⑨題目は日本に居ても海外へ行つても間に合ふやうな材料を取扱ひ ⑩英語と米語とを傾雜に互らぬ程度に區別し 所謂簡單要領を得たる **生きた會話** たらしめたものである。

バチエラ 田中路三先生著
オブ・アーツ

最新・商用英語會話の手引

(最新刊) [36版 280頁 挿圖 100個 定價 1.50 送料 9]

躍進日本を目差して渡來する外人の數は益々激増するばかりである商店員やセールスマン(賣子)は何を措いても先づ殺到する外人客の應接に必要な會話は是非心得て置かねば日本人の恥であらう。本書は四十數種の重要商賣に關して客と店員との對話を載せ、商店員の立場から、いかなる場合にいかなる言葉を以て應對すべきかを幾多の實例を擧げて詳しく説明してある、どんな初學者にも樂々とわかるやうにカナを附け、直接教師に就くのと同一結果を得るやうに新機軸を出したものである。加ふるに各項目にそれぞれ商品名單語を豊富に掲げ尙ほ英米最新の商品の挿畫をも多數載せ、英米の貨幣小切手、受取證の書き方などに至るまで其の心得て置かねばならぬことを詳記してある。一般の商業學校生徒、商店主、セールスマン商店員、其他廣く實際にたづきはる人々には無二の良書である

アーサ・秋山實先生著

ニュースの見方・聴き方・話し方

(最新刊) [新46版340頁・挿圖75個・定價1.80 送料12]

国際間の動きは益々複雑化し、これが直接又は間接に我々の實生活に少なからざる影響を及ぼす時代である。本書は英語研究の立場から英學生は元より新聞關係者、貿易業者、其他一般知識階級の要望に應じて編著したものである。その内容を概説すれば①ニュースの出来る順序 ②記者の立場 ③ニュースを巡る問答式英語會話 ④世界の代表的新聞に關する英文記事 ⑤國際ニュース解説 ⑥トーカー解説 ⑦新聞略語の解説其他政治經濟法律運動等各種の事項を詳細に説明し乍ら隨所に生きた英語會話を豊富に織り込んだ最も新しい試みの會話書である。

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

英米會話六週間

(最新刊) [新四六判美裝320頁・挿圖100個・定價1.50 送料12]

「英米會話の實例と練習」「生ける英米會話」「假名付英米會話」等上下各級に分ち快著數點を公刊し斯界に其名ある著者は、ABCの心得さへ不十分なる者が急に會話の必要に迫られ、最大急行英米會話を會得せんとする人々のために、容より難へ漸進主義に、極めて親切味たつぷりな説明を加へ短日月の間に物に出来るやうに編んである。簡單要領よく煩雜なる項目は避けてあるが、日常生活に必要な項目は全部擧げてある。慾を云へば際限はないが此れだけ心得て置けば恐らく何れの國へ行つても英語會話に困る事はないと信ずる。要するに本書が公刊された事は英會話を速成せんとする人に取り一大福音である。

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

社交文・公用文・短用文 英文手紙の研究

[新四六判, 總頁450頁, 挿圖80圖, 別刷8枚, 定價2.00, 送料18]

英學生並に高專受験生の福音!!

本書は商用文を除いた純社交の英文手紙に就て平易に然も日常事萬事を細大洩らさず説明、内容たつぷり極めて分り易い一大快著である。四分類し、第一分類では**英文手紙の概説と構造法**と題し英文手紙の構造、封筒の書き方、料紙の選擇、署名の仕方などいやくも日常社交に關する英文手紙に必要な事項は細大洩らさず説明し、第二分類は**公用文と短用文**に就き實例を擧げ豊富な脚註を施し兩文に對する一大資料たらしめ、第三分類に於ては**社交文の構成資料、文例、練習**と三分類し、**構成資料**は手紙構成に必須なる短文を列擧し、先づ正確なる短文を會得せしめ、續いて文例と易より難へ進み、日常必要な事項に關する生きた英文手紙の模範文例約百七拾形式を擧げ一々懇切なる註を加へ知らず識らずの間に理解せしめ、その得たる力を、一層強固ならしめるため練習文が豊富に擧げてある。第四分類は名刺の書方、受取證、手形、小切手等諸難題の説明である。文例、練習文、構成資料には最近五ヶ年間専門、高等學校の入學試験問題が幾多織込んである。要するに社交英文手紙の一大長參考書である、是非一讀をお勧めする。

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

かなつき・英文手紙の實際

[新四六判, 總頁350頁, 挿圖50圖, 定價1.80, 送料9]

初學者向きの英文手紙公刊さる!!

「英文手紙の實例と練習」「英文手紙の研究」の二名著でその名ある著者は更に**初學者向きの英文手紙の書き方**を著した。本書は平易で、簡單で、誰にでも分るやうに述べた假名付きの英文手紙の實際を公にしたものである。初級英語に於ても怪腕をふるい好評を得てゐる著者の事であるから、實にかゆい所へ手の届くやうに説明し、初學者の英文手紙の書き方の指針たらしめてある點などは、けだし本書の一大特色であらう、例に依り六つかしい單語に日本假名を併用してある點など何處迄も親切味たつぷりの最良參考書である。

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

初等・英語商業通信文

〔四六判上製295頁、挿圖55個、表紙別刷9枚、定價1.80送料12〕

簡單要領を得て、然も脚註多く親切味たっぷりの本書

英語商業通信文の参考書は数へきれぬ程出版されてゐるが、何れも相當に商業英語通信に關する知識なしでは読み書き消化し得ないため、困難を感じてゐる研究者が多いやうに見受けられる、此等の人々のため簡單で要領を得た然も親切味たっぷりを以て説明したのが本書である。簡單要領を主として編んだものであるからして、短文を擧げ英語の根柢を理解し得るやう特に留意し初學者の最も悩む點の力説に力めた。要するに短文が集つて長文となるので、本書を繰返して通讀、物にせば如何なる商業通信文も容易に理解し得る事を確信する。尙他書で比較的閑却され勝ちな**ハガキ文**や署名に關する事と詳細に述べ其の知識も得られるわけで、本書はいやしくも英語商業通信文を研究せんとする者には誰にでも恰好の指針書である。

東京外國語學校 高橋盛雄先生著
元 講 師

かな付き・英語商業通信文の研究

〔四六版上製280頁、挿圖55個、定價1.80 送料12〕

『商業英語通信文の實例と練習』『初等商業英語通信文』の二名著で、その名ある著者は **初學者向きの商業英語通信文の書き方** を平易で簡單で、要領よく、誰れにでも分るやうに述べたのが本書である、假名付の商業英語通信文の實際を初級英語に於て解し得るやう説いてある、細い點に注意を拂い親切味たっぷりの自修者向きのものである。六つかしい單語へは日本假名を併用し實にかゆい所へ手の届く説明ぶりである。他の追従を許さぬ良参考書たるを信じて疑はない、けだし貿易商店員諸君にはけだし絶好の参考書であらう。

最新刊・好評三版

東京外語元講師 高橋盛雄先生著

社交文・商用文・公用文・短用文

英文手紙の實例と練習

〔新四六判・總頁830頁・挿圖335個・定價3.00・送料.20〕



現代英語の手紙の書き方の類書は各種各様其數甚だ多數に上つて居るが、本書程類書と異つた特徴を有し、本書程親切味たっぷりで、かゆい所へ手の届く様に説明してある書物は滅多にあるまい、其の内容は。

〔第一篇〕では〔英文手紙に關する注意事項〕と題し約百四十頁を費し、日英手紙の相異を述べ、英文手紙の種類、殊に署名約二百五十型を示し、署名が如何に重要であるかを詳説し

〔第二篇〕では普通文即ち社交文の實例約三百を示し、一々練習問題を擧げ知らず識らずの内に英文手紙の作り方を會得せしめ

〔第三篇〕公用文に於ては正式、略式の作例を以てし

〔第四篇〕商用文では商用文の雛形、Letterhead の雛形數十種を示し、各部門に分ちてその範例を擧げ、之も一々練習問題を附して置いた。

〔第五篇〕は短用文である。普通文、商用文約六十の範例を以てし、主として葉書の書き方を會得せしめ

〔第六篇〕では履歴書の書き方、受取證、小切手、手形、電報の打ち方、廣告、コード、ブックの使用法、名刺の書き方等かゆい所へ手の届く様に説明して置いた。

要するに本書は、從來の英文手紙の参考書の弊を除き、眞正の英文手紙の書き方を述べたつもりである。

[太陽堂の語學書目録]

		定價	送料
アーサ・秋山著	ニュースの見方・聴き方・話し方	1.80	15
田中路三著	英語會話の手ほどき	1.50	9
同 著	微笑・英語社交會話の手引	1.50	9
同 著	商用英語會話の手引	1.50	9
高橋盛雄著	かな付き・英米會話	1.80	12
同 著	英米會話六週間	1.50	9
高橋盛雄共著 ベトレー	英米會話の實例と練習	3.50	21
高橋盛雄共著 アガシ	商業英語會話の實例と練習	3.50	21
高橋盛雄著	生ける英米會話	2.00	15
小川正著	ハンデイ英米會話	1.50	15
<hr/>			
高橋盛雄共著 ベトレー	ローマ字・新々英米會話	5.00	21
高橋盛雄著	ローマ字・實用英米會話	3.00	9
同 著	ローマ字・日本語研究	3.00	9
同 著	ローマ字・英和新辭典	4.00	15
同 著	ローマ字・和英新辭典	4.00	15
同 著	同 英和・和英(合本)	8.00	21
<hr/>			
高橋盛雄著	英文手紙の實例と練習	3.50	24
同 著	英文手紙の研究	2.00	15

[太陽堂の語學書目録]

		定價	送料
高橋盛雄著	かな付き・英文手紙の研究	1.80	9
同 著	初等英語商業通信文	1.80	14
片岡彦一郎共著 高橋盛雄	商業英語通信文の實例と練習	3.50	24
<hr/>			
小村實著	生ける獨逸語會話	1.50	9
小村實著	獨逸語會話の基準と實際	3.00	21
鈴木信次郎著	生ける佛蘭西語會話	1.50	9
山本・鈴木共著	佛蘭西語會話の實例と練習	3.00	21
井上敬一著	ロシア語會話の手引	1.80	9
八杉・井上共著	露西亞語會話の實例と練習	3.50	21
<hr/>			
藤原誠次郎著	初年生の獨逸語	1.60	15
田中允晴著	初年生の獨逸文法	1.60	15
同 著	初年生の獨文和譯	1.60	15
同 著	初年生の和文獨譯	1.60	15
鈴木信次郎著	初年生の佛蘭西語	1.60	15
坂本盛太郎著	初年生のロシア語	1.80	15
高橋盛雄著	初年生の英語	1.50	15
同 著	初年生の英文法	1.50	15
同 著	初年生の英作文	1.50	15

〔太陽堂の語學書目録〕

	定價	送料
高橋盛雄著 テスト式・二三年の新英文解釋	1.50	15
同 著 テスト式・二三年の新英作文	1.50	15
<hr/>		
藤原誠次郎著 基礎獨逸語の研究	1.60	14
鈴木信次郎著 基礎佛蘭西語の究研	1.60	14
<hr/>		
高橋盛雄著 自修者の英語	1.50	15
同 著 自修者の英文法	1.50	15
同 著 自修者の英作文	1.50	15
藤原誠次郎著 自修者の獨逸語	1.60	15
同 著 自修者の獨逸文法	1.60	15
同 著 自修者の和文獨譯	1.60	15
同 著 自修者の獨文和譯	1.60	15
鈴木信次郎著 自修者の佛蘭西語	1.60	15
<hr/>		
室田義仁著 獨逸語ABCから會話まで	1.60	15
同 著 佛蘭西語ABCから會話まで	1.60	15
桃井鶴夫著 獨逸語ABCの讀み方から	1.30	12
同 著 佛蘭西語ABCの讀み方から	1.30	12
石黒修著 エスペラントABCの讀み方から	1.30	12



終